

浅川扇状地遺跡群

YOSHIDA-YOTSUYA SITE

# 吉田四ツ屋遺跡

浅川扇状地遺跡群

MIWA SITE 6th

# 三輪遺跡(6)

NATSUMEGAWARA SITE

# 棗河原遺跡

1996・3

長野市教育委員会

## 序

平成5年3月、上信越自動車道の開通は長野市にとって高速交通網時代の到来を感じさせる出来事でありました。長野市の玄関口とも言える長野ICの開業は周辺地域の開発に拍車をかけ、従来停滞していた道路整備などがいたるところで活発に行われております。加えて北陸新幹線建設に伴う工事も各地で急ピッチで進められており、その長大な高架橋が市街地にも現れ、長野市の景観も変貌の一途をたどっております。そして、開催を2年後に控えた長野冬季オリンピック・パラリンピックの会場や競技施設、またそれらをつなぐ道路整備も着々と進んでおり、開催を心待ちにし、成功を願っているところであります。

しかしながら、これらの著しい開発状況下において地中に埋もれている貴重な歴史、埋蔵文化財が犠牲となっていることも忘れてはならないでしょう。私たちはその開発行為により失われてしまう埋蔵文化財の保護・保存・活用・公開という大きな責務を担っております。

ここに長野市の埋蔵文化財第75集として刊行いたします本書には、このたびの各地区における発掘調査で得られた成果が詳しく掲載されております。長く綴られてきた歴史の中のほんの一部に過ぎませんが、広くご活用いただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力並びに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました関係各位、発掘作業に携わっていただきました発掘作業員の皆様、また報告書刊行に至るまでご支援ご指導いただきました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

長野市教育委員会  
教育長 滝澤 忠男

## 例 言

- 1 本書は、民間宅地造成事業「グランドハイツ北長野開発事業」に伴う『浅川扇状地遺跡群吉田四ツ屋遺跡』、市施工事業「長野市三輪保育園改築事業」に伴う『浅川扇状地遺跡群三輪遺跡(6)』及び民間開発事業「日本石油長野インターSS建設事業」に伴う『棗河原遺跡』の3事業3遺跡について、平成7年度に実施した埋蔵文化財緊急発掘調査報告である。
- 2 三輪遺跡以外の発掘調査はそれぞれ、大成産業株式会社代表取締役 竹内伊吉、日本石油株式会社東京地方支店取締役支店長 中原博と長野市長 塚田佐との埋蔵文化財委託契約に基づき、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター担当）が実施した。
- 3 発掘調査地はそれぞれ、長野市吉田4丁目1366ほか、長野市三輪8丁目6-31、長野市篠ノ井西寺尾字下碓2464-3ほかの所に所在している。
- 4 本書作成における作業及び執筆は各調査員が分担して行い、矢口・青木の指導のもと寺島が総括した。執筆の分担は目次に示した。作業の分担は下記のとおりである。

遺物実測	寺島孝典（吉田四ツ屋遺跡、三輪遺跡） 風間栄一（吉田四ツ屋遺跡・埴輪） 飯島哲也（吉田四ツ屋遺跡・玉類） 小林和子（吉田四ツ屋遺跡・奈良時代） 山田美弥子（三輪遺跡の一部、棗河原遺跡）
土器拓本	勝田智紀
遺物図浄書	青木善子
遺構図作成	寺島孝典（吉田四ツ屋遺跡、三輪遺跡） 小林和子（吉田四ツ屋遺跡） 山田美弥子（棗河原遺跡）
遺構図浄書	青木善子・寺島孝典
遺物写真撮影	寺島孝典・飯島哲也
編集・校正	寺島孝典・飯島哲也

- 5 本報告書作成にあたり下記の諸氏また機関より多大なるご教授・ご協力を賜った。御芳名を記し感謝申し上げます。

青木一男 赤塩 仁 赤塚次郎 上田典男 宇賀神誠司 川村浩司 小林秀夫 小林正春 小山岳夫  
桜井秀雄 澁谷恵美子 助川朋広 田嶋明人 田中 裕 土屋 積 直井雅尚 中島庄一 中屋克彦  
贄田 明 西山克己 原 明芳 広田和穂 町田勝則 前島 卓 三上徹也 翠川泰弘 森泉かよ子  
森嶋 稔 矢島宏雄 山口 明 山下誠一 横山かよ子 埴輪研究会（敬称略）

- 6 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター担当）で保管している。

## 凡 例

本書では、各調査によって確認された遺構・遺物について、その基本資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は下記のとおりである。

- 1 地図等に記載した方位は真北、また遺構図に掲載した方位はすべて座標北を表している。なお磁北は、真北より西へ約 $6^{\circ}40'$ の偏差がある。
- 2 遺構の測量は、平面直角座標系の第Ⅶ系（東経 $138^{\circ}30'00''$ 、北緯 $36^{\circ}00'00''$ ）からの座標値と、日本水準原点の標高を基準とし、(有)写真測図研究所の開発したコーディックシステムを援用するため同所に委託した。現場にて $1/20$ 縮尺による基本原図を作成し、本書では基本的に $1/80$ の縮尺で掲載している。ただし遺構の種類によってはこの限りではないため、縮尺を明示してある。
- 3 遺構の名称については、住居跡＝S B、土坑（土器棺墓を含む）＝S K、溝跡＝S D、墳丘墓＝S Zという略号によって記載した。
- 4 住居跡の実測図において、炉またはカマドが明確に判断できるものについては、その部分を網掛けによって表現した。また遺構断面図の標高は、それぞれの遺跡あるいは遺構の検出された地点により異なるため、その基準となる標高を断面図の標高線上に記載した。
- 5 出土遺物に関しては原寸にて実測図を作成し、基本的に土器実測図 $1/4$ 、土器拓影 $1/3$ 、玉類 $1/1$ に統一して掲載した。また吉田四ツ屋遺跡から出土した石器については写真のみを一括掲載した。
- 6 それぞれの遺跡から出土した遺物には、遺跡名の略号をアルファベットに置き換え、これを用いた注記を下記のとおり行っている。

浅川扇状地遺跡群 吉田四ツ屋遺跡・・・A Y T

浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(6) ……A M H

棗河原遺跡 ……N M N

## 目 次

序  
例 言  
凡 例  
目 次

### 浅川扇状地遺跡群吉田四ツ屋遺跡

第 I 章 調査経過	1
第 1 節 調査に至る経過	1
第 2 節 調査日誌抄	2
第 3 節 調査の体制	3
第 II 章 浅川扇状地遺跡群の環境	4
第 III 章 調査成果	6
第 1 節 遺跡の概要	6
第 2 節 遺構と遺物	11
(1) 縄文時代後期	11
(2) 弥生時代中期後半	14
(3) 弥生時代後期	17
(4) 古墳時代前期	23
(5) 奈良時代	32
第 IV 章 総括	37
第 1 節 各時代のまとめ	37
第 2 節 壺形埴輪	40

### 浅川扇状地遺跡群三輪遺跡(6)

第 I 章 調査経過	49
第 1 節 調査に至る経過	49
第 2 節 調査日誌抄	50
第 3 節 調査の体制	51
第 II 章 三輪遺跡周辺の環境	52

第Ⅲ章 調査成果	(寺島孝典)	54
第1節 遺跡の概要		54
第2節 遺構と遺物		56

## 棗河原遺跡

第Ⅰ章 調査経過	(寺島孝典)	65
第1節 調査に至る経過		65
第2節 調査日誌抄		65
第3節 調査の体制		66
第Ⅱ章 調査成果		
第1節 調査区の位置と概要	(山田美弥子)	67
第2節 調査区周辺の環境	(山田美弥子)	69
第3節 遺構と遺物	(寺島孝典)	73

報告書抄録

奥付

## 挿 図 目 次

### 浅川扇状地遺跡群吉田四ツ屋遺跡

第1図	調査地周辺字図	1
第2図	周辺の遺跡分布	5
第3図	調査位置図	6
第4図	第1次調査面全体図	7
第5図	第2次調査面全体図	9
第6図	S B 1 5	11
第7図	S B 1 5 出土土器	12
第8図	S B 1 6 出土土器	13
第9図	S K 2 出土土器	13
第10図	遺構外出土土器①	13
第11図	S B 1 1	14
第12図	S B 1 1 出土土器	14
第13図	S B 1 2	14
第14図	S B 1 2 出土土器	14
第15図	S B 1 3	15
第16図	S B 1 3 出土土器	16
第17図	S B 1 4 出土土器	16
第18図	S B 8	17

第19図	S B 8 出土土器	18
第20図	S B 9・14	18
第21図	S B 9 出土土器	19
第22図	S K 1	20
第23図	S K 1 出土土器	21
第24図	S K 1 出土土器・ 玉類	22
第25図	S B 7	23
第26図	S B 7 出土土器	23
第27図	S B 1 0	24
第28図	S B 1 0 出土土器	24
第29図	S Z 1	25
第30図	S Z 1 出土土器①	27
第31図	S Z 1 出土土器②	28
第32図	S Z 1 遺物出土地点及び 範囲想定図	29
第33図	S Z 2	30
第34図	S Z 2 出土土器	31

第35図	遺構外出土土器②	31
第36図	S B 1	32
第37図	S B 1 出土土器	33
第38図	S B 2	33
第39図	S B 2 出土土器	34
第40図	S B 3・4	34
第41図	S B 3・4 出土土器	35
第42図	S B 5	35
第43図	S B 5 出土土器	36
第44図	S B 6	36
第45図	壺形埴輪実測図	40
第46図	前方後方形周溝墓の変遷 と底部穿孔壺	40

### 浅川扇状地遺跡群三輪遺跡(6)

第1図	調査地周辺字図	49
第2図	周辺遺跡分布図	53
第3図	調査位置図	54
第4図	全体図	55
第5図	S B 1	56

第6図	S B 1 出土土器	56
第7図	S B 2	56
第8図	S B 2 出土土器	57
第9図	S B 3	57
第10図	S B 4	58

第11図	S B 4 出土土器	58
第12図	S B 5	59
第13図	S B 5 出土土器	60
第14図	S B 6	60
第15図	S D 1 出土土器	61

### 栗河原遺跡

第1図	調査地点位置図	67
第2図	既往調査地及び 調査位置図	68
第3図	周辺字図	69
第4図	遺跡分布図	71

第5図	全体図	72
第6図	S B 1	73
第7図	S B 1 出土土器	73
第8図	S B 2	74
第9図	S B 2 出土土器	75

第10図	S B 3	75
第11図	S B 3 出土土器	76
第12図	S K 1・2・3	76
第13図	S K 1・2・3 出土土器	76

浅川扇状地遺跡群

YOSHIDA-YOTSUYA SITE

# 吉田四ツ屋遺跡

グランドハイツ北長野開発事業にともなう

埋蔵文化財発掘調査報告書



# 第1章 調査経過

## 第1節 調査に至る経過

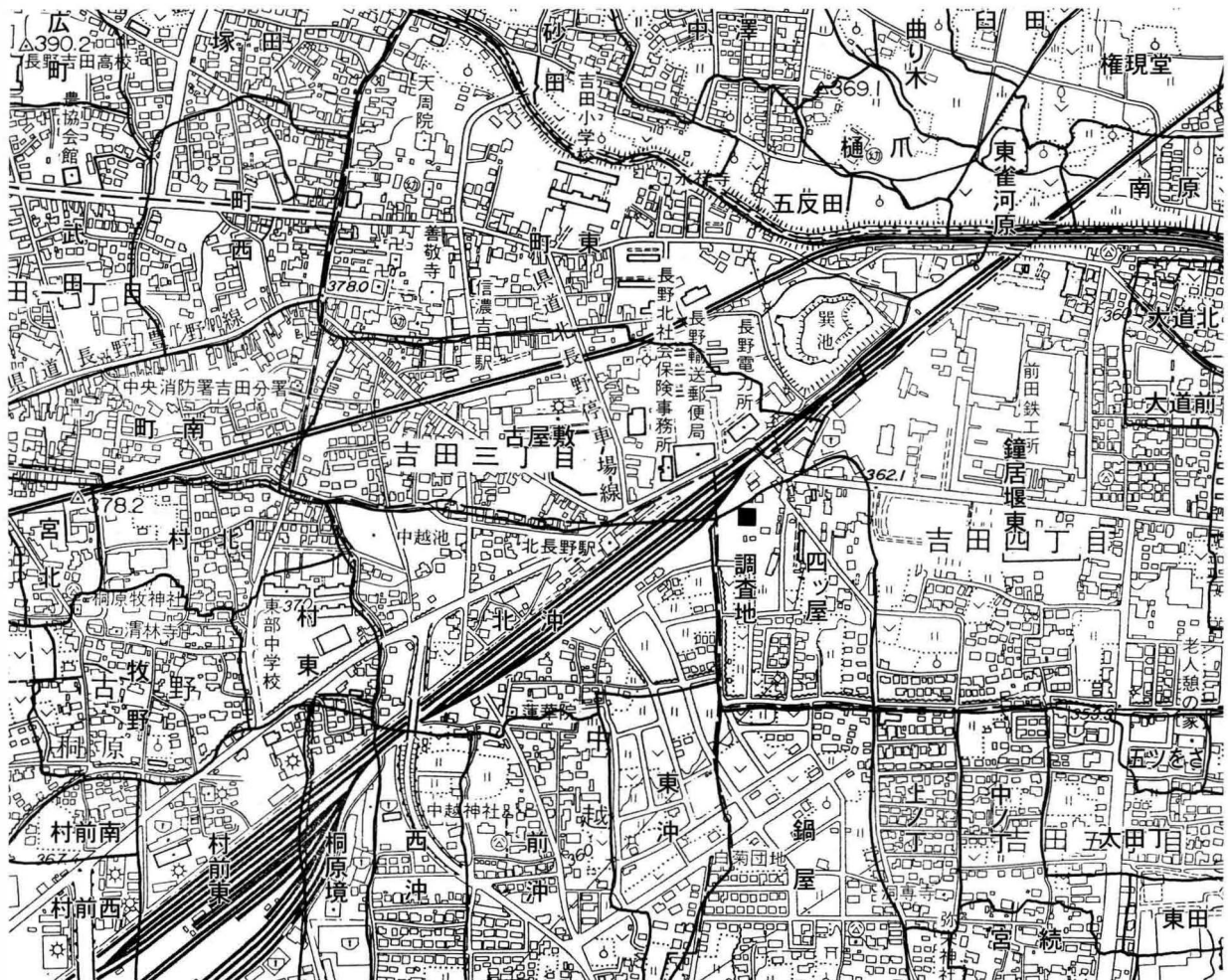
長野市の北部に位置する吉田地区は古くから市街地として機能していたため、周辺地域と比較するとそれほど積極的に新たな開発が行われた地域ではなかった。しかしながら北陸新幹線の建設や大型商業店舗の進出などによってJR北長野駅周辺における再開発事業が計画されるようになり、近年目覚ましい発展を見せつつある。

JR北長野駅の南に建設されていたオイルターミナルの跡地利用として、マンションの建設が大成産業株式会社によって計画され、平成7年1月19日付で当該地の開発行為に関する事前協議申出書が提出された。事業予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「浅川扇状地遺跡群」の範囲内に位置するため、長野市教育委員会は事業主体者である大成産業株式会社と埋蔵文化財保護に関する協議を行い、事前の確認調査を実施するに至った。

確認調査は平成7年2月23日に実施し、予定地内の任意の地点2箇所を試掘坑を設け調査した結果、時代の異なる2枚の遺物包含層を確認した。そのため調査は複数面に及ぶものとなった。

この結果に基づき、マンション建設事業の着手によって埋蔵文化財が破壊される可能性の高い1,300㎡について記録保存を目的とする発掘調査が必要となり、遺構調査面が2面存在したことから最終的な調査面積は2,600㎡となる。

発掘調査は平成7年4月12日に開始し、平成7年6月6日までの実質33日間を要した。



第1図 調査地周辺字図 (S = 1 / 10,000)

## 第2節 調査日誌抄

[平成7年]

4月12日(水曜日)	雨時々晴れ	トイレ搬入、バックホーによる表土剥ぎ。
4月13日(木曜日)	晴れ	表土剥ぎ。
4月14日(金曜日)	曇りのち雨	コンテナハウス搬入。表土剥ぎ。
4月17日(月曜日)	晴れ	表土剥ぎ終了。発掘器材搬入、一次面の遺構検出作業を開始する。
4月18日(火曜日)	晴れ	遺構検出作業。
4月19日(水曜日)	雨のち晴れ	遺構検出作業を開始したが、降雨により作業中止。
4月20日(木曜日)	晴れ	遺構検出作業、SD1・SK1(土器棺墓)掘り下げ。
4月21日(金曜日)	晴れ	SK1掘り下げ。平面図及び断面図の作成、写真撮影。SK1内部より、管玉1点、ガラス玉11点が出土する。
4月24日(月曜日)	晴れ	SB1掘り下げ。SK1完掘。
4月25日(火曜日)	曇り	SB1～4掘り下げ。SB1写真撮影。
4月26日(水曜日)	晴れ	SB1～4掘り下げ。
4月27日(木曜日)	晴れ	SB1～5掘り下げ、SB2・3写真撮影。コーディックシステムによる1回目の遺構測量。
4月28日(金曜日)	曇り	結線。SB1・2・5・6掘り下げ。SB1・2写真撮影。
5月8日(月曜日)	晴れ	SB5・6掘り下げ、SB6写真撮影。午後より二次面調査のため、バックホーによる掘削(西から)を開始。
5月9日(火曜日)	晴れ	SB5写真撮影。掘削の際、大きい平坦な石が多く出土。敷石住居の可能性あり。二次面の遺構検出作業開始。SB11掘り下げ。
5月10日(水曜日)	晴れ	遺構検出作業。SB11・15・SK2掘り下げ。SB11写真撮影。遺構測量2回目。
5月11日(木曜日)	曇り	結線。SB15・SK2写真撮影。SB12掘り下げ。
5月12日(金曜日)	曇りのち雨	遺構検出作業。午後、降雨により作業中止。
5月16日(火曜日)	雨時々曇り	SB8掘り下げ。午後、降雨激しくなり作業中止。
5月18日(木曜日)	晴れ	SB15平面図作成。SB7・8掘り下げ。SB7写真撮影。
5月19日(金曜日)	晴れ	SB8～10・13・14掘り下げ。SB8・13写真撮影。
5月22日(月曜日)	晴れ	SB9・10掘り下げ。SB9・14写真撮影。
5月23日(火曜日)	晴れ	SZ1掘り下げ。(6月1日まで継続)
5月24日(水曜日)	晴れ	SB10写真撮影。
5月25日(木曜日)	晴れ	SZ1底部付近より土器が集中して出土する。
5月31日(水曜日)	晴れ	遺構測量3回目。SZ1・SB16写真撮影。SZ2掘り下げ。
6月1日(木曜日)	晴れ	結線。SZ2掘り下げ、写真撮影。
6月2日(金曜日)	晴れ	SZ1土層断面図作成。器材撤収。
6月5日(月曜日)	晴れ	遺構測量4回目。
6月6日(火曜日)	曇り	結線。本日をもって現場における作業をすべて終了する。

### 第3節 調査の体制

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	滝澤忠男
調査機関	長野市埋蔵文化財センター	所長	丸田修三
		所長補佐	小林重夫
		所長補佐	矢口忠良

庶務係 (係長 小林重夫)  
職員 青木厚子

調査係 (係長 矢口忠良)  
主査 青木和明  
主事 千野浩  
主事 飯島哲也  
主事 風間栄一  
主事 小林和子 (調査主任)  
専門主事 清水武  
専門員 中殿章子  
専門員 山田美弥子  
専門員 寺島孝典 (調査員)  
専門員 西澤真弓  
専門員 小野由美子  
専門員 永井洋一 (平成7年度)  
専門員 堀内健次 (平成7年度～)  
専門員 藤田隆之 (平成7年度～)

調査員 青木善子・矢口栄子・勝田智紀

調査参加者 岩崎寛治郎・岩崎利子・北村宣之・北村幸恵・神頭幸雄・小林紀代美・小林三郎・鈴木友江・  
中村忠彦・美谷島昇・村橋寿美男・横川甚三

整理参加者 相沢婦志子・池田見紀・岡沢治子・勝田千亜紀・小泉ひろ美・関崎文子・多城恵子・田中はま江・  
田中むつ子・徳成奈於子・富田景子・西尾千枝・向山純子・武藤信子・村松正子

測量委託 有限会社写真測図研究所

調査を遂行していくうえにおいて、多くの方々より多大なるご支援ご助力をいただいている。重機の手配やプレハブ・トイレの設置など、様々な面でご協力を賜った大成建設株式会社の関係諸氏、また調査に参加していただいた発掘作業員の皆様に感謝申し上げます。

## 第II章 浅川扇状地遺跡群の環境

長野市北西にそびえる標高1917mの飯縄山を水源とする浅川は、山間部を浸食しながら盆地内に流れ込んだのち流路を南東にとり、富竹地籍付近で方向を北東方向へ大きく変え千曲川と合流する。この浅川を中心とした一帯には広大な扇状地形が形成され、この扇状地上には数多くの遺跡が認められることから、浅川扇状地遺跡群と呼んでいる。当該地は市街地に近いこともあり早くから住宅地あるいは商業地として機能し、これら開発行為に伴ってこれまでに数多くの発掘調査が実施されている。

発掘調査された各遺跡の名称は、各々の調査地点の古字名やその調査場所の通称または名称、あるいは事業名などを用いて遺跡名としている。例えば、平成3年度に実施された長野高等学校校舎改築事業に伴う発掘調査では、調査地点の古字名を採り『浅川扇状地遺跡群本村東沖遺跡』という遺跡名が付けられ、また昭和56・59・60年度に行われた県道長野荒瀬原線建設事業に伴う一連の発掘調査では、この道路が通称「牟礼バイパス」と呼ばれ調査範囲内を便宜的に5区分したことから、『浅川扇状地遺跡群牟礼バイパスA～E地点遺跡』という遺跡名が与えられている。このようにこれまで発掘調査された遺跡名には必ずと言って良いほど『浅川扇状地遺跡群』を冠しているが、これは浅川扇状地遺跡群が広い範囲にわたって非常に密度の高い埋蔵文化財の包蔵状況を示しているにもかかわらず、住宅密集地であることから比較的小規模な発掘調査しか行えないため、各調査によって得られた情報からはそれぞれの遺跡範囲の確定が困難であり、明確な分離ができない状況にあるにほかならない。こういった状況は今後も続くと思われるが、各々の遺跡範囲を確定していくのは将来的な課題である。

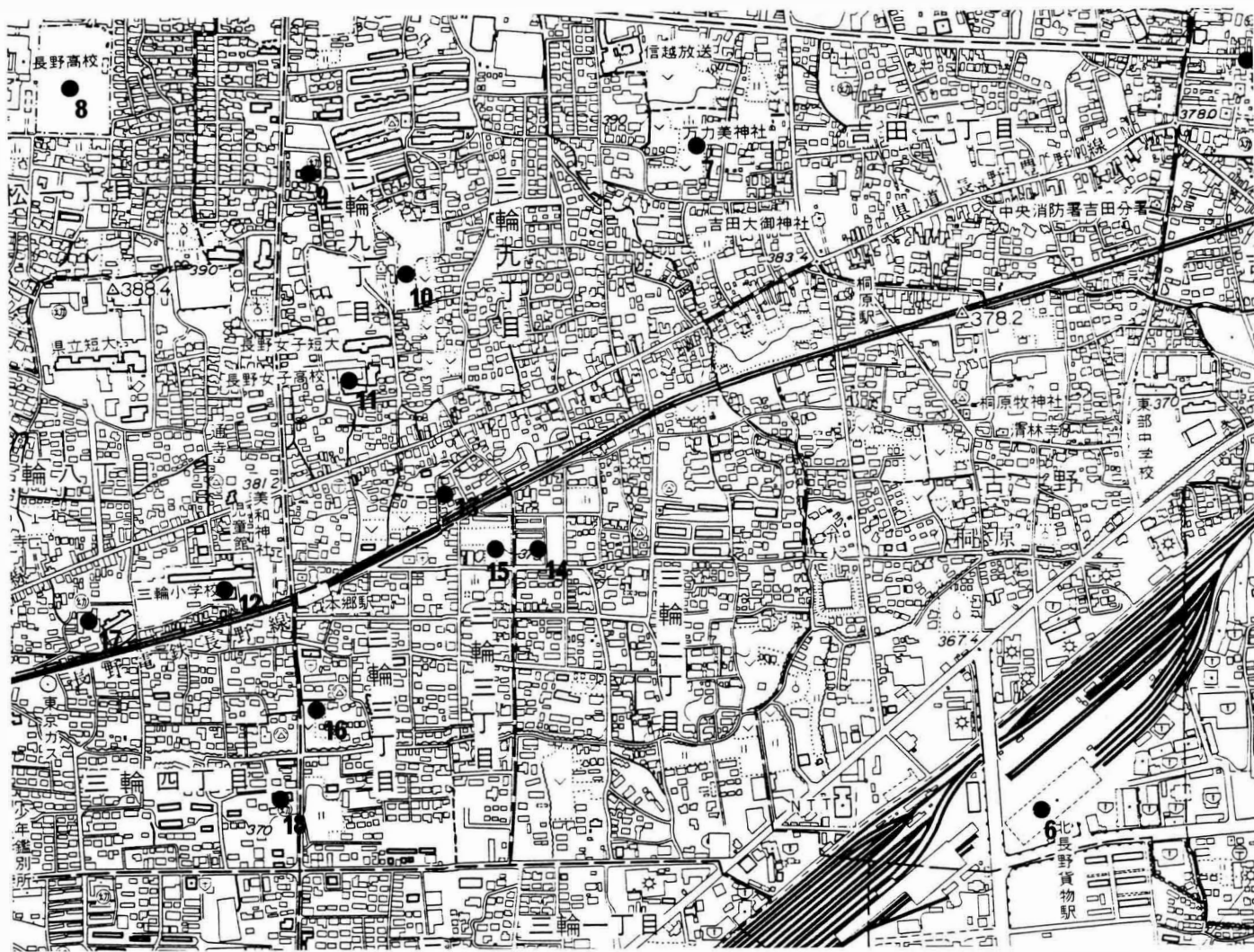
今回の発掘調査地点はJR北長野駅の南側にあたり、周辺は南への緩やかな傾斜が認められる良好な扇状地形を示す扇端部付近に位置し、比較的密度の高い状態で埋蔵文化財が包蔵されている地域でもある。

平成5年度から長野市北部においても本格的に着手された北陸新幹線の建設工事は、浅川扇状地遺跡群の扇端部を横断する形で貫き、これに伴う発掘調査は(財)長野県埋蔵文化財センターが実施し、その調査概要が同センター発行の『年報10(1993)』及び『年報11(1994)』に概略報告されている。これによればほぼ全域にわたって埋蔵文化財の包蔵を確認することができ、W-7B区とされた三輪・古野の調査区からは小規模な古墳時代前期の水田跡、W-10A区(中越)では古墳時代前期の周溝墓を検出し、周溝内からは布留系の二重口縁壺などが出土している。またW-11・12区(中越・北長野駅)からは縄文時代中期後半の加曾利E系などの埋嚢が複数検出され、調査担当者は屋外埋嚢である可能性を示唆している。なお同調査地点からは壺2個体の組み合わせによる弥生時代後期の土器棺墓も確認されている。このほかにも早苗町・東鶴賀・吉田・稲田など各地区の一連の発掘調査でも同様に多くの遺構が検出されている。

当教育委員会でも本年度吉田古屋敷遺跡として、長野電鉄信濃吉田駅南側の北長野駅前B-1地区市街地再開発事業地点(B-1地点)と、市道吉田朝陽線バイパス吉田踏切除去事業地点(踏切地点)の発掘調査を実施している。

B-1地点では縄文時代後期から中世までの遺構を検出しており、縄文時代では環状に配された石列内に扁平な礫を菱形に配した敷石住居が検出され、中央部分からは土器を伴った炉も確認されている。出土した土器の様相から「堀之内Ⅱ式」の段階が想定される。弥生時代後期では木棺墓が検出され、底面には棺材小口を埋め込んだ痕跡が明瞭に判断でき、小形の壺と鉢が2点出土している。このほか古墳時代や奈良・平安時代の遺構も確認されている。また踏切地点の発掘調査では弥生時代後期の環濠と思われる溝跡が調査区を縦断するように検出され、北陸系統の土器を多く含む多量の土器が出土している。

このように今回の調査地点は、これら周辺の発掘調査と併せて浅川扇状地遺跡群の中でも比較的集中して調査された地域であり、今後個々の遺跡を検討することによって各時代の様相が明らかになるとと思われる。



- |             |             |            |             |     |
|-------------|-------------|------------|-------------|-----|
| 1. 吉田四ツ屋遺跡  | 5. 吉田町東(2)  | 9. 下字木遺跡   | 12. 三輪遺跡(1) | 15. |
| 2. 新幹線調査地点  | 6. 北長野貨物駅遺跡 | 10. 美和公園遺跡 | 13. 三輪遺跡(2) | 16. |
| 3. 吉田古屋敷(2) | 7. 押鐘城館跡    | 11. 下字木B遺跡 | 14. 三輪遺跡(3) | 17. |
| 4. 吉田古屋敷(1) | 8. 本村東沖遺跡   |            |             | 18. |

第2図 周辺の遺跡分布図 (1/10,000)

# 第III章 調査成果

## 第1節 遺跡の概要

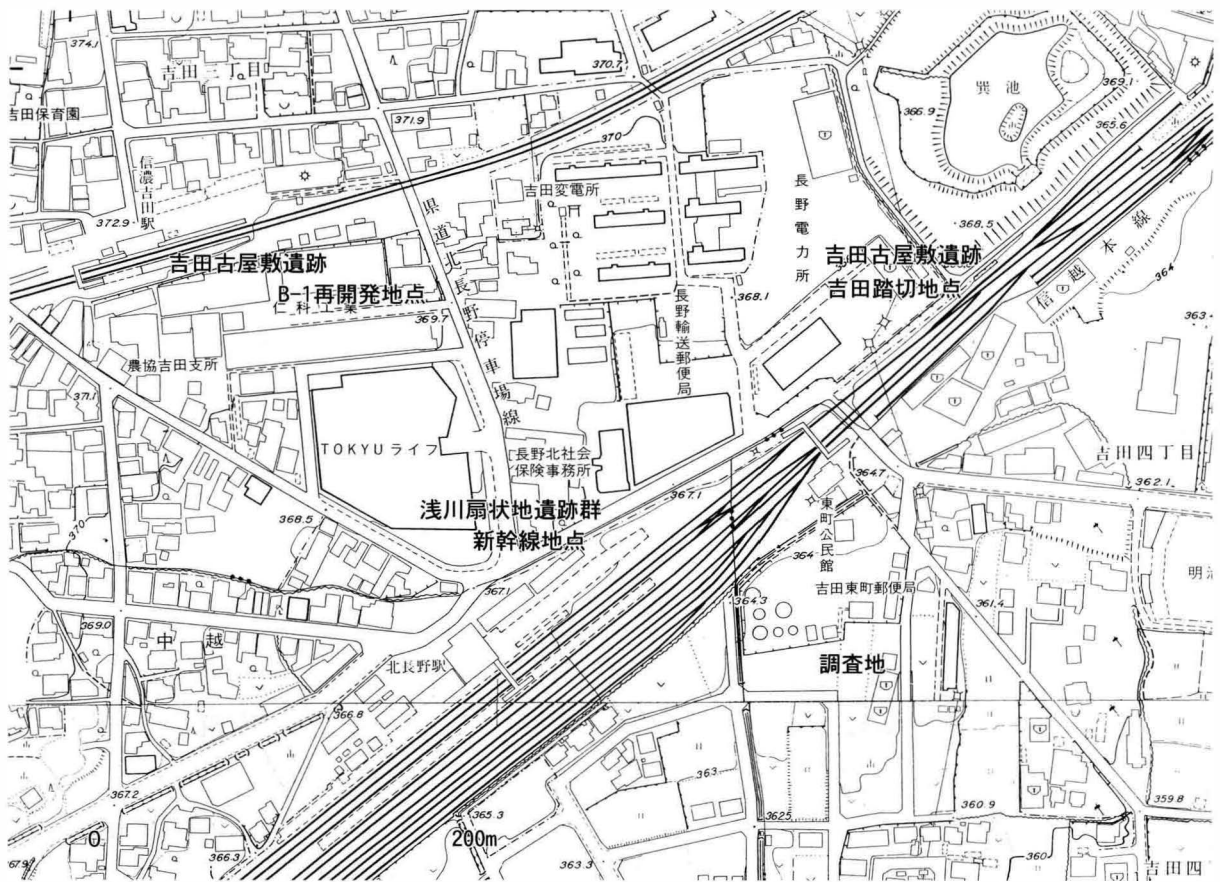
今回の調査地点は浅川扇状地上に位置し、南への緩やかな傾斜が見られる扇状地特有の地形をなしている。

調査は奈良時代の遺構を中心とする1次調査面と、縄文・弥生・古墳時代の遺構を検出した2次調査面とに分けられ、合計2,600㎡の発掘調査を実施した。

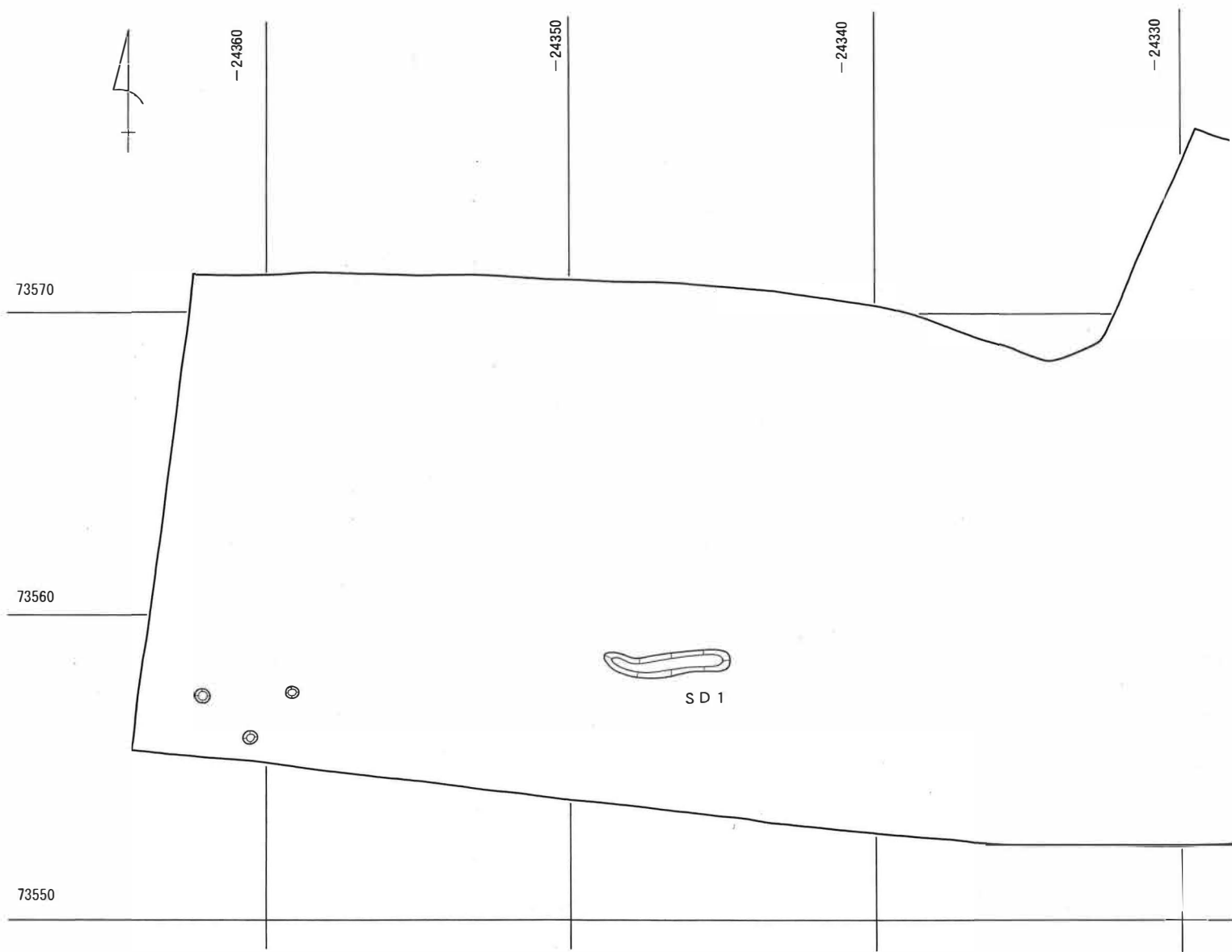
当該地は以前オイルタンクが建設されていた場所であるため1次面の調査では破壊が著しく、遺構の有無が非常に把握しづらかった。遺構は破壊の影響の少なかった東側に集中し、奈良時代の住居跡6軒のほか溝跡・土坑などが検出されているが、遺物の出土しなかった遺構が多く時代の断定できるものは少ない。

2次面は破壊の影響も少なく縄文時代後期から古墳時代前期の遺構が確認された。縄文時代の遺物は調査区全域にわたって出土するものの、はっきりと認識できる遺構は後期の住居跡2軒と土坑が1基だけである。弥生時代は中期後半の住居跡4軒、後期後半の住居跡2軒と土器棺墓1基である。古墳時代の遺構はすべて前期に比定されるもので、住居跡2軒と墳丘墓2基を確認した。

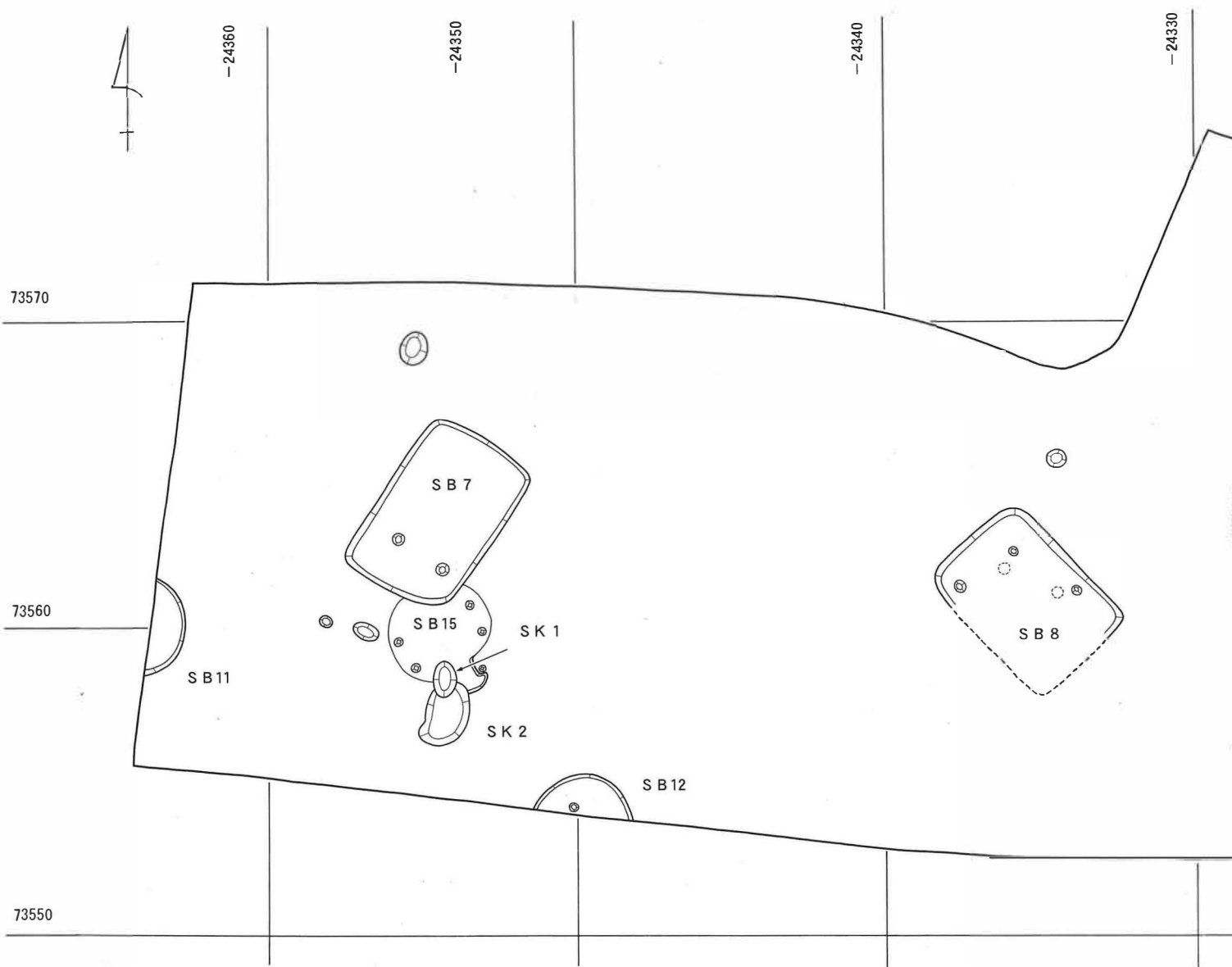
第II章の中でも触れたが、周辺地域において発掘調査が実施され、徐々にではあるがその様相が明らかになりつつある。今回の調査で確認された遺構と時期が一致するものも少なくなく、遺跡がどのように展開していくのか興味を惹く。



第3図 調査位置図 (S = 1 / 4,000)



第4図 1次調査面全体



第5図 2次調査面全体



## 第2節 遺構と遺物

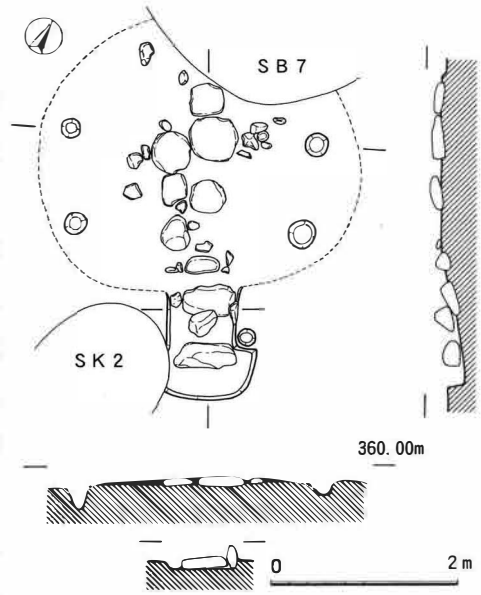
### 縄文時代後期

#### S B 15

バックホーによる2次調査面への掘削の際に大きな石の集中する箇所が発見されたため、急遽掘削を中断しこの集石の周辺を重点的に調査した。石はほとんどが平坦な河原石を用い、大きいものでは直径30cmを越えるものもある。

調査の結果、集石は広範囲には広がらないものの一部集中して確認され、南側には突出する部分も認められた。周囲に明確な床面は確認できなかったが柱穴4箇所が検出され、集石の範囲と柱穴の位置をもとに遺構のおおよその範囲を設定した。径3.40mの円形を呈し、南側には幅0.70m長さ1.20mの突出した部分を持ついわゆる柄鏡形の敷石住居であると想定される。突出部分には掘り込みが認められたが、そのほかについては確認されていない。突出部の端部はバチ状に広がり、付け根付近には立石も認められることからこの部分を出入口と想定する。ただ本来炉が構築される住居中央部分では炉らしき施設は認められず、その痕跡すらも確認されていないため住居として認識するにはやや根拠に乏しい。

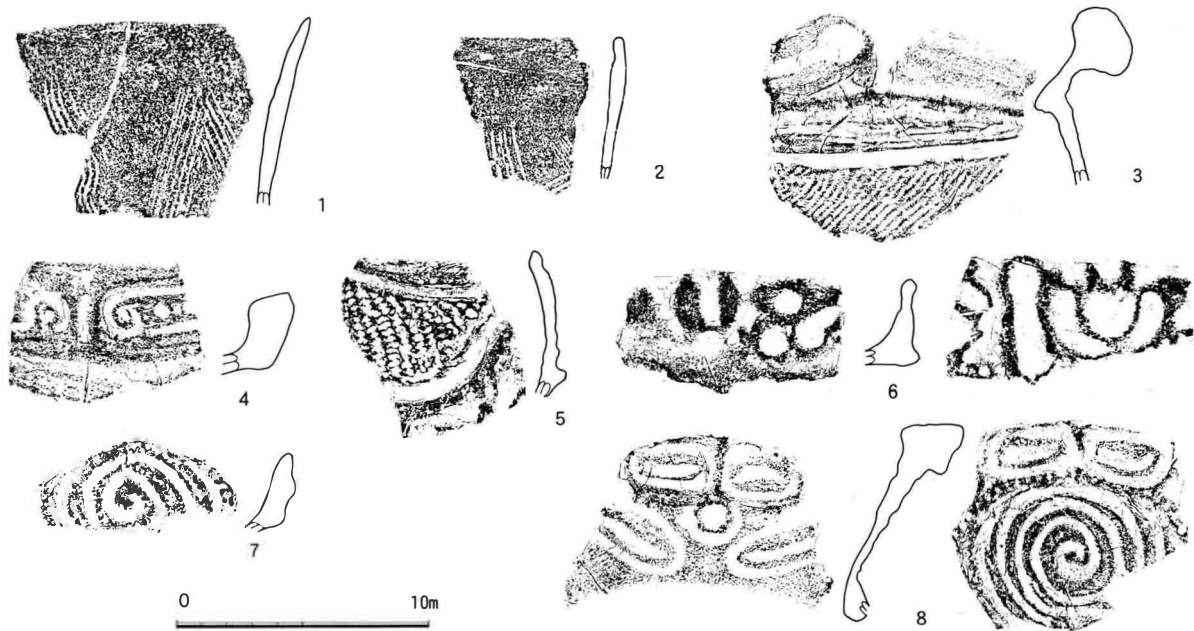
床面が検出面とほぼ同レベルにあるため住居自体の掘り込みは確認されていない。よって遺物の出土もそれほど多くなく、土器は小破片〔第7図〕が出土したにすぎない。そのほか打製石斧が出土している。



第6図 S B 15



S B 15



第7図 S B 15出土土器

S B 16

S Z 1 の南側に検出された遺構で西側の掘り込みの一部が確認されたにすぎない。南側は攪乱により検出できず、東側は調査区域外により調査できなかった。そのため住居の形態や規模などについては不明な点が多く、床面もはっきりとせず内部施設も確認されていない。底面からは鉢が逆さになった状態で出土し、その下からは歯を中心とする人骨の頭部分が出土していることから墓跡の可能性も考えられる。

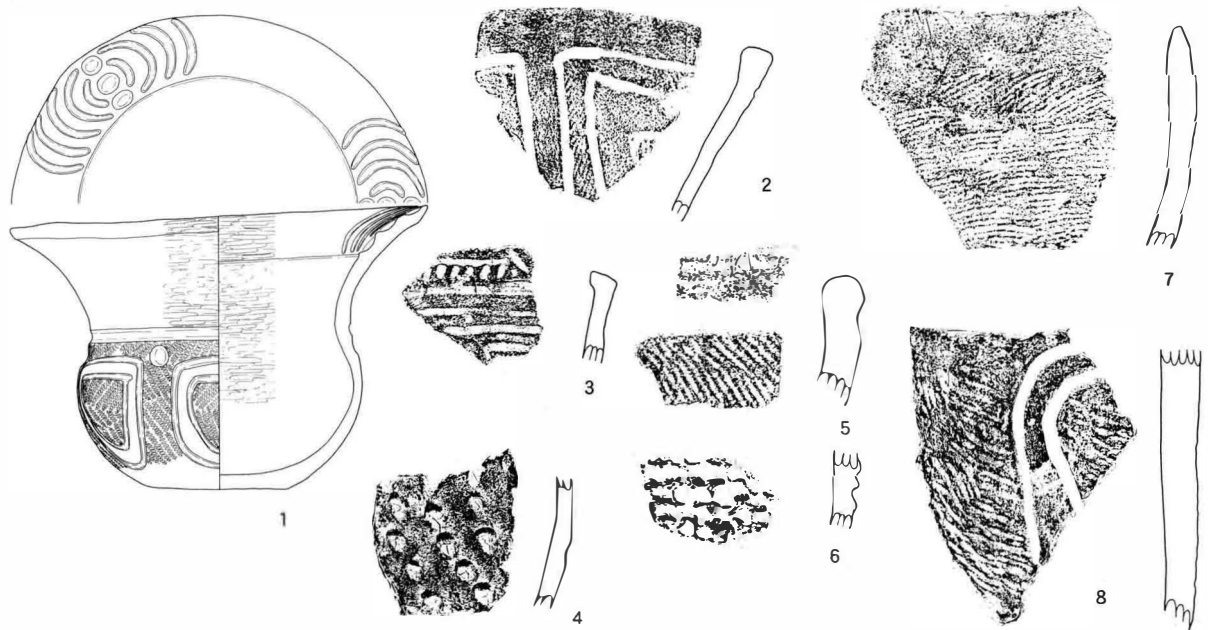
出土土器〔第8図〕の様相から「堀之内式」段階の遺構と考えられる。1の口縁部内面には指圧による円形のへこみを3つ縦に配し、それを中心に左右4本（一部5本）の半円形の太い沈線で囲む文様が3箇所に見られ、胴部には縄文を施文したのち頸部に沈線、胴部には不整形な口の字となる沈線を二重に囲んだ文様を6箇所に配し、その間に口縁部で見られた指圧によるへこみを施す。縄文は頸部付近と沈線文で区画した中の上部は横方向へ施文し、区画した下部及び区画文の間は縦方向に施文している。



土器出土状況



S B 16

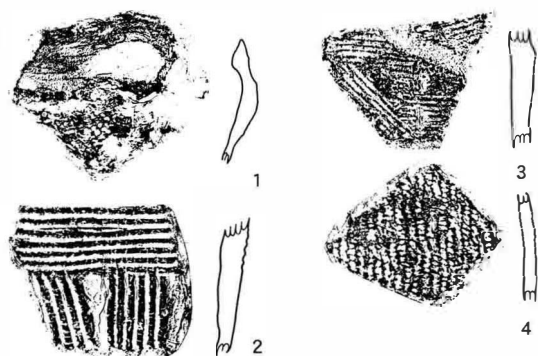


第8図 SB16出土土器

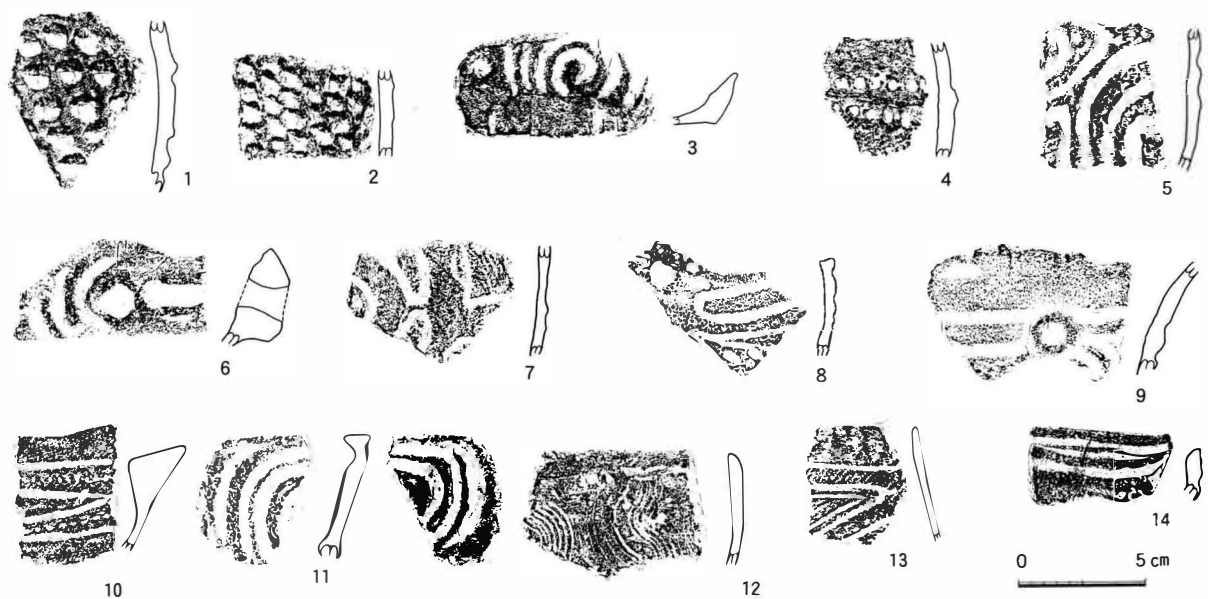
SK2

SB15と重複して検出された遺構で、SB15を破壊して構築される。図面上（第5図、2次調査面全体図参照）ではSK1とも重複関係をもっているように表現されているが、SK1は1次調査面と2次調査面の中間で検出されているため、直接重複してはいない。長辺2.20m、短辺1.40mを測る不整形な楕円形で、深さは検出面より約40cmである。

出土土器〔第9図〕はみな小破片で、中期と後期の土器が混在している。



第9図 SK2出土土器

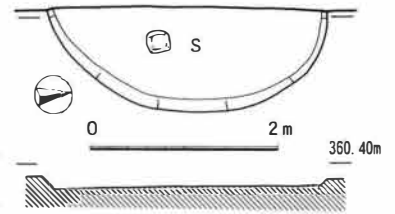


第10図 遺構外出土土器①

(2) 弥生時代中期後半

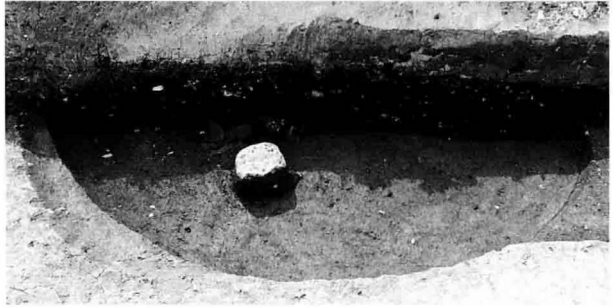
S B 11

調査区の西端で検出された遺構で、西側は調査区域外により全体を検出することはできず判然としないが、東西方向3m前後を測る円形もしくは楕円形を呈する住居を想定する。床面は全体に明瞭に検出されているものの軟弱で、住居内の施設等は確認できなかった。床面直上から平坦な面をもつ石が一点出土している。表面の一部に擦ったような痕跡が見られ、中央付近がわずかにくぼむ。また調査区壁際には土器がまとまって出土している。

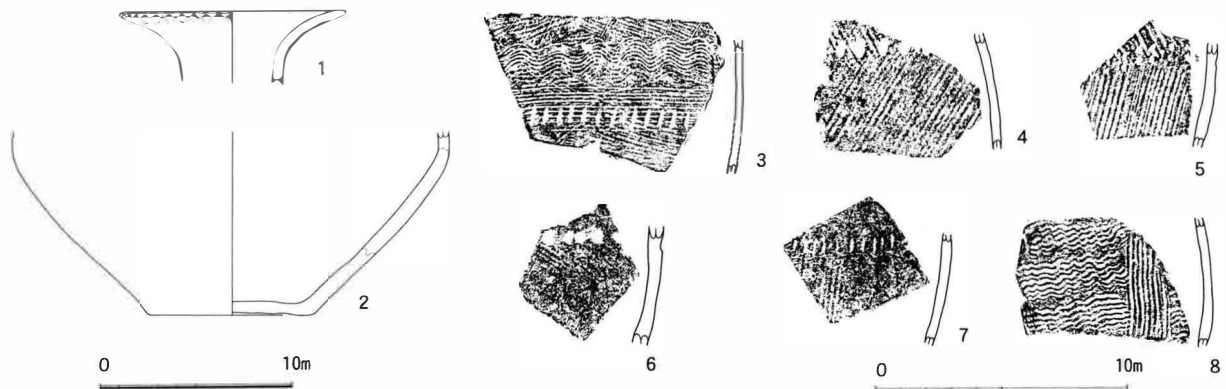


第11図 S B 11

出土土器〔第12図〕には、壺（1・2）と甕（3～8）がある。1は細頸壺の口縁部破片で端部はユビオサエによる波状口縁となる。縄文は施されない。2は胴部から底部の破片で文様帯を持たない。3は胴部破片で、羽状文・波状文・直線文が施文され、列点文がめぐらされる。4～7も列点文が施文され、8は縦方向に直線文で区画したのち波状文を施文している。



S B 11

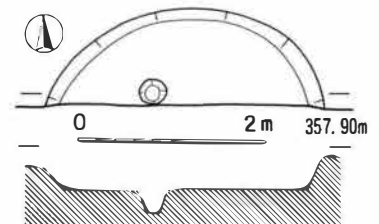


第12図 S B 11出土土器

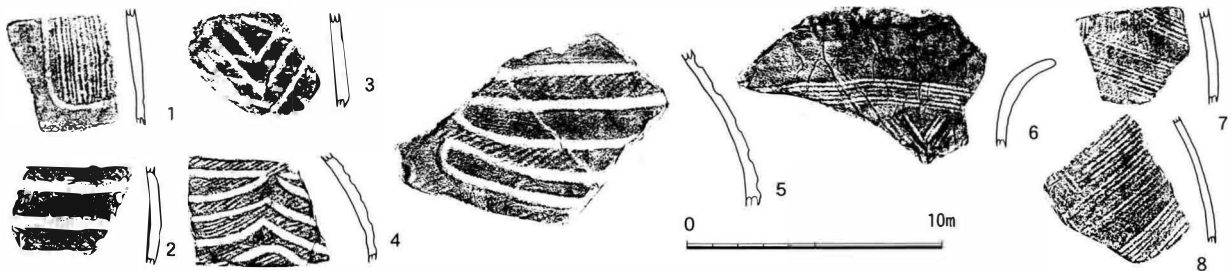
S B 12

南側半分以上が調査区域外となり検出できなかったため住居の規模などは判然としないが、円形住居を想定する。掘り込みがやや不鮮明であり床面もはっきりしていないが、柱穴と思われる掘り込みが1基のみ確認された。

出土土器〔第14図〕には、壺（1～5）と甕（6～8）があるが、みな小破片である。



第13図 S B 12



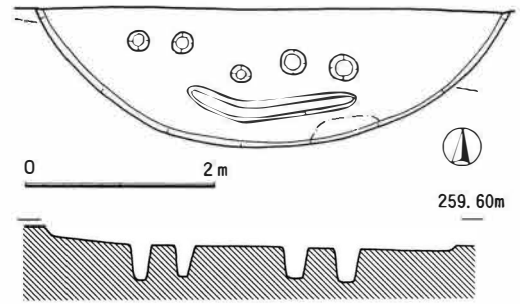
第14図 S B 12出土土器

S B 13

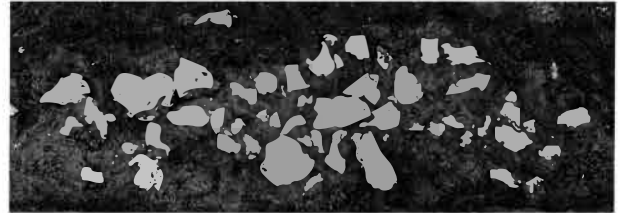
北側が調査区域外にあるため全容を把握するには至らなかったが、比較的大形の円形住居もしくは楕円形住居を想定する。床面は調査区壁付近に僅かに堅緻な床が存在するが、残りの部分については軟弱である。床面には柱穴が5箇所ほぼ直線に並び、平面形は判然としないが、おそらく壁に沿うように円形、あるいは楕円形に巡るものと思われ、その脇には溝状の掘り込みも検出されている。炉は範囲内においては確認されていない。検出面から床面までが非常に浅かったものの、遺物は床面上を中心に多く出土している。

出土土器〔第16図〕には壺（8～21）、甕（1～3）、高杯（4～6）、鉢（7）がある。1は口縁端部に縄文を施したのちユビオサエによる波状口縁となる。胴部は縦方向に直線文で区画したのち波状文を施文し、下部には列点文がめぐらされる。2の口縁部は外側への折り返しがされ、口縁端部はキザミによる弱い波状口縁となる。胴部は1と同様縦方向に直線文で区画したのち波状文を施文する。列点文は棒状の工具で引きずったような施文方法である。3は口縁端部にキザミを持ち、胴部には工字文を施文する。4は内湾する杯部から口縁部が水平に外反し、5は直線的に開く杯部に短く外反する口縁部を持つそれぞれ高杯の破片と思われるが、脚部を失っているため断言できない。5には穿孔が一箇所に見られる。6は高杯の脚部で三角形の突帯がめぐらされ、高杯はいずれも赤彩されている。7は口縁部を失っているが、内外面とも赤彩される鉢である。8・9は頸部付近の破片、10～21は胴部破片である。11～14はすべて同一個体で、沈線文で区画した中に櫛状工具による直線文と刺突文とを交互に施文する文様構成となる。16・17は懸垂文が施文されている破片で、16は比較的小形の壺である。20の胴下半部には工字文が施文される。

第15図の一点破線により表現した部分からは多量の石器剥片が纏まって出土している。石材はすべてチャート製で、製品あるいは未製品のように調整痕のあるものは見られない。



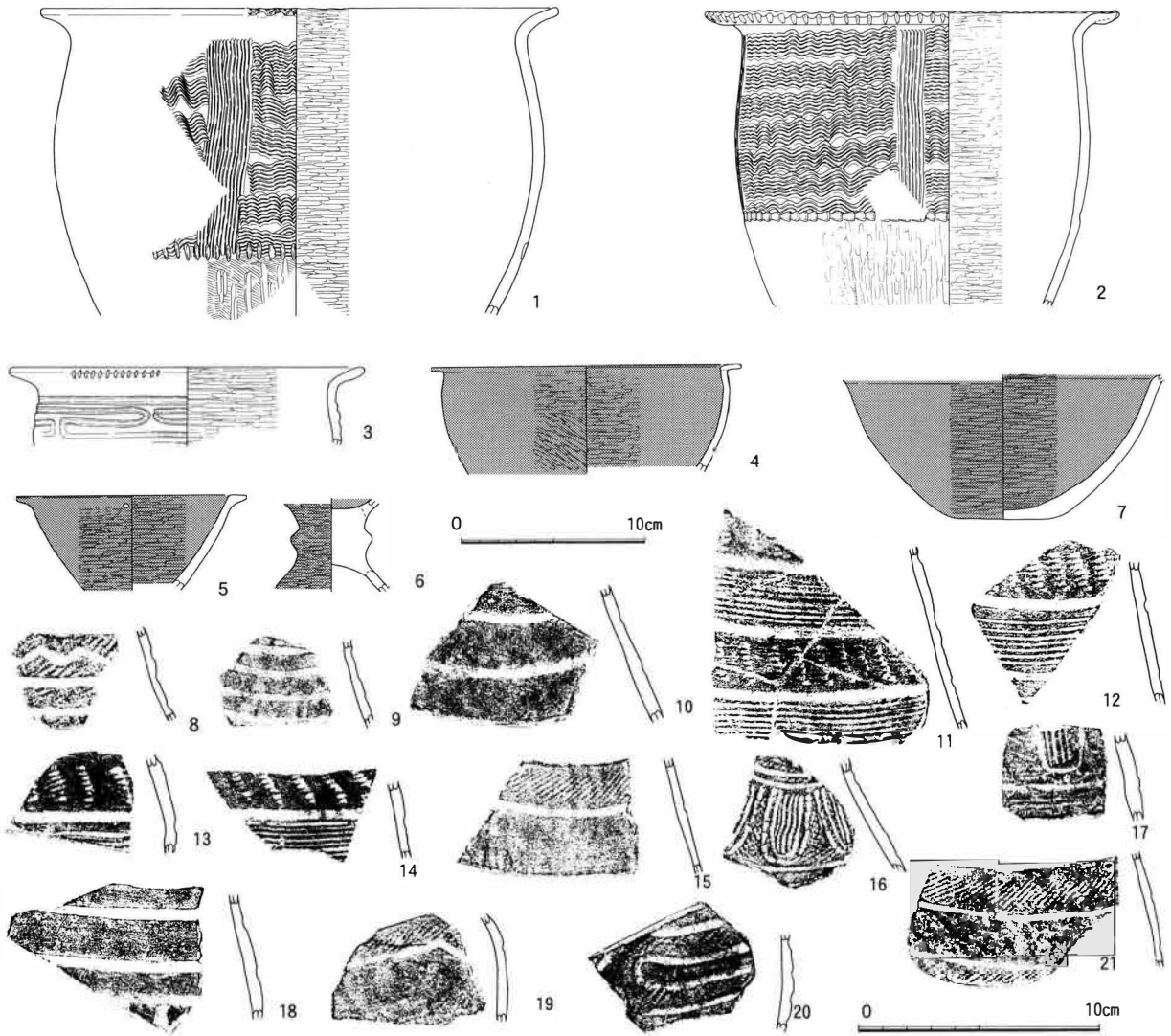
第15図 S B 13



石器剥片出土状況



S B 13

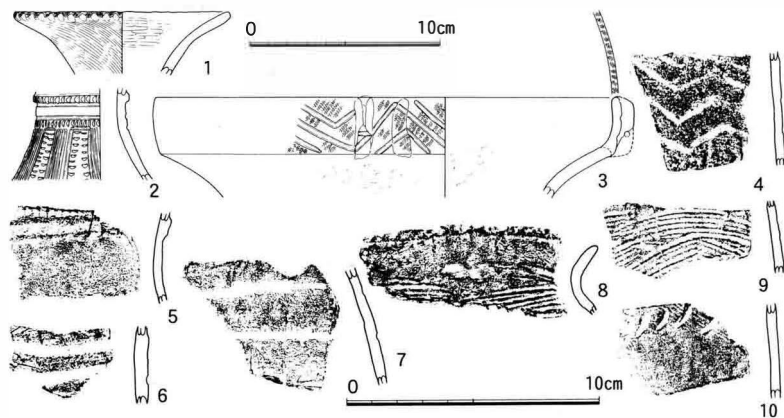


第16図 SB13出土土器

SB14

SB9の構築により住居のほとんどを破壊されてしまっているために、規模や内部施設に関してはまったく不明であるが、残存する部分より円形住居を想定する [第20図]。

出土土器 [第17図] には壺 (1~7) と甕 (8~10) がある。1は口縁端部に縄文を施したのちユビオサエによる波状口縁となる。2は胴部に懸垂文を施文する小形の壺で、頸部にめぐらされ突帯にキザミが施される。3は大形の壺で口縁部は受け口状となり、外面には縄文を施したのち重山形文が施文され、その上に横方向の穿孔を持つ2つの突起 (1つは欠落) が見られる。8の口縁端部には縄文が施され、胴部は櫛状工具による羽状文が施文されている。



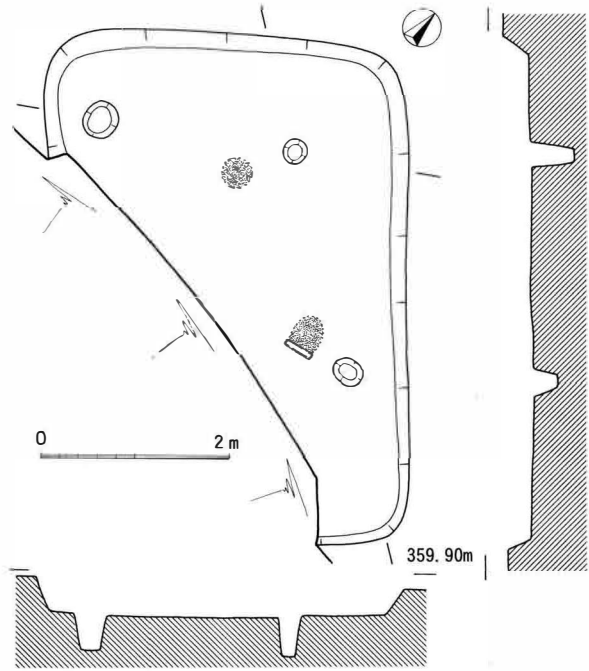
第17図 SB14出土土器

(3) 弥生時代後期

SB 8

調査区内においてほぼ中央で検出された住居である。他遺構との重複はないが、南側は攪乱による破壊を受けている。そのため全体を調査することはできず判然としないが、5.20m×3.80mの長方形を呈する住居であると思われる。柱穴は3本検出されているが不規則な配列をなす。炉は地床炉が2箇所に設けられており、東側の炉には平坦な面を持つ礫を伴う。床面は住居中央付近、炉の周辺で非常に堅緻となり明瞭に検出できたものの、周辺は軟弱である。

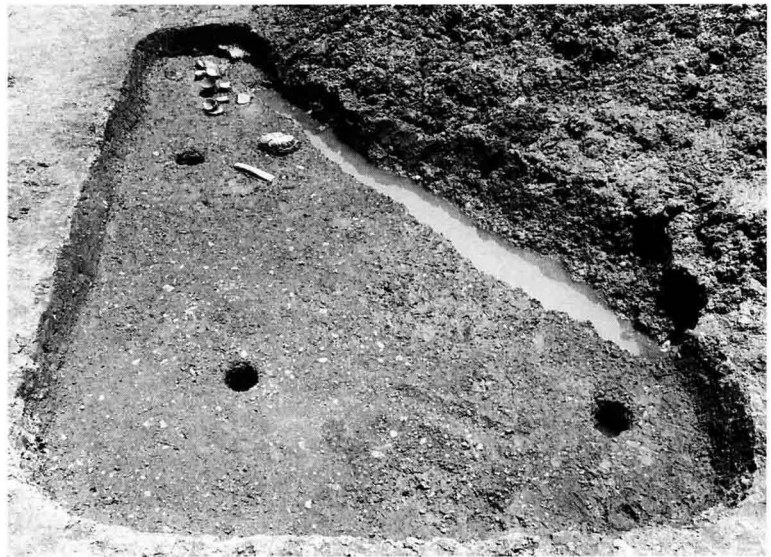
出土土器〔第19図〕には壺（1～3）、甕（4・5・11～13）、台付甕（6）、甑（7）、高杯（8・9）、鉢（10）がある。1は内外面とも赤彩され、横方向のヘラミガキが施される。頸部には直線文が施文され、縦方向の区画はない。口縁端部はわずかながらに内湾する。2・3は底部付近で、2は底部まで赤彩されるが、3は胴部で中断される。胴部には陵をもち全体にヘラミガキが施され、内面はハケあるいはナデの調整による。4は胴部に波状文を施文しそのほかは内外面ともヘラミガキによる調整である。6は台付甕の脚部で外面はハケ、内面はナデ調整によって仕上げられ上部は失う。7の外面はハケにより調整され、内面は器面が著しく荒れており細部は不明であるがおそらくヘラミガキされるものであろう。底部には焼成前の穿孔が1か所に見られる。8は脚部内面を除き全体に赤彩がされ、横方向あるいは縦方向のヘラミガキが施される。脚部には三角形の透かし穴が8か所に設けられ、端部にわずかな反りをもつ。9は杯部のみで口縁部及び脚部を欠損する。内外面とも赤彩され横方向のヘラミガキを施している。11・12は口縁部破片、13は頸部破片でいずれも櫛描波状文が施文され頸部には簾状文を巡らしている。



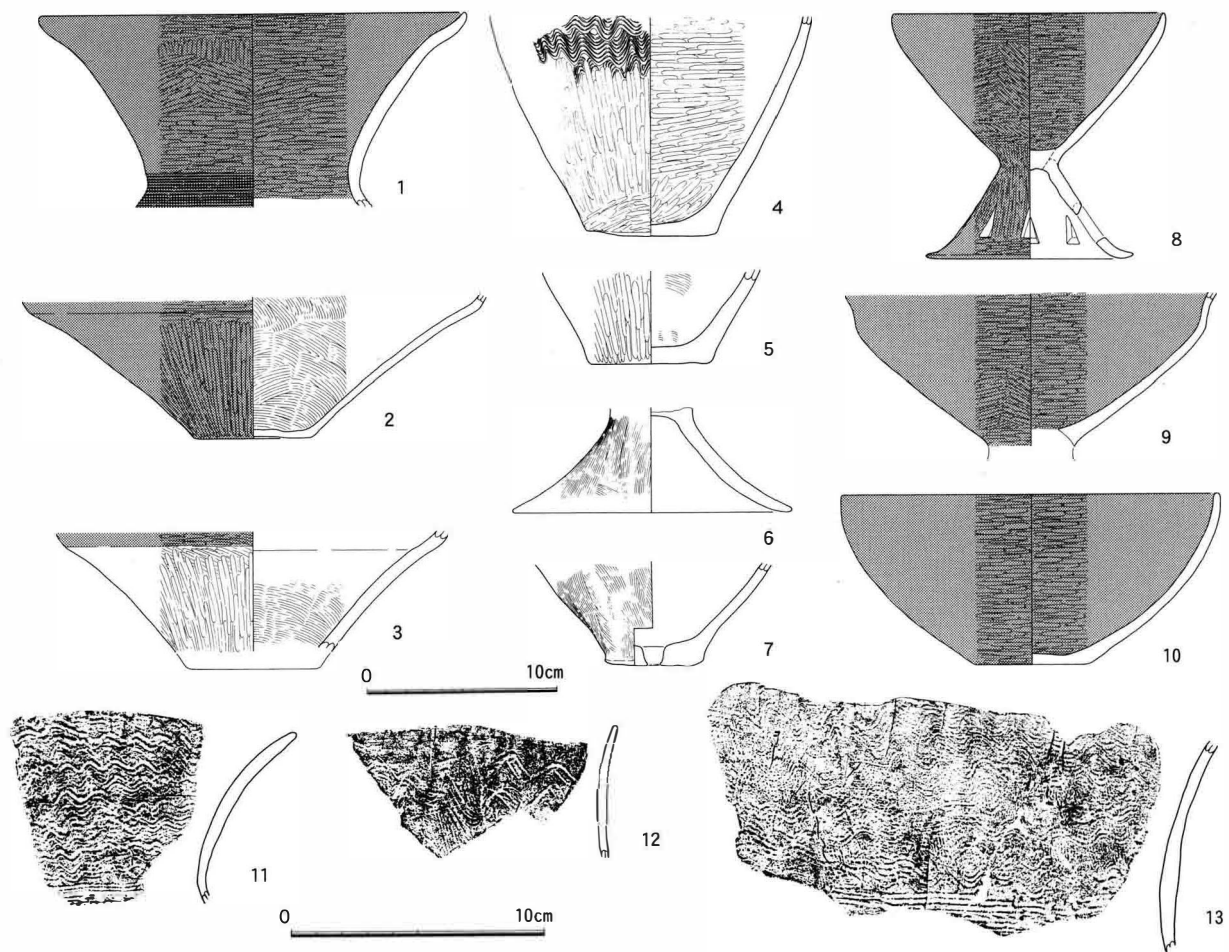
第18図 SB 8



炉 検出状況



SB 8



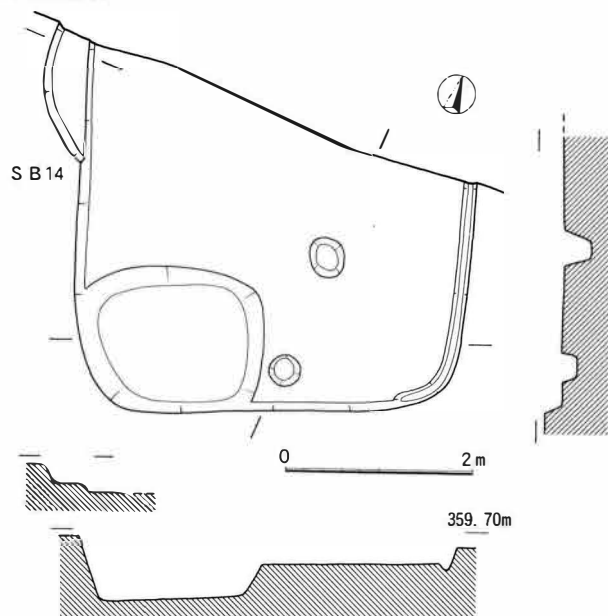
第19図 SB 8出土土器

SB 9

SB 14と重複関係にあり北側1/3程が調査区域外にあるため全体を確認することはできなかったが、東西方向4.20mの長方形住居を想定する。柱穴は2本検出され1本は主柱穴になり得るが、もう1本は住居壁際に検出されているため、出入口もしくはそれに付属する施設とすることもできる。範囲内において炉は確認できず、東壁際には壁溝が検出されている。南西隅には長辺約2m、短辺約1m50cmの大きな土坑が掘り込まれ、床面とこの土坑の覆土を中心に土器が出土している。

出土土器〔第21図〕には壺（1～3）、甕（4～6）、高杯（7～10）がある。1は口縁部、2は頸部、3は

底部のそれぞれ破片である。1・2は口縁部の内外面が赤彩され、外面は縦方向、内面は横方向のヘラミガキを施す。2の頸部には直線文を施文したのち2本の縦方向区画をするT字文となる。3は胴部最大径付近まで赤彩と縦方向のヘラミガキが施され、それより下部はハケ調整のみである。4は口縁部及び胴部に波状文を施文し、頸部には簾状文ではなく直線文を施文している。施文順序は頸部に直線文を施文したのち口縁部及び胴部に波状



第20図 SB 9・14



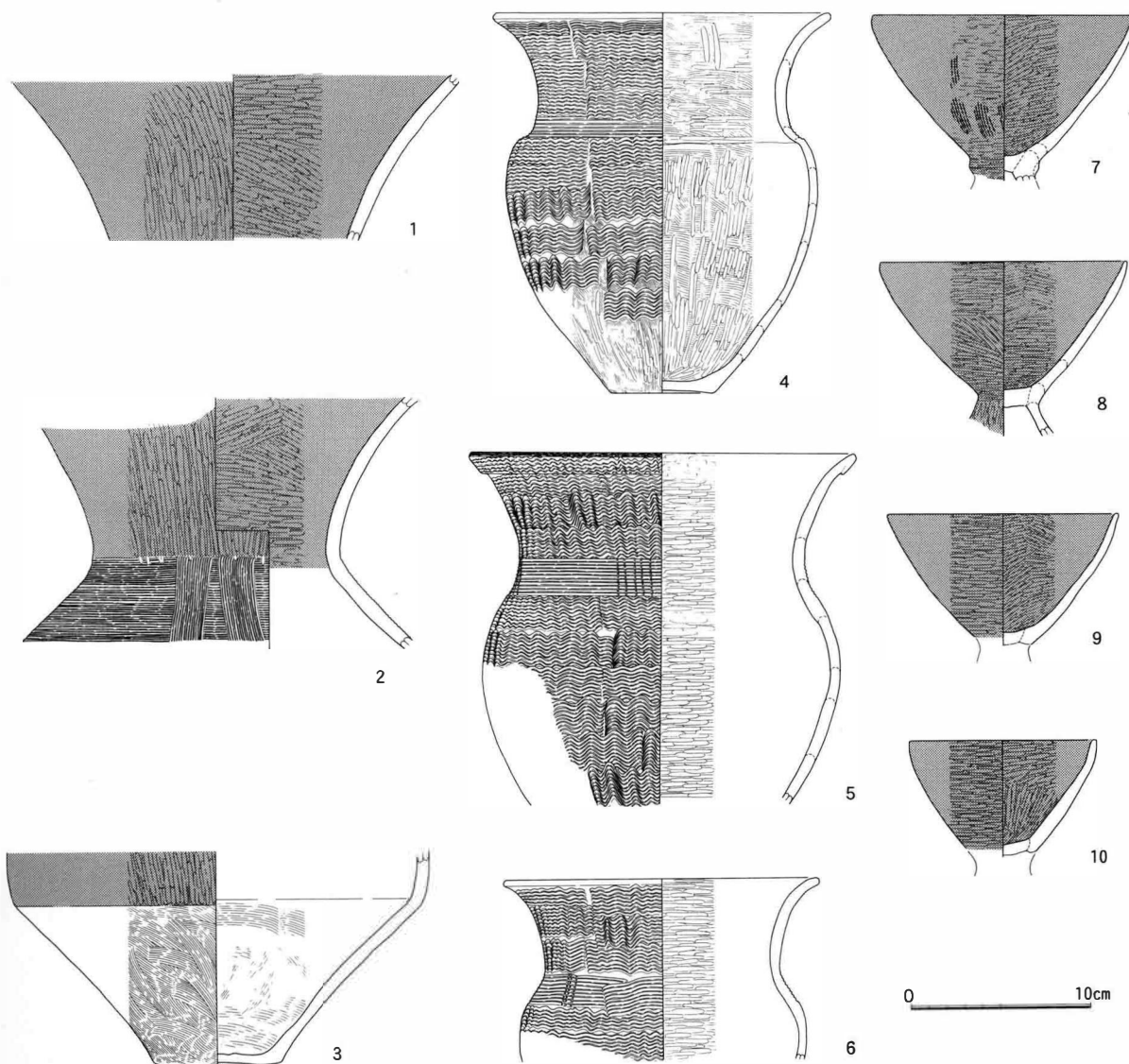
文を施文する。内外面ともヘラミガキを施すがハケ調整が残る。5の口縁端部は折り返しがされ、端部にも波状文が施文される。全体に波状文を施文したのち頸部に簾状文を施文する。7～10の高杯はみな同じ形態をなす。4点とも脚部を意図的に分離させた状況が看取でき、7は脚部との接合部に三角形の突帯が見られる。すべてに赤彩が施される。



遺物出土状況



S B 9・14



第21図 S B 9 出土土器

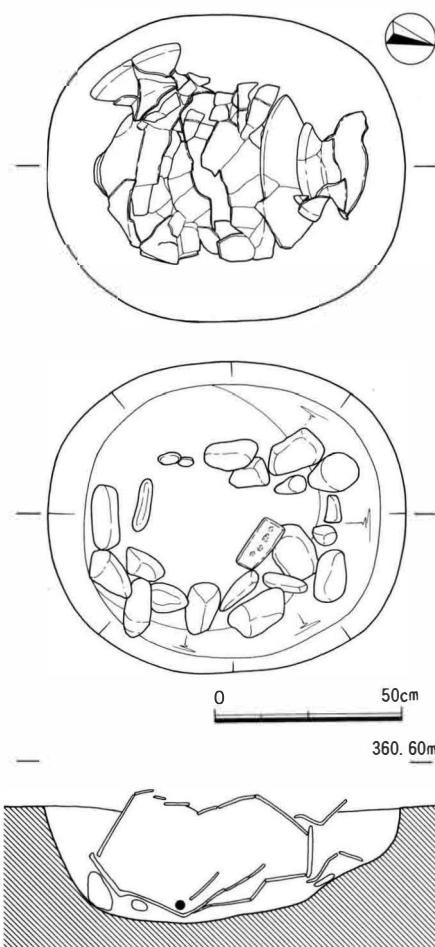
## SK 1

当遺構の検出された場所は、以前オイルタンクが建設されていた場所であり、1次調査面の検出作業において遺構の確認ができなかったことから手作業により調査面の掘り下げを行った。1次調査面より約10cm程掘り下げたところから土器のかたまりが出土し周辺を調査した結果、幸いにもオイルタンク建設による破壊もなく、長辺95cm、短辺80cmの楕円形の掘り込みがあることを確認し、遺構全体を検出することができた。遺物の出土状態から土器を使用した墓、いわゆる土器棺墓であろうと想定し調査を進めていった。

長辺方向に土層観察用のベルト一本を残し掘り下げを行った。大形の壺2個体が使用されており、2つとも頸部から上を意図的に分離させ、胴部を互いに組み合わせた形となる。分離させた頸部より上の部分は1つは北側の土器の底部に口縁部の方を添えるように、もう1つは南側の土器の胴部に、こちらは頸部の方をつけるような形で検出された。壺の内部には土が充満しており、底の部分からはスカイブルー色のガラス小玉が11点（内1点は紛失）と鉄石英製の管玉1点、そのほか骨片がわずかながら出土している。

土器を取り除くと土壌底面の壁際に沿った形で、円形に配列された石が出土した〔第22図〕。ほとんどが河原石のような自然石を用いているが、1点だけ平坦な面を持ち両面に3～4つの窪みの見られる石器らしき石も出土している。これらの石は棺となる土器を埋納する際その安定のために敷かれたものと想定する。

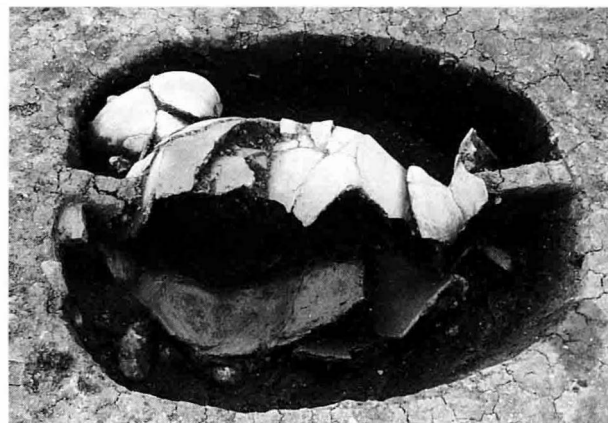
出土土器〔第23・24図〕には埋葬に用いられた壺の他、表面を赤色塗彩された壺と高杯が出土している。土器棺の壺は2つともほぼ同じ様相を呈する。外面はハケによって調整され内面はナデによるものである。1の口縁はやや屈曲を持ち、2は1に比べ口縁部が長く端部はゆるやかに内湾する。3は小形の壺で口縁部破片である。4は高杯の脚部で三角形の透かし穴が4箇所設けられる。いずれも墓壙内の覆土より出土している。また土器棺内から出土した管玉は欠損しており、表面には数本の陵を持つ。ガラス小玉とともに纏まって出土したが、これらが副葬品として納められたものか、装飾品として埋葬時に装着されていたものか定かではない。



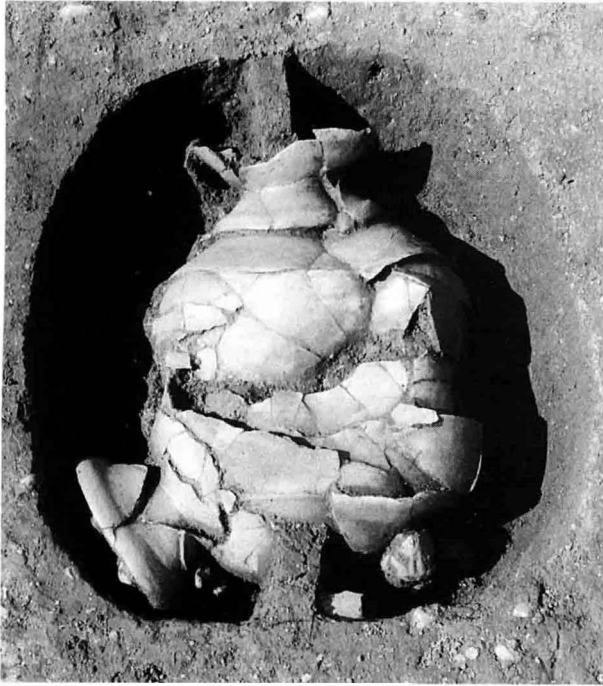
第22図 SK 1 (S = 1 / 20)



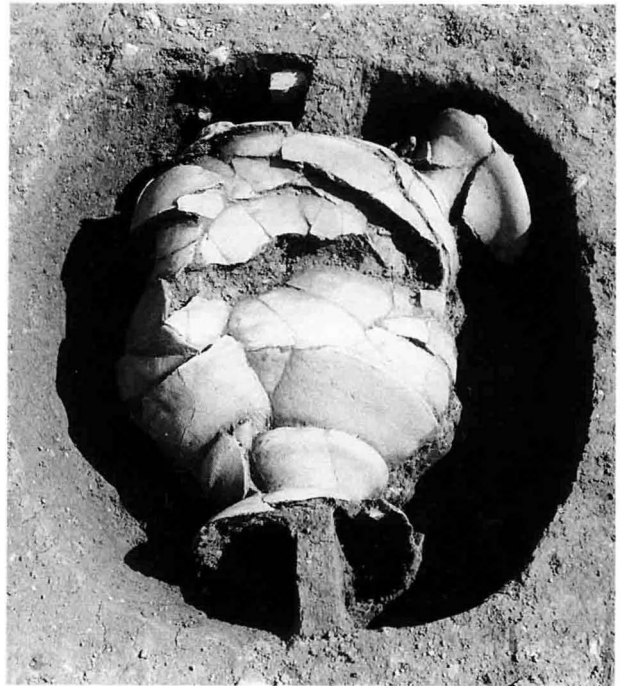
検出状況



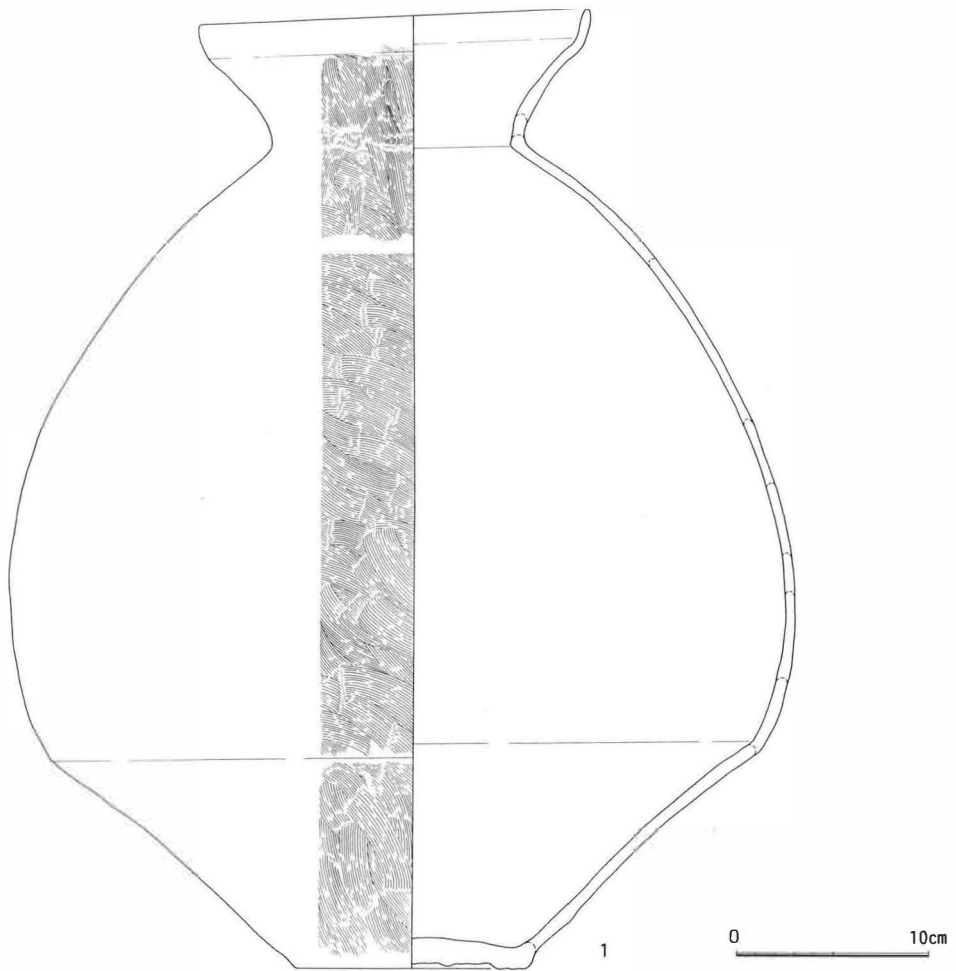
半割状況



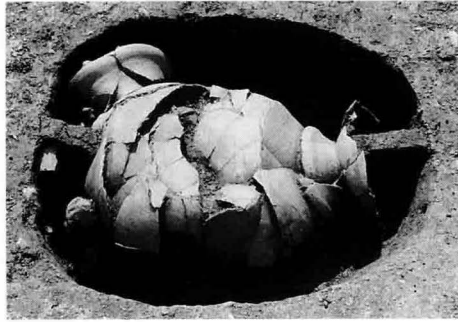
検出状況（南より）



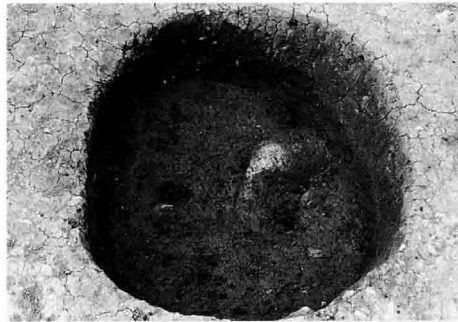
検出状況（北より）



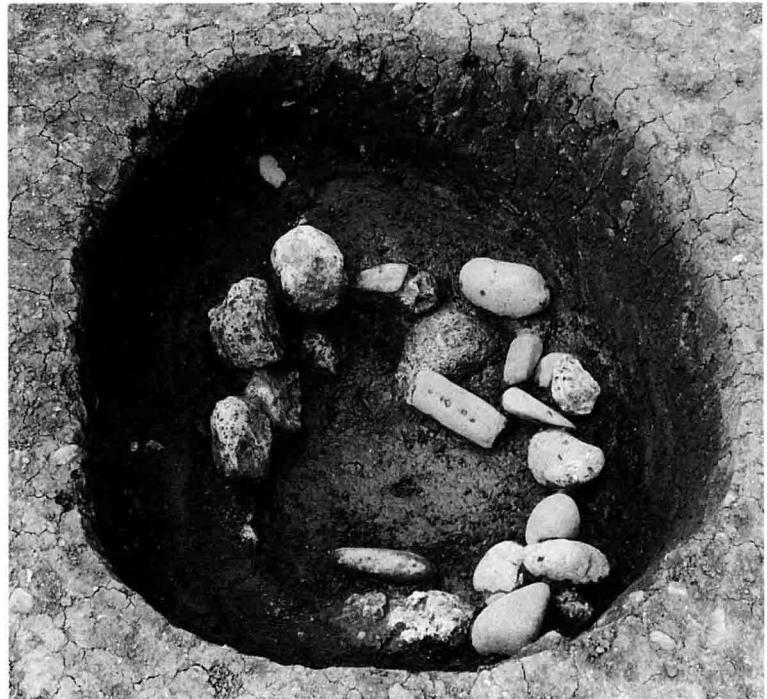
第23図 SK1 出土土器



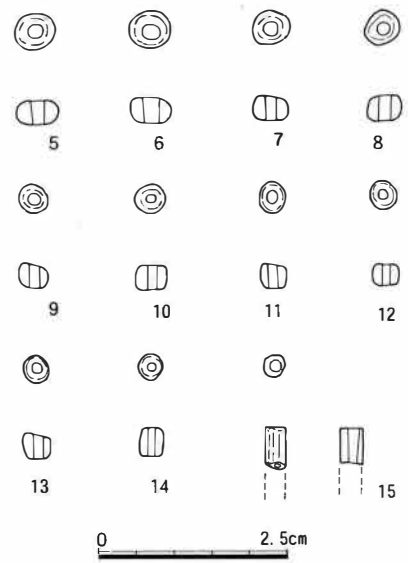
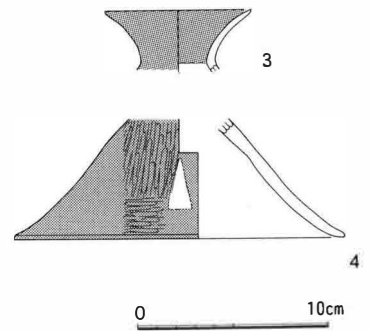
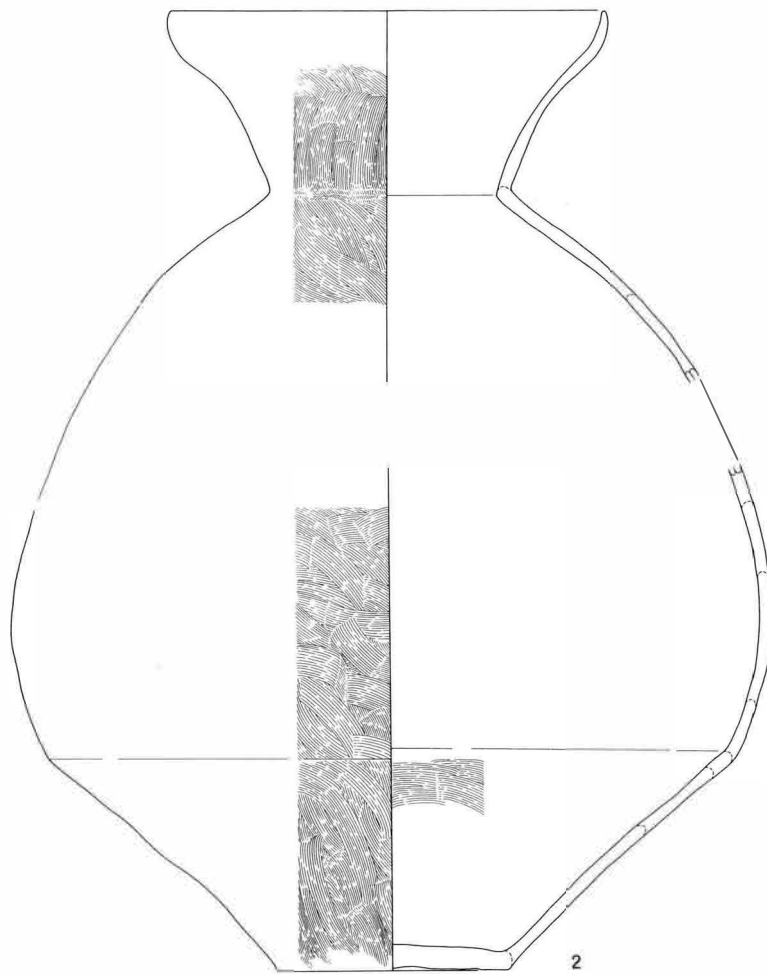
検出状況（東より）



完掘



土器除去状況



第24図 SK 1 出土土器・玉類（5～15はS = 1 / 1）

(4) 古墳時代前期

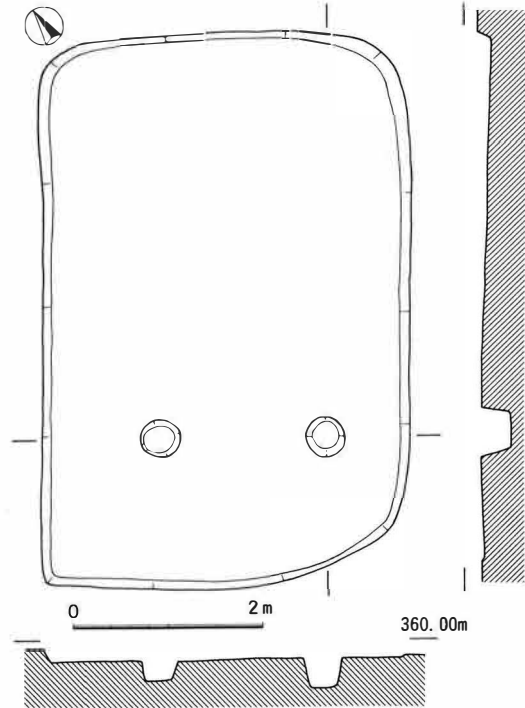
SB 7

SB15の床面検出作業の際、この住居を破壊して構築される当遺構の掘り込みが確認されたため、併せて調査を行った。南側の検出は容易に行えたものの、北側は攪乱が著しく明瞭な掘り込みを確認することはできなかった。当初弥生時代後期の住居跡と認識し調査を進めたが、整理作業の段階で古墳時代前期の遺物が含まれていることが明らかとなり、古墳時代前期の遺構として報告するものである。よって住居形態については若干相違があるものと思われるが、調査時点の検出を重視しそのまま掲載する。柱穴は2本検出され、床面は南側で明瞭に確認されたが軟弱である。

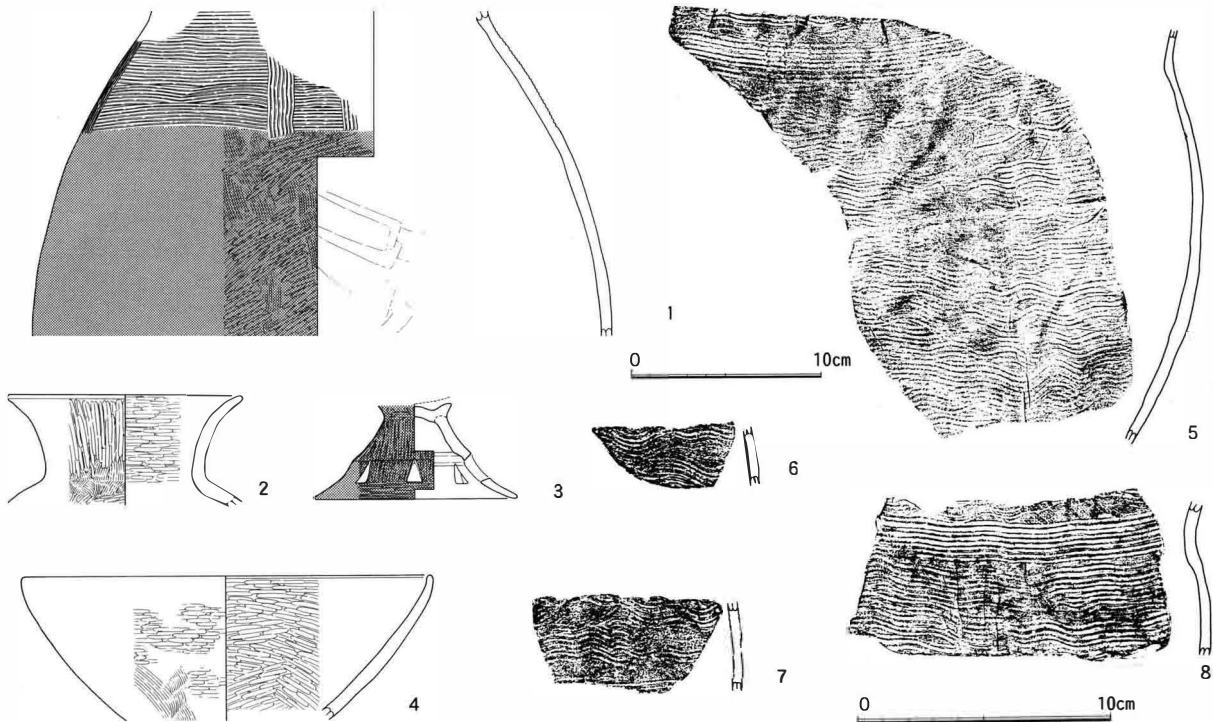
出土土器〔第26図〕には壺（1・2）、甕（5～8）、高杯（3）、鉢（4）がある。



SB 7



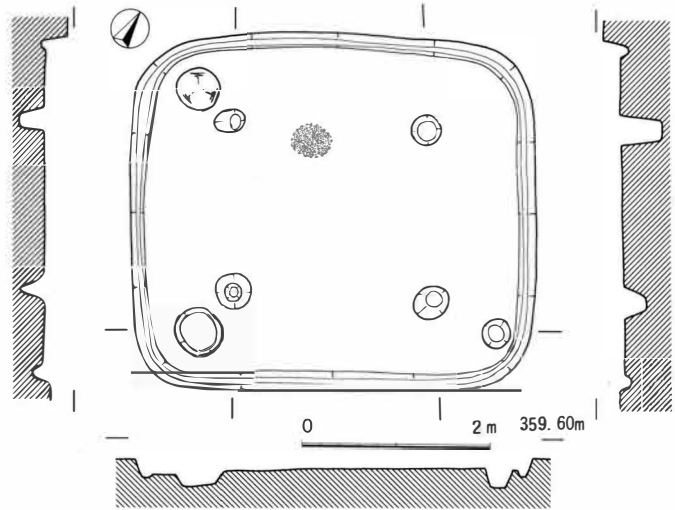
第25図 SB 7



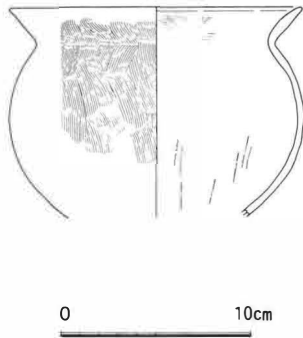
第26図 SB 7 出土土器

### S B 10

S B 9の南側に検出され他遺構との重複はなく、住居の全体を確認することができた。主柱穴は4本の方形配列となり、北側主柱穴を除く3本それぞれの主柱穴の脇に大きさや深さはまちまちであるが、土坑状の掘り込みが認められている。炉は北側主柱穴間中央付近に築かれ、地床炉となる。壁際には幅15cm、深さ10cm程の壁溝が途切れることなく巡り、床面は住居中央付近で非常に堅緻で、そのほかはやや軟弱である。住居は良好に検出されたものの、出土した土器は少なく、全体がハケ調整された甕が1点[第28図]出土したのみである。



第27図 S B 10



第28図 S B 10出土土器



S B 10

### S Z 1

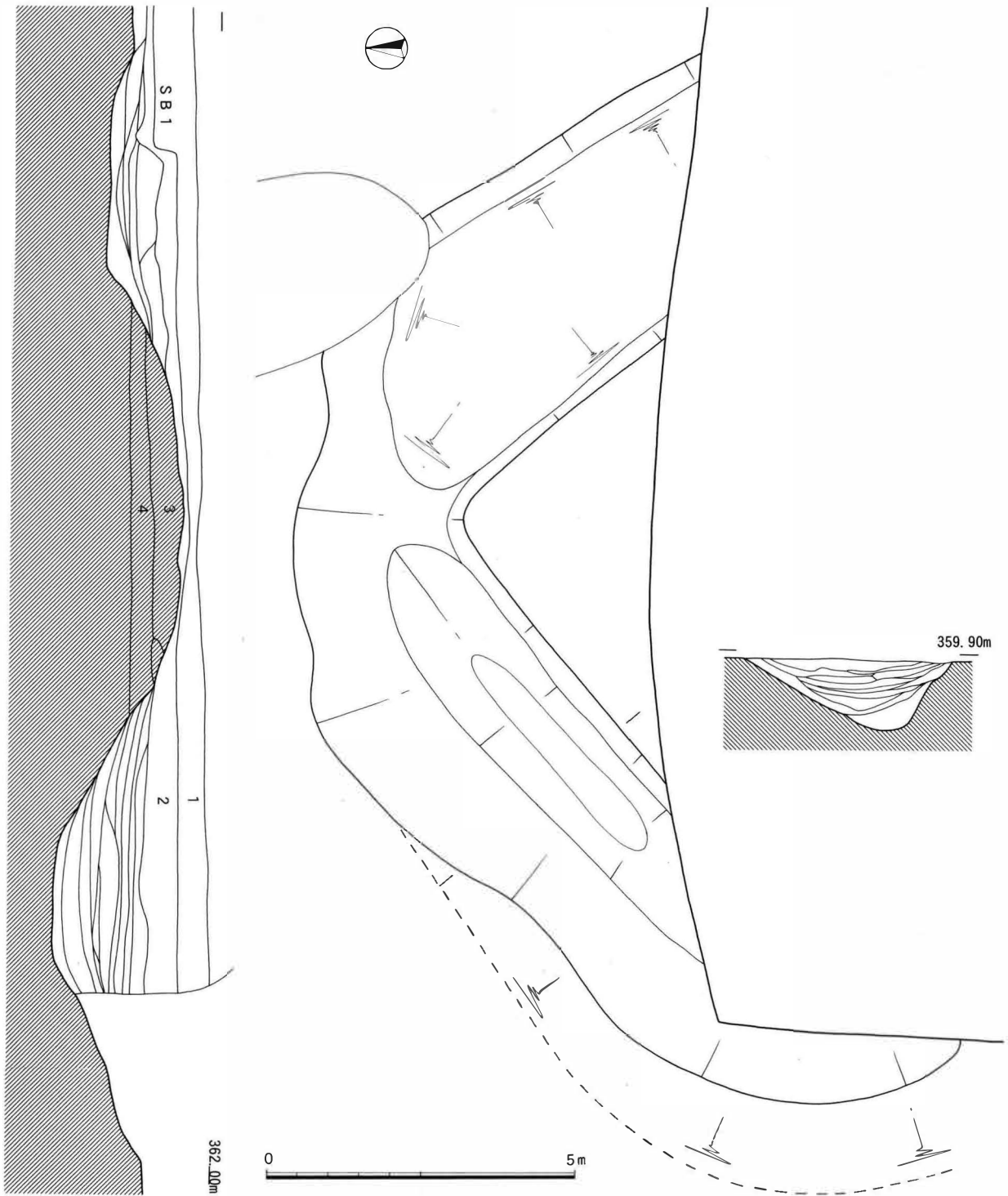
調査区のほぼ中央の南側調査壁に沿うように検出された遺構である。幅3～4m、深さは20cm～110cmを測る溝状遺構で、調査範囲内において「く」の字に屈曲している。西側にも溝のコーナーの一部が確認され、その様相からおそらく長方形を呈するものと思われる。検出された周溝の状況からやや極端な表現ではあるが、第32図に示したような一辺に突出部を持ついわゆる前方後方形の墳丘墓を想定する。

規模は東西方向約8m、南北方向約6.5m、周溝部分も含めるとおよそ16m×13mの範囲に展開するものと思われる。前方部となる突出部はそれほど大きくはならないと予想される。方丘は直線的に構築され直角のコーナーを作り出し、周溝の方丘側の立ち上がりは強い傾斜を持つものの、外側は緩やかに立ち上がる。周溝内底面付近からは多量の土器が出土し、集中的にかたまって出土した地点も数ヶ所見られることから、ある程度時間差を置いた葬送儀礼が執り行われた可能性も指摘できる。

第29図の左側に示した断面図は調査区南壁を実測したものである。第1層は暗灰褐色の奈良時代遺物包含層、第2層は第1次調査面で基準とした黄褐色の砂質土層である。周溝内の土の堆積状況は、上層の砂質土層と下層の黒褐色粘土質土層とに大きく分けられ、砂質土層は細かく分層できる粗い砂で、この砂層からの遺物の出土は全くなく土器はすべて下層からの出土である。遺構は第4層の縄文時代から弥生時代の遺物包含層（厳密には分かれるであろうが、調査時においてこれを明確に分層することはできなかった）を切り込んで構築されており、

周溝を掘削する際に出た土を第4層上面（第3層）に積み上げているため、盛り土と見られるこの層には縄文時代から弥生時代の遺物が多く含まれている。暗褐色を呈する第3層にはところどころ黄褐色の砂質土層がブロック状に混入し、その状況は墳丘の存在をより明確にしているものである。

当該地は住宅地あるいは商業地として早くから機能した地域で、周辺の地形変化は著しい。このような状況下にあっても幸いにも盛り土が削平されずに確認できたことは、未調査の部分に埋葬施設が遺存している可能性が高いと言える。



第29図 S Z 1 (1/100)



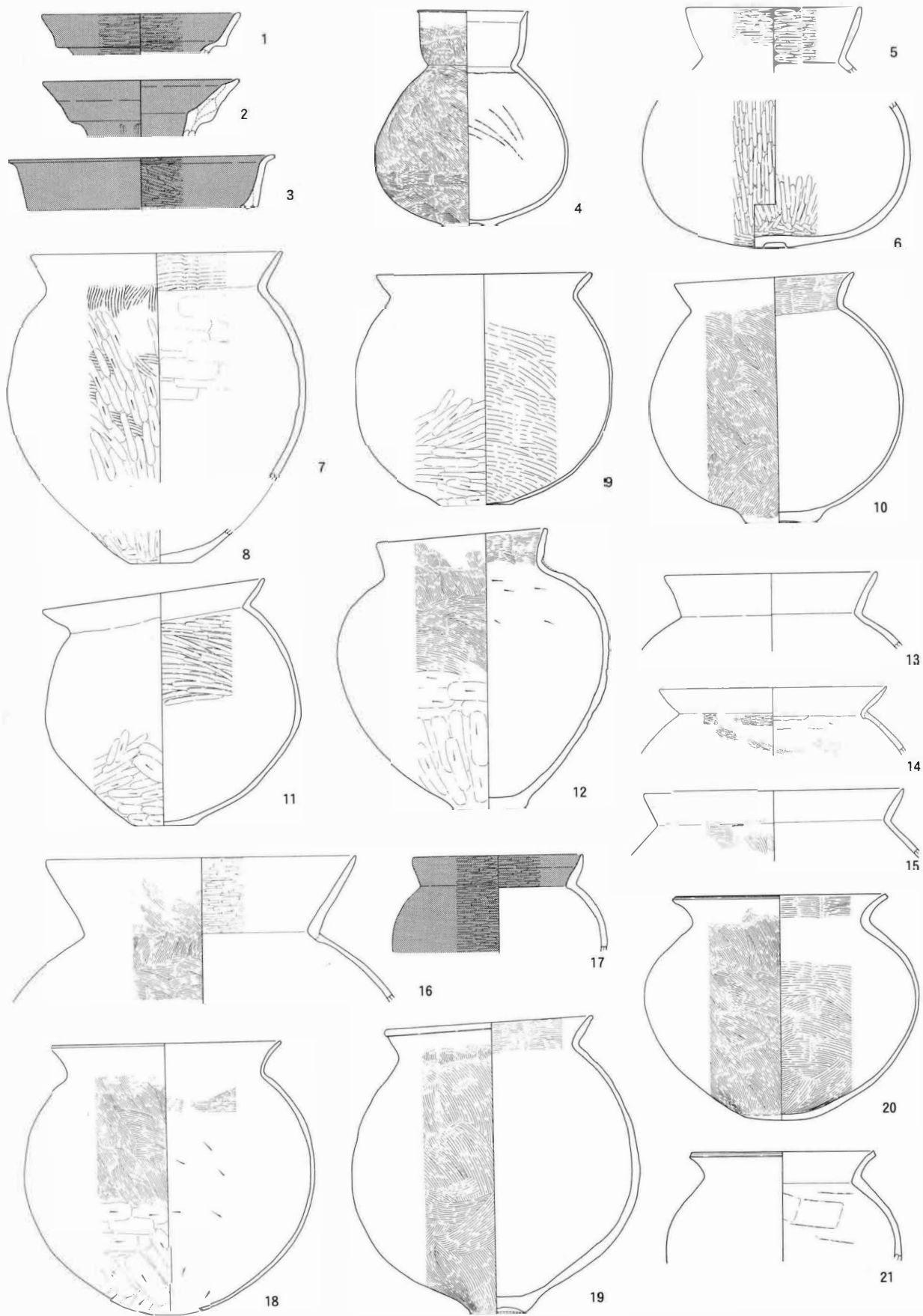
S Z 1 (北より)



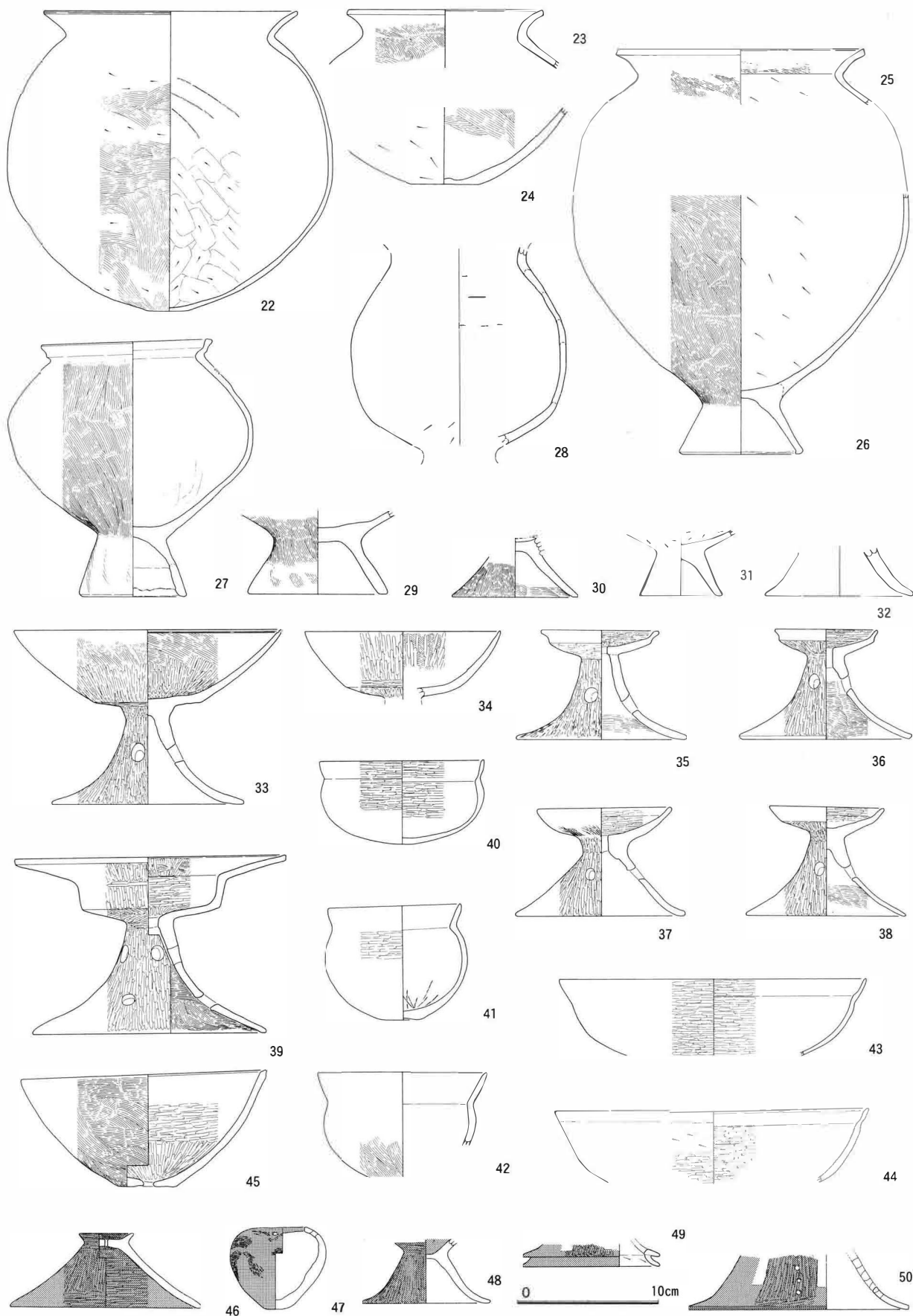
S Z 1 (西より)

出土土器〔第30・31図〕には、壺（1～6）、甕（7～24）、台付甕（25～32）、高杯（33・34・48～50）、器台（35～39）、鉢（40～44・47）、甑（45）、蓋（46）などがある。またほかに図化しなかったが縄文時代や弥生時代の土器片、石器等も多く出土している。1～3は有段口縁壺の口縁部で1は内外面ともに赤彩され丁寧にヘラミガキが施される。4～6はいわゆるひさご壺である。4の口縁端部は強い横ナデにより調整され、全体をハケ調整によって仕上げ、胴部内面には板状工具によるナデの痕跡が傷のように数本見られる。この土器は西側の落ち込みの上面より出土（第32図参照）したもので、直接当該遺構に伴う土器とは断言できない。5・6は全体にヘラミガキが施され、6の底部には円形のへこみがある。甕は口縁部に面取りがされるものとそうでないものがある。7～17は面取りされないもので、口縁部はハケ調整したのち強い横ナデを施すのが普遍的に観察され、胴部はハケあるいはヘラケズリが施されている。17のみ赤彩がされ、横方向のヘラミガキが施される。18～23は口縁端部が面取りされるもので、擬凹線文をもつ20・21も見られる。ほかの甕同様口縁部は強い横ナデにより調整され、胴部についても変化はない。27はいわゆるS字状口縁台杯甕であるが、口縁部は厚く不明瞭である。33の高杯、35～38の器台はいずれも脚部に3つの穿孔をもち、39の脚部には上下3つずつ計6つの穿孔がある。45の底部には焼成前の穿孔が1箇所見られる。

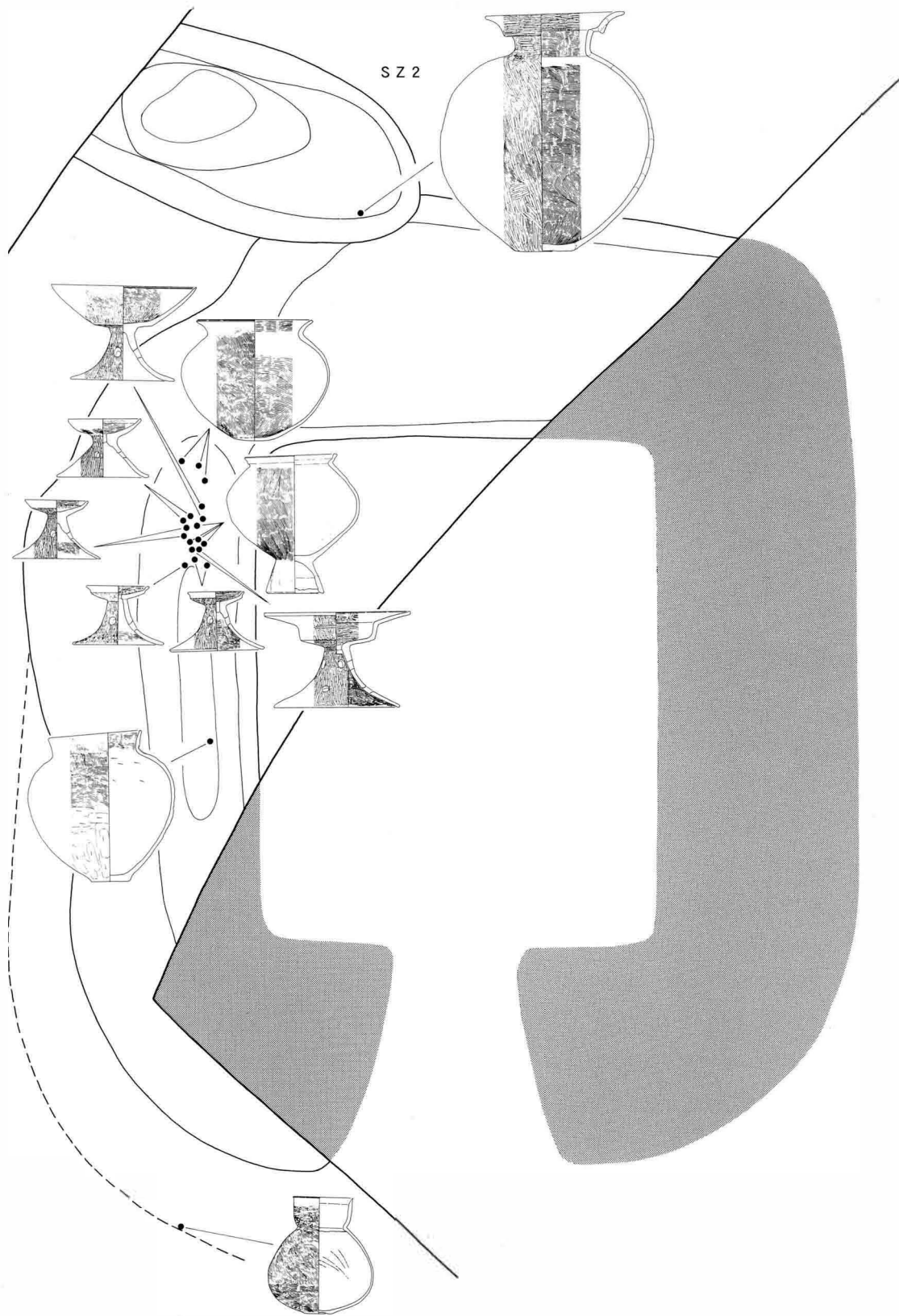




第30图 SZ1出土土器 ①



第31图 SZ1出土土器②



第32図 遺物出土地点及び範囲想定図(1:100・土器は1:8)

## S Z 2

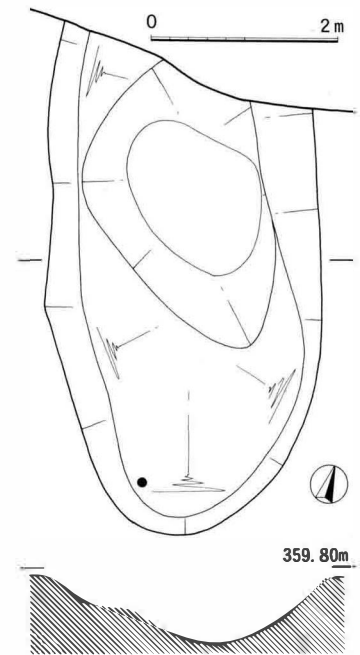
S Z 1 の北隅付近を一部破壊して構築される幅約 3 m の溝状遺構で、北側は調査区域外により検出できず全体の様子は把握できないが、その状況から墳丘墓の周溝と判断される。検出面よりの深さは最大 40 cm を測り、全体的に緩い傾斜をもって掘り込まれる。ただ中央付近には不整楕円形を呈す土坑状の掘り込みも見られ、底面の凹凸は著しい。

墳丘墓（周溝墓）にはさまざまな形態があるが、この遺構は検出状況から隅一ヶ所に陸橋部をもつ方形を呈する墳丘墓と思われる。しかし本来であればそのほかの部分にも周溝が検出されるはずであるが、調査範囲内においては確認されておらず、また調査区壁でも周溝あるいは盛り土のような墳丘墓を思わせる遺構の確認はされていない。したがって本遺構のみをもって墳丘墓とは一概に断言できない。

出土した土器は比較的小破片のものが多く、縄文・弥生時代の土器片も含め多くの土器が出土している。出土土器 [第34図] には壺（1～3・9）、甕（4～8・10）、鉢（11）のほか埴輪（12）がある。1 は S Z 1 との重複部分で潰れた状態で出土した。当初、当該遺構の存在が明らかとなっていなかったため、S Z 1 に伴う遺物として取り上げたが、調査が進むにつれこれを破壊して構築される溝状遺構を確認するに至り、改めて当該遺構出土遺物として扱うこととした。

口縁部は有段となり下部は舌状に突出し、外面のみにやや雑な赤彩が施されており、横方向のヘラミガキと軽いナデにより調整される。内面にも横方向のヘラミガキを施し、端部付近に強い横ナデによる調整が見られる。頸部から胴部にかけての外面は、ハケを施したのち頸部において横方向に、胴部については主に縦

方向のヘラミガキによって調整され、内面はハケ調整のみである。2 と 3 も有段口縁になるが、1 のようにしっかりとした段にはならない。端部には横ナデによる面取りをもち、2 の口縁部は横方向のヘラミガキによって調整され、頸部外面には縦方向のハケ、内面は横方向のヘラミガキ、胴部外面はヘラミガキされている。3 の口縁部はハケと横方向の強い横ナデを施し、頸部から胴部にかけてはハケを施している。4 は単純口縁となる甕で口縁部は強い横ナデにより整形され、内面にはハケ調整の痕跡も残る。胴部外面はハケ、内面はヘラケズリにより調整される。5・6 の口縁端部は強い横ナデによる面取りがされる。5 の端部には擬凹線文が見られ、全体にナデ調整によって仕上げられている。6 にはハケ調整が見られる。7～10 は底部破片であるが 9 は壺、そのほかは甕の底部と思われる。比較的小さな底部で 7・8・10 の外面にはハケが見られ、内面にもハケを施すものが見られる。11 の口縁部には部分的にヘラケズリが見られ強い横ナデにより整形される。胴部外面はハケ調整、内面はナデによるものである。12 は埴輪の口縁部破片で胴部が出土していないため全体の形態は不明であるが、おそらく壺形を呈するものと思われる。口縁端部は面取りが施され、縦方向のハケを施したのち部分的にはあるが横ナデを行っている。



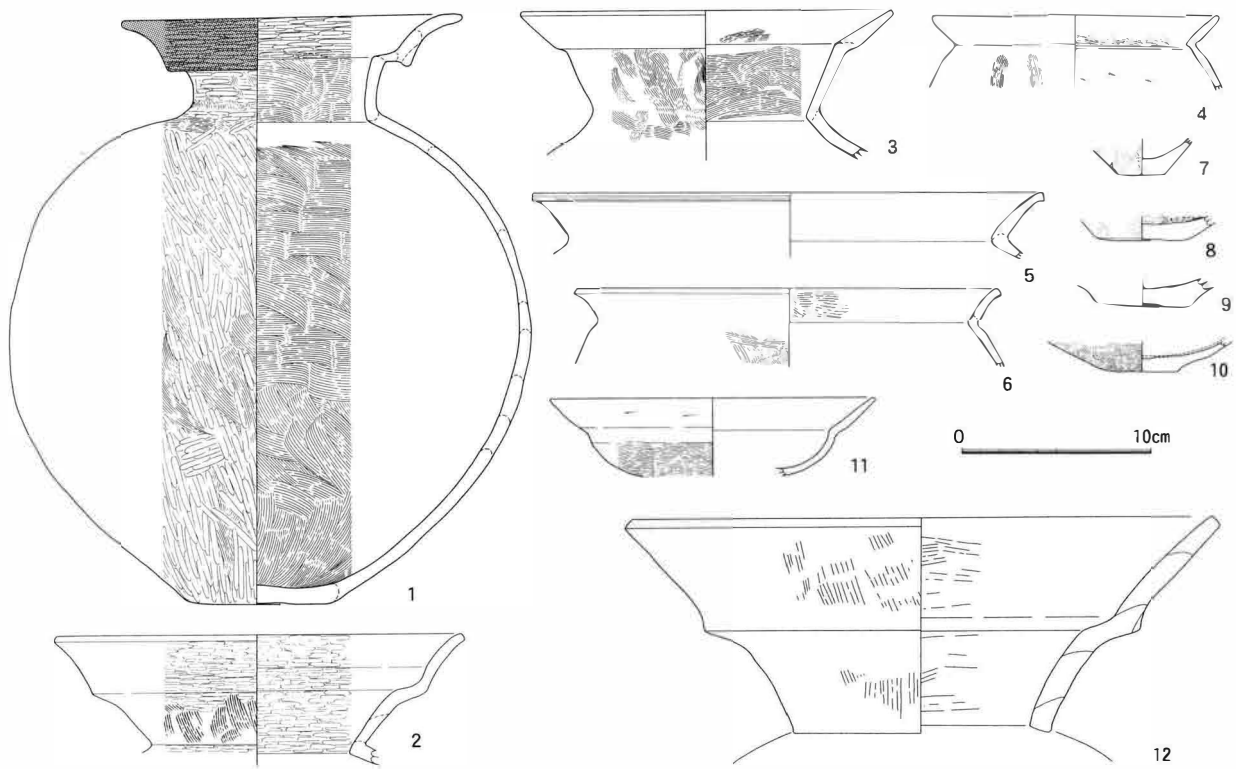
第33図 S Z 2



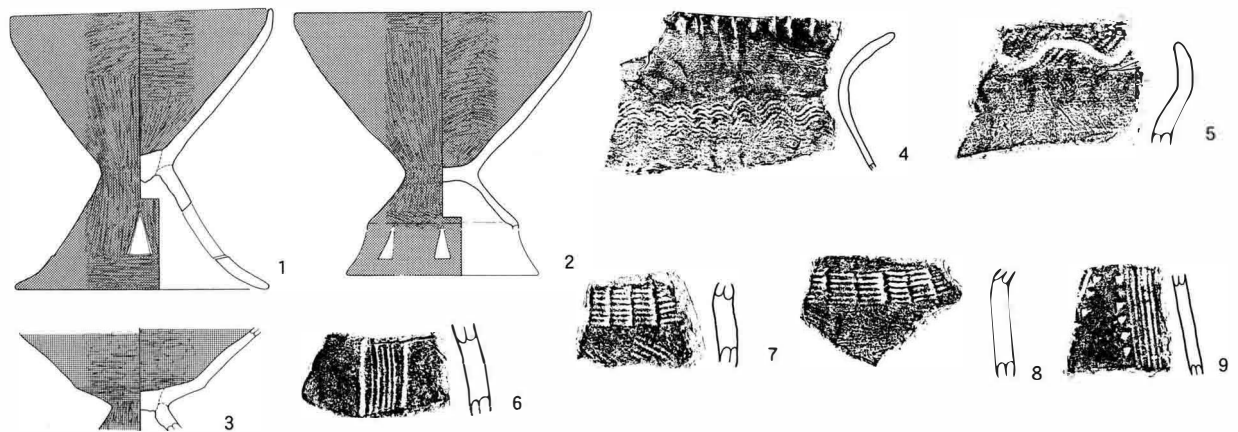
S Z 2



S Z 2 土層断面



第34图 S Z 2 出土土器



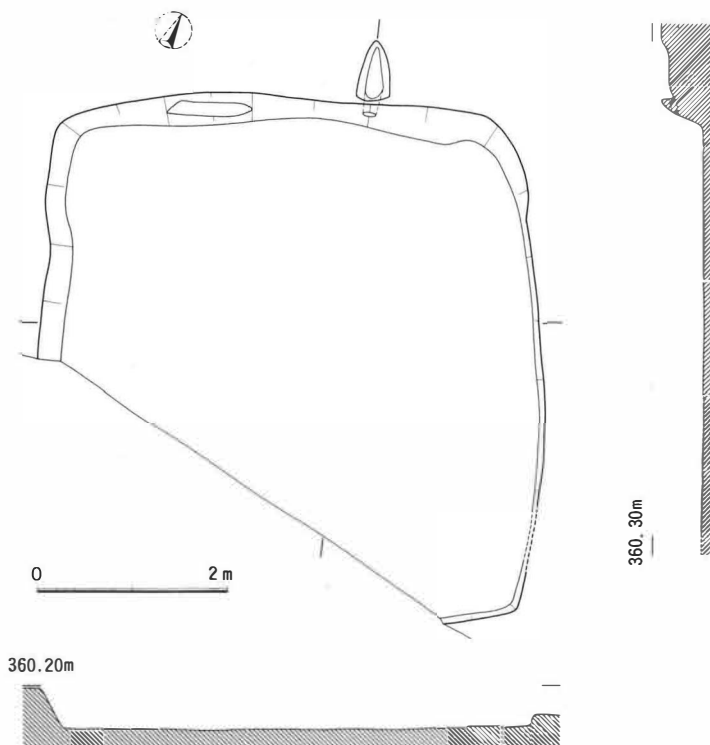
第35图 遺構外出土土器②

(5) 奈良時代

S B 1

調査区東側の中央部付近で検出された住居でS B 2と重複関係にありS B 2を破壊して構築される。南側の一部は調査区域外にあるため検出できなかったが、5.40m程を測る方形住居である。検出面からの深さは46cmを測る。北壁中央よりやや東寄りに煙道が検出され、この部分にカマドがあったのであろうが住居廃絶時に既に破壊を受けており、カマドの本体は跡形もない。その部分からは甕を中心とした土器が多量に出土している。床面は中央付近で僅かに堅緻であるがそのほかは軟弱で、柱穴等の施設は確認されていない。

出土土器〔第37図〕には須恵器壺(1)、土師器杯(2)、土師器甕(3~5)がある。1は長頸壺となると思われるが、頸部より上が欠損している。2は内面が黒色処理され、甕はすべて長胴となる。



第36図 S B 1



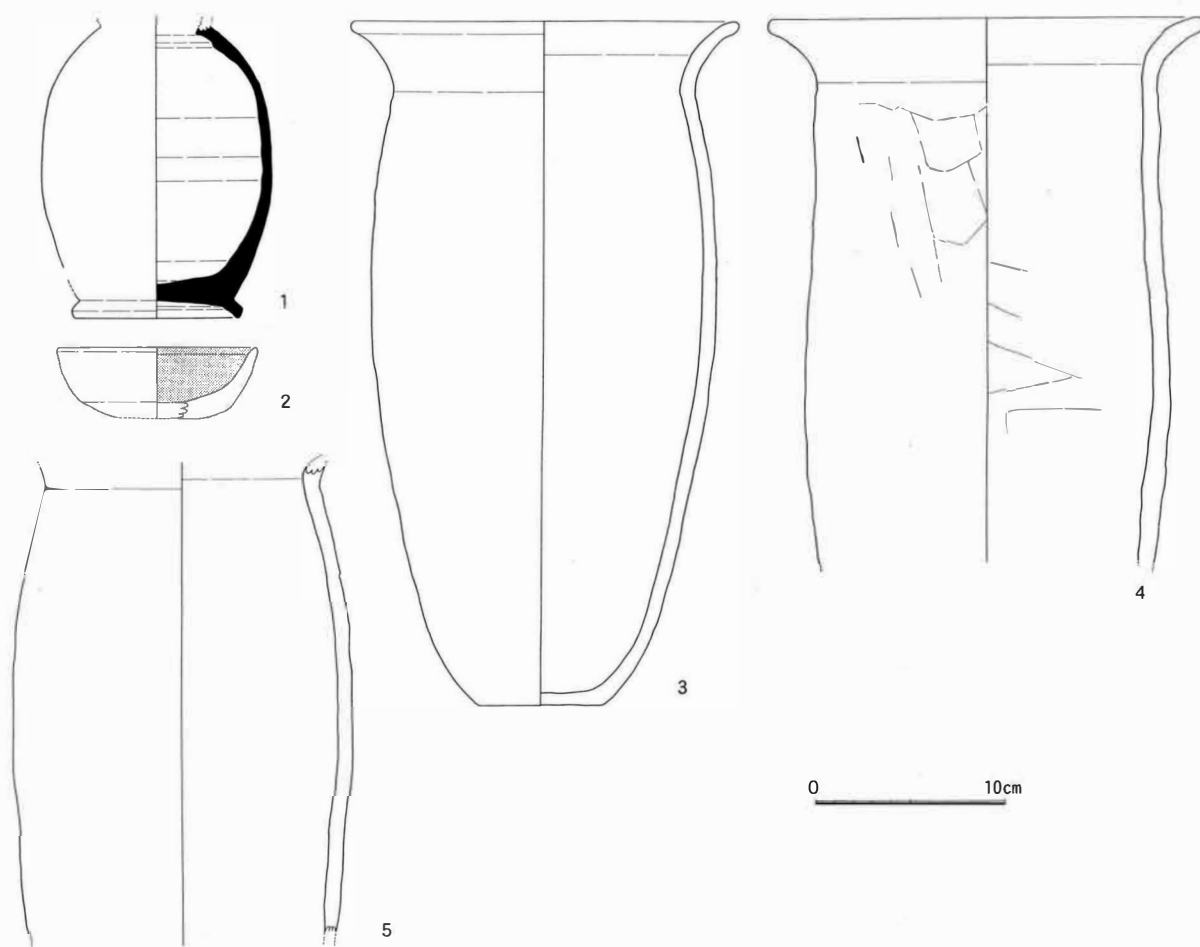
土器出土状況



S B 1



土器出土状況

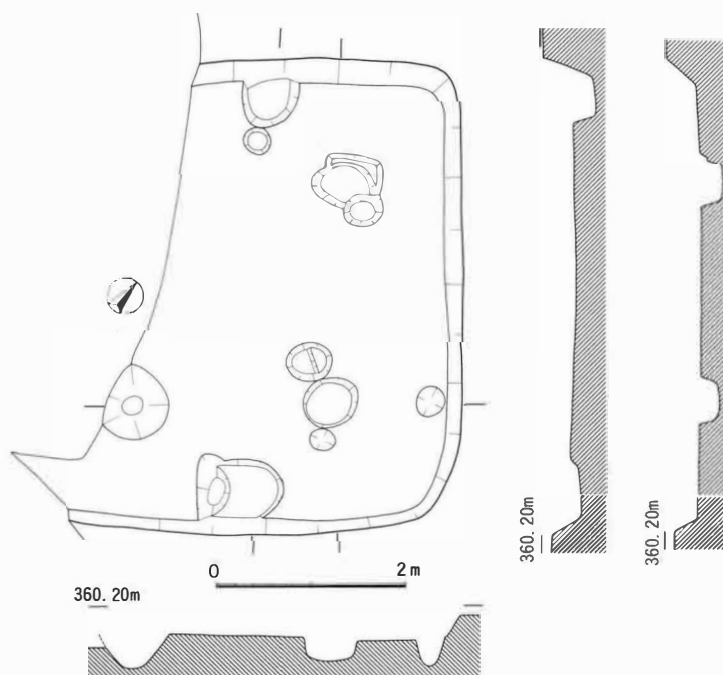


第37図 SB 1 出土土器

SB 2

SB 1 に西側の1/4程が破壊されているため全体を検出することはできなかったが、5 m程の方形住居を想定する。SB 1 同様カマドは北壁の中央付近に構築されるものと思われるが、その痕跡はなく煙道も検出されていない。床面は比較的明瞭に検出されたが全体に軟弱である。床面には多くの柱穴と思われる土坑を確認したが、このうち主柱穴は3基で、方形に配置されるものである。南側の壁際には出入口に伴うと見られる掘り込みも検出されている。

出土土器〔第39図〕には須恵器蓋（1・2）と土師器甕（3・4）があるが、すべて覆土上層から中層にかけて出土したもので、床面よりの出土はない。



第38図 SB 2



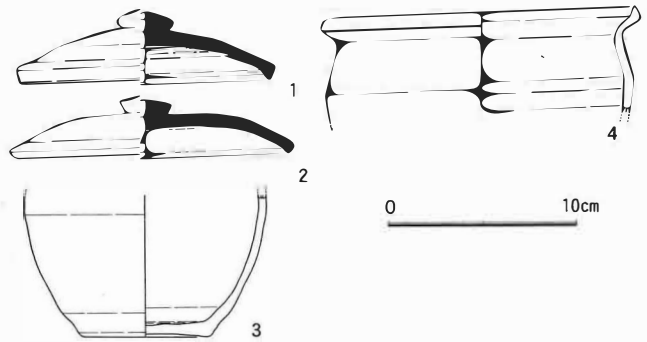
土器出土土器



S B 2

S B 3・4

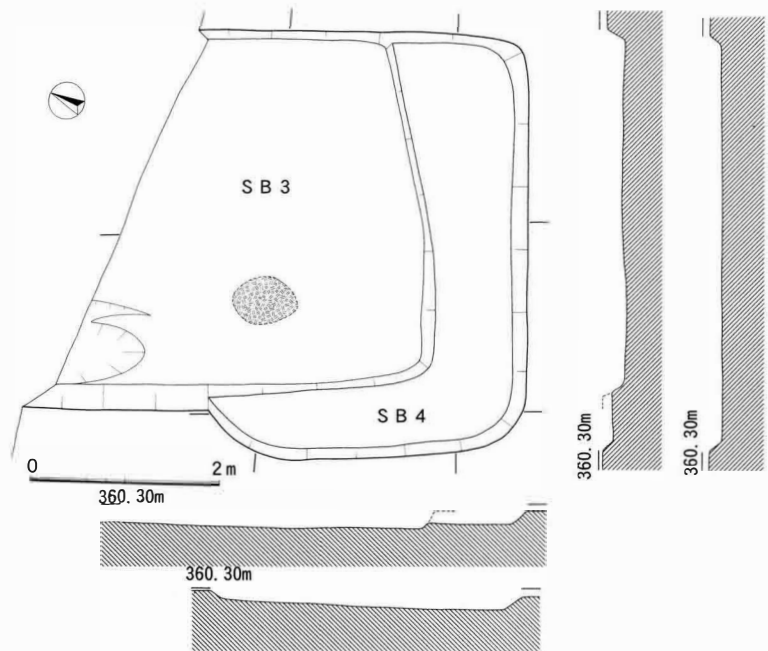
互いに重複関係をもつ住居で、S B 3がS B 4を破壊する形で検出された。S B 3は北側の1/3程が調査区域外にあるため全体を検出するには至っていないが4 m前後の方形住居と判断され、検出面からの深さは24cmを測る。範囲内において住居に伴う施設は確認されていないが、カマドは未調査の部分にあるものと考えられる。床面は明瞭に検出されたものの、全体に軟弱で一部に堅緻な床が認められる程度である。



第39図 S B 2 出土土器

S B 4は住居の大半をS B 3により破壊されているため全体の1/4程度を確認できたにすぎない。住居形態は長方形を呈し、東西方向4.50mを測るものである。S B 3同様範囲内においてこの住居に伴うと見られる施設は確認されず、検出面からの深さは14cmを測るが床面も全体に軟弱で不明瞭である。2軒の住居とも土器の出土は少ない。

出土土器〔第41図〕は、S B 3からは須恵器杯（1）、土師器杯（2）、須恵器蓋（3）があり、S B 4からは土師器甕（4）がそれぞれ出土している。



第40図 S B 3・4

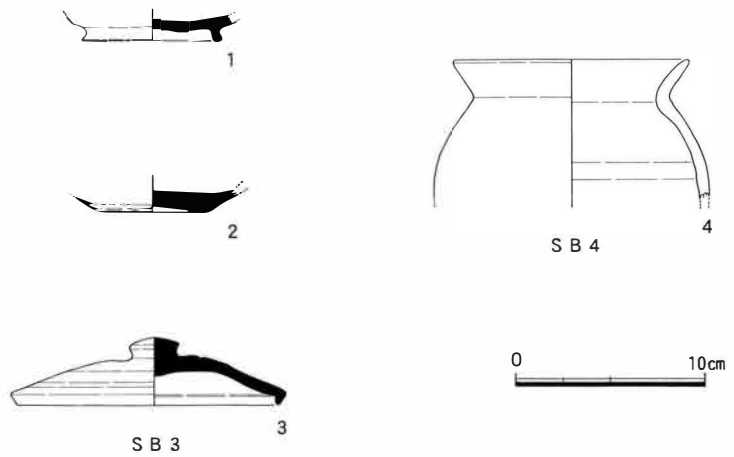




S B 3・4



S B 3 出土土器

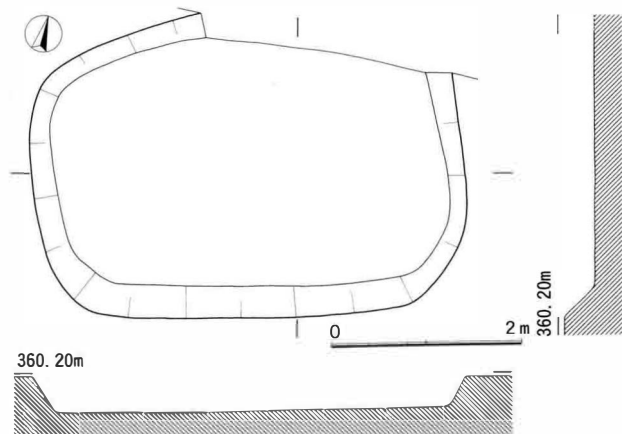


第41図 S B 3・4 出土土器

S B 5

他遺構との重複はないが住居の東側には僅かに落ち込む遺構らしきものも検出されている。しかしながらこの落ち込み内からの遺物の出土がないため遺構として扱っていない。北側の一部が調査区域外になってしまったため全体を検出することはできなかったが、隅は丸みをもつ長方形の住居を想定する。床面は全体に軟弱であるが、調査区壁際より甕が2個体潰れた状態で出土している。

出土土器〔第43図〕には須恵器杯（1）、土師器鉢？（2）、土師器甕（3・4）がある。



第42図 S B 5



土器出土状況



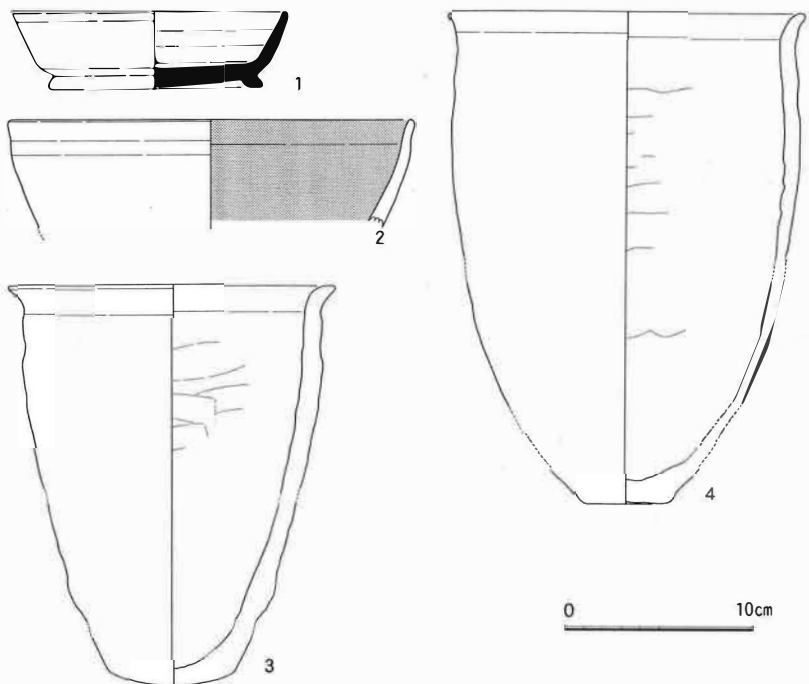
S B 5

S B 6

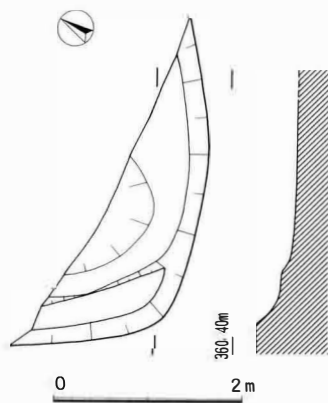
他遺構との重複はないが、遺構の大半が調査区域外に存在しているため隅の一部を検出できたにすぎない。よって規模や形態などについては不鮮明な点が多く判然としないものの、方形の住居を想定するが、床面は傾斜し凹凸も著しい。

この遺構より東側では該期遺構がまったく検出されていないことから遺跡の東端にあたるものと見られ、遺跡は北側と南西方向へ広がるものと思われる。

遺構自体が非常に不鮮明であったため遺物の出土も少なく、土師器の甕の破片が数片出土しているのみで、図化することはできなかった。



第43図 S B 5 出土土器



第44図 S B 6



S B 6

## 第IV章 総括

### 第1節 各時代のまとめ

#### 1 縄文時代

縄文時代の遺物は調査区のほぼ全域で出土するが、遺構として判断されるものは僅かである。弥生時代との包含層が明確に分離できていないため層位的な遺物の取り上げはできておらず、そのほとんどが遺構検出作業中よりの出土となる。したがって時期の異なる土器が混在し、検出された遺構も少ないことから居住域として展開する時期の断定が困難ではあるが、少なくとも中期末から後期初頭の比較的短い時間内での展開が予想できる。

この時代の遺構としてもっとも明確に判断できるのは敷石住居のS B15であるが、重機による遺構検出作業において、その削平が下部にまで達してしまっただめに住居の掘り込みが確認できなかったのは残念であり、その結果、遺物の出土も極めて少ない状態になってしまった。中期末から後期初頭という近接した時期の遺物が出土していることから住居の時期比定が困難となり、加えて住居の範囲がはっきりとしていないため周辺から出土する遺構に伴わない夥しい量の土器が混在し、より一層時期の確定が困難になったと言わざるを得ない。また住居自体も従来の敷石住居の認識からすると、石の敷き方や炉の未検出など敷石住居としての不確定要素が多くある。S B16は掘り込みが不明確であり、住居跡と判断するにはやや根拠に乏しいが遺物の出土量は多い。床面（底面）から出土した伏せ鉢の下からは人骨が検出されていることから、住居というよりは墓跡を想定した方が良いのかもしれない。

#### 2 弥生時代

弥生時代は中期と後期に分けることができる。中期は後半にあたる「栗林式期」の住居跡を4軒検出し、出土土器の様相からこれらの住居はほぼ同じ時期に存在していたものと言える。とくにS B13は全体の半分以下しか調査することはできなかったが良好な資料を得ることができ、栗林式土器の変遷を検討する上で重要な資料となる。周辺の地形状況などから、集落は調査地の北東方向あるいは南西方向への広がりを想定することができるが、それほど大規模な集落にはならないであろう。全体を検出できた住居はないが、形態はすべて円形もしくは楕円形を呈し、円形から方形へ移行する中期後半の中にあって検出されたこれらの住居は古い形態を継承しているものといえよう。

ここで検出された時期より以前は、当該遺跡に限らず過去の調査例を見ても集落は小規模なものであったと考えられる。また稲作等の生産作業も行われていたではあろうが、小規模な集落形成から考えるとそれほど活発に行われていたとは考えにくい。根拠には乏しいが、当該地周辺は扇状地特有の浅い地下水脈をもつ地域があり、現在でも地面を少し掘り下げると水が湧き出てくる。おそらく当時もこのような特性を利用し、小さな水たまりを築き、それを水田として利用していたのではないかと考えられる。

ところがこの後に続く段階になると、一種拠点的な広大な集落を築くことが各地域の発掘調査により明らかになっており、遺跡の増加も顕著である。その背景には大規模水田の開拓とそれに携わる人々の増加、あるいはそれらの技術を持ち得た人々との交流などが考えられ、石川条里遺跡や川田条里遺跡などで検出された弥生時代中期後半の埋没水田跡は、この時期すでに本格的な水稲耕作が確立していたことをものごと、これによって社会情勢や生活様式に著しい変化を与えたものと思われる。他地域の人々との交流などに伴う新たな技術の導入は、生活様式の変化とともに土器形態の変化や器種の多様化を促し、ややもすれば石器の変化をも読み取ることができ、磨製石鏃など刃部を鋭利に研ぎ出した磨製石器の出土も頻繁に見られ、また、穂摘具とされる石庖丁の出土

例（保有率）も高くなる。またこの新段階に至り集落の拡大もさることながら、各地で造成される囲郭集落は集落間、もしくは他地域との緊張関係が少なからず存在していたものとして注意され、この背景にも稲作の存在が大きく関与していると言える。集落間の交流と緊張状態という相反する複雑な状況の中で、共栄を模索している当時の生活を想像することができる。

今回調査された集落はその前段階として徐々に定着し始めた水稲耕作を発展させるとともに新たな技術を受け入れ、これをもとに生活様式の変化を導かせた時期として注目される段階の遺跡である。

後期は後半にあたる「箱清水式期」の住居跡2軒と土器棺墓1基を検出したが、住居と土器棺墓では出土土器の様相から時間差が認められる。今回検出された住居は2軒と少なく住居の構築も同時期と判断され、限られた時間内での小規模集落が営まれていたことが理解できる。各地で確認される後期後半の集落は比較的大規模な形成が認められているが、その中であって今回の集落は小さく、集落域としての存続期間も非常に短いものであったと判断され、のちに墓域として土地利用されるようになるまでそれほど長い時間はかかっていない。

土器棺墓は大形の壺を2個体使用し、いずれも頸部付近を意図的に分離させた胴部同士を合わせ口にして埋置したものである。分離された口縁部側は棺本体に添えるように置かれ、土壙の底面には円形に並べられた円礫も確認されている。棺に使用された大形の壺は箱清水式土器の形態を少なからず継承してはいるものの、この時期の壺に普遍的に装飾される頸部文様帯は存在せず、赤色塗彩もまた施されていない。

棺に用いられる土器は基本的に壺もしくは甕によって構成され、そのほとんどが壺と甕の組み合わせによるものあるいは壺同士、甕同士に代表されるが、そのほかにも高杯や鉢などを棺の蓋として用いたり、壺や甕が単体で出土したりする例もある。このように形態差が認められることにはそれなりの理由があるように思われるが、ただ単に日常使用していた土器を無作為に抽出し、棺として再利用するのであろうか。それとも新たに専用の土器を製作し、決まったパターンの組み合わせを意図的に採用するのだろうか。また現状の土器棺の大きさでは成人をそのまま埋葬することは不可能に近く、胎児や幼児など子供専用の墓であるのか、あるいは再葬墓として機能するものなのか、その場合の土器の採用基準には何かしらの規範があるのであろうか。など様々な問題点が多くあるほか、該期の墓の形態には土器棺墓のほかに土壙墓や木棺墓、埋葬主体部を中心に墓の占有地を明確にする周溝墓があり、墓の形態を採用するこの選択には身分差や地域差のほか、時期差などの要素も考えられ、またそれらの中にも多様な形態が認められることからすれば、今後綿密な分析・検討が必要となってこよう。

### 3 古墳時代

前期に比定される住居2軒と周溝を伴う墳丘墓2基を検出した。住居からの土器の出土は少なく、とくにS B 7は弥生時代後期終末に比定されるであろう土器も多く含まれ住居形態も不明瞭である。またS B 10は住居全体が良好に検出され、その様相は該期住居形態の特徴を示してはいるものの、全体の形が捉えられる甕が一点出土しただけである。他の時代と同様、集落の規模は大きくない。

2基の墳丘墓は、調査範囲の関係から全体が検出できておらず、とくにS Z 2は周溝の一部であろう溝状の遺構が確認されただけであり、全体の様子がまったくつかめない状態にある。

S Z 1は比較的良好に検出され土器の出土も多いが、調査区壁断面で確認された墳丘造成時の盛り土を平面的に調査できなかった点は残念であり、また土器の検出作業に関しても調査者のミスにより出土状況写真あるいは出土状況図の作成など明確な記録ができないまま調査を終えてしまったりと、非常に反省点の多い調査となってしまった。なお、第32図に示した土器の出土地点図は、調査時にメモ的に野帳へ書き込んだ出土位置を頼りに作成したもので、やや信憑性に欠けるものではあるが、何の情報も提示できないよりは良いと判断し掲載することにした。

S Z 1の形態は前章の各遺構説明の中でも述べたように長方形の方丘に台形状の突出部のつく、いわゆる前方

後方形を呈するものと思われる。ただ墳丘全体を検出したわけでもなく、前方部と考えられる部分に至っては周溝の一部が内方向へ屈曲する部分が僅かに確認されただけであって判断に苦しむ。

県内における前方後方形の墳丘（周溝）墓の検出は近年になってその確認事例を増加させているが、とくに開発行為に伴う膨大な量の発掘調査件数を誇る長野市域での調査例が多く、千曲川流域に偏在する傾向が今のところある。形態あるいは立地条件などそれぞれ様ではないが、古墳時代初頭から前期という限定された時期に集中し、徐々にその形態を変化させていく過程を捉えることができる。また出土する土器の様相についても東海や北陸あるいは畿内といった外来系統の土器の流入や、それらに影響を受けたと見られる土器が目立ち、弥生時代後期に始まる幾度かのアプローチは在地系土器に影響を与えつづけて形態変化を促し、土器の様相はこの時期に境に一変する。これは墓から出土する土器に限ったことではなく住居から出土する土器にも同様である。

これまで前方後方形墳丘（周溝）墓の調査において埋葬主体部を確認できたものは極めて少ない。山の上に築かれる墳墓の埋葬主体部は破壊を免れ検出される例も多いが、平地に築かれた墳墓は調査の時点でそれと気付かずに削平されてしまったり、後の時代の住居等の構築や近年の開発行為による破壊など様々な要因により検出できない場合が多い。S Z 1にはおそらく埋葬主体部が遺存していると思われるが、調査範囲の制約によりそれを確認することはできなかった。また今回のように調査前の現況ではその存在を把握することはできないが、調査段階でこういった墳墓が検出されることも今後予想され、とくに市街地周辺は地形の変動が著しいことから、掘削に際してはより慎重な対応が必要となり、細心の注意をもって調査することが望まれる。

S Z 1の調査は周溝のみに終始し、ここより出土した土器は、埋葬の際の葬送儀礼に用いられたものと判断する。土器はかたまって出土しておりそのありかたは周溝内に並べ置かれたというよりは、むしろ葬送儀礼の後一箇所にまとめられたと推測される。

S Z 2は先述したとおり周溝の一部が検出されただけであって全体の様子はずかぬ。S Z 1のような調査区壁での盛り土の存在、もしくは全体がおおよそ把握できる程度の周溝が確認されれば何かしらの解答が得られたであろうが、現段階ではこの遺構が墳丘墓の周溝として機能しているものなのだろうか判断し兼ねる。また覆土内からは埴輪片が出土しているが、調査時において出土する夥しい量の縄文時代土器との判別がつかなかったことから、出土状況を明確に把握するには至っていない。土器を取り上げたときの袋の内容からすると遺構のほぼ中央、底面より僅かに浮いたところより出土しているが、同遺構内より出土した土器とは必ずしも共伴関係とはならない。埴輪は壺形を呈すると考えられ、口縁部から頸部にかけての僅かな破片である。埴輪についての詳細は後節で説明する。

#### 4 奈良時代

該期の遺構は住居跡6軒が検出され、遺跡そのものとしては検出面より広範囲にわたり該期土器が採集されていることから調査区全体に広がるものと判断されるが、調査区の西半分はオイルタンクの建設による破壊を受けているため住居の検出は皆無であり、集落の展開や範囲・規模などについては不鮮明である。また1次調査面において検出された土坑や溝跡などの遺物の出土しない遺構は、奈良時代もしくはそれ以降に構築された遺構であると思われる、検出面より平安時代に比定される土器片も僅かながら出土していることから、周辺に奈良時代以降の居住域が展開している可能性も指摘できよう。

調査区の西側の隅には3基の柱穴らしき土坑が検出され、調査区壁には住居のような掘り込みの一部も確認されていることから、おそらく住居が存在していたであろう。しかしながら破壊が著しく、床面すらも確認できない状態で遺物の出土もない。検出された住居は東側の調査区に集中し、重複も見られることから時間差が認められるが、土器の様相に関してはそれほど時間差を感じるものではない。

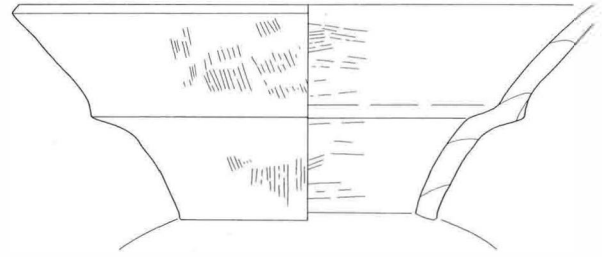
## 第2節 壺形埴輪

S Z 2の周溝覆土下層（底部直上）より出土している。多量の縄文土器片とともに出土しており、本墳に伴うと判断された土器群とは良好な状態で共存していない。出土した破片（4片）はすべて接合し、頸基部より口縁端部まで認められるものの、口縁部1/10以下と残存率は極めて悪い。また、体部の破片等、接合関係のない破片もみとめられない。

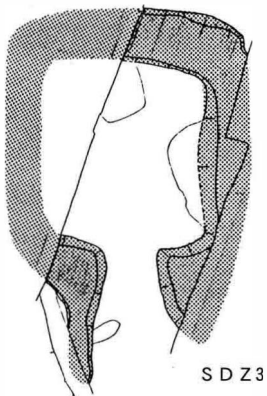
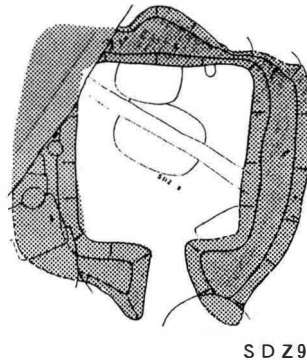
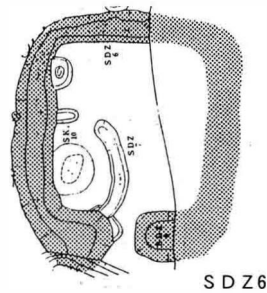
復元口径30.4cm、残存高11.4cmを測る。頸基部より緩やかに外反し、段をなして口縁端部へといたる二重口縁壺である。口縁端部は面をもっておさまられている。成形は輪積みによるものとみられ、外面タテハケ、内面ヨコハケ後、ナデ調整を施し、整形している。ナデ調整は外面において顕著であるように粗く、ハケ目は半スリ消し状態である。突帯部は、擬口縁状に作り出した後、さらに粘土紐を貼り付け成形している。その後、内外面ともに強いヨコナデによって整えられている。胎土はクサリ礫や砂粒を若干含み精良、色調は内外面ともに赤橙色を呈し、焼成は良好である。

さて、同一遺構出土という共存関係を重視するならば、周溝出土の土器群と併行するとみるのが妥当であろうが、多量の縄文土器とともに本資料が出土したという出土状況よりは、ただちに土器群の型式観をもって本資料の位置づけをおこなうことはできない。このため、土器群とは一度切り離して、壺形埴輪の類似資料との比較検討より位置づけをおこなうこととしたい。

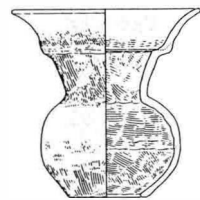
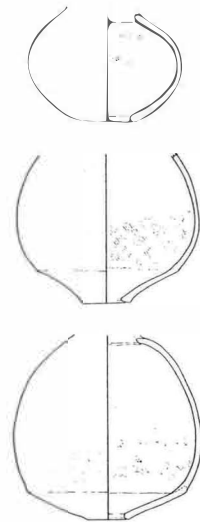
善光寺平において類似例を求めると、篠ノ井遺跡群聖川堤防地点S D Z 3出土資料（青木ほか1992）に共通点が多いこ



第45図 壺形埴輪実測図



(1 : 500)



(1 : 8)

第46図 前方後方形周溝の変遷と底部穿孔壺

とに気が付く。SDZ3は最大長約25mを測る前方後方形周溝墓であり、周溝内より赤色塗彩底部穿孔壺が1点出土している。この壺は胎土・焼成から土師器の範疇に入るものであろうが、報告者も指摘するように、日常容器として集落域から出土する土器とは様相を異にし、また、墳墓より出土する底部穿孔壺形土器とは底部形態や穿孔方法の違いから壺形埴輪に極めて近いといえよう。

本資料を篠ノ井遺跡群SDZ3出土壺と比較すると、赤色塗彩や口縁部径、頸部長において違いが認められるが、調整方法（粗いハケの後粗いナデ）や口縁段部に端的に示される成形において共通し、製作時期が大きく変わらないものと考えられる。ただし、相違点として指摘した赤色塗彩や頸部の短縮傾向、口縁部の大型化は時期差を示す可能性が高く、本資料はSDZ3を上限とした時期に置くことができよう。ここでSDZ3の時期であるが、篠ノ井遺跡群聖川堤防地点の同一墓域内での前方後方形周溝墓の変遷において、突出部（前方部）が完成した姿として捉えられ、前方後方形周溝墓中、最も新しいと考えられる。そして先行するSDZ9出土土器群との間には大きな隔たりが感じられ、森將軍塚古墳において導入された埴輪の影響が周溝墓など低墳丘墓への供献土器群にも明確に現れた段階と考えられる。本資料の系譜を直接、篠ノ井遺跡群SDZ3出土壺に求めるものではないが、墳墓出土壺の類例が少ない現在、最も類似した資料として篠ノ井遺跡群SDZ3資料をあげ、それに後続する時期に位置づけておきたい。

一方、東日本を主体的に扱った塩谷修による壺形埴輪の型式分類（塩谷1993）に従うと、本資料は口頸部Ⅲ・口唇部Ⅷに該当する。ただし、口頸部Ⅲ類とはいえ、擬口縁状に作り出した後に貼り付けによって成形していることから、Ⅳ類との相関関係が認められる。また、口唇部Ⅷ類としたが、口唇端部の平面は斜め上方に向かって収められており、口類との関連性が考えられるなど、分類上の典型には該当しない。口頸部Ⅳ類の出現はⅠ～Ⅲ類に遅れるものと考えられており、長胴化が始まった胴部と組み合わせになることが多い。Ⅳ類の要素を合わせて持つと判断される本資料は前述の位置づけとも齟齬をきたさず、古墳時代前期後半代と認識することが最も妥当と判断される。古墳時代前期後半の壺形埴輪の類例は善光寺平において稀少であり、本資料は空白時期を埋める貴重な資料と評価されよう。

さて、次に問題となるのが本墳出土と判断される土器群との相伴関係であるが、出土土器群はSZ1との切り合い関係等より古墳時代前期後半とみられ、同一時期の所産である可能性が高い。出土器種には壺・甕・鉢（31頁第34図）があるが、高杯や小型丸底土器（埴）等が器種構成から欠けており、調査範囲からも土器群の全貌が把握されたとはいえがたい。壺は頸部が直立するものと頸基部より外反する二者が相伴している。二重口縁部も垂下する形態と屈曲する形態の二者があり、段部内面が明確でないものも存在する（第34図3）。また、甕の外表面調整も底部付近にハケ調整が認められ、伝統的なミガキ調整が行われていない等、篠ノ井遺跡群体育館地点の様相（青木1990）に近い。なお、壺形土器のうち、第34図2は、壺形埴輪と形態的に極めてよく似ており、同一時期の所産であることの傍証とできようか。

以上の所見に基づき、壺形埴輪は土器群とともにSZ2に伴った可能性が高いと考えられる。ただし、夥しい縄文土器とともに出土し、また体部片を含む別部位の破片が出土しないという状況は外部からの流入を示唆するとともに、にわかには決着が付けがたい。ここでは土器群との時期的一致を積極的に評価し、SZ2に壺形埴輪が樹立されたものと捉えておきたい。

引用文献 青木 和明 1990 『篠ノ井遺跡群Ⅲ』（長野市の埋蔵文化財第37集）長野市教育委員会

青木和明ほか 1992 『篠ノ井遺跡群(4)』（長野市の埋蔵文化財第46集）長野市教育委員会

塩谷 修 1993 「壺形埴輪の性格」『博古研究』第3号 博古研究会

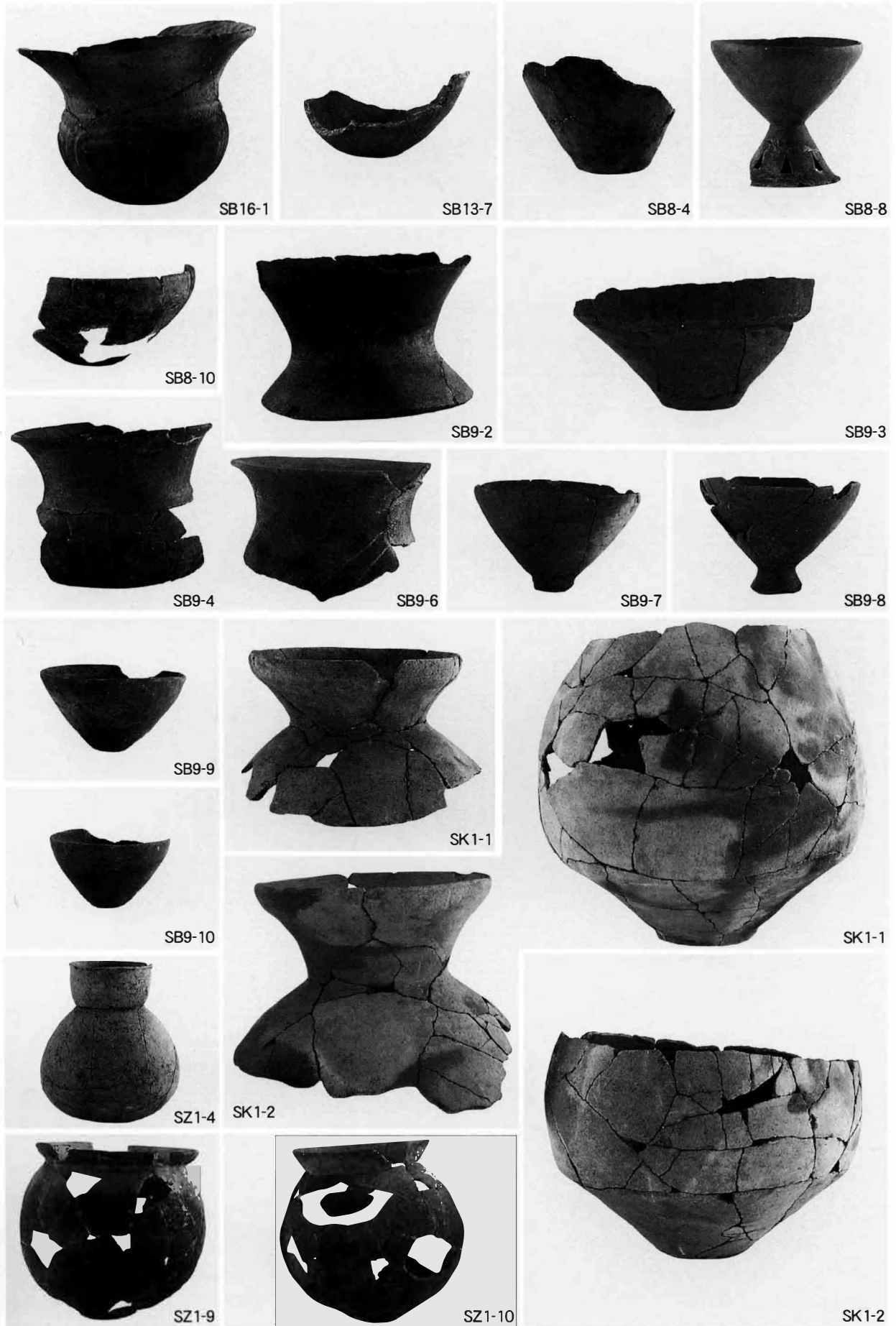


重機稼動状況

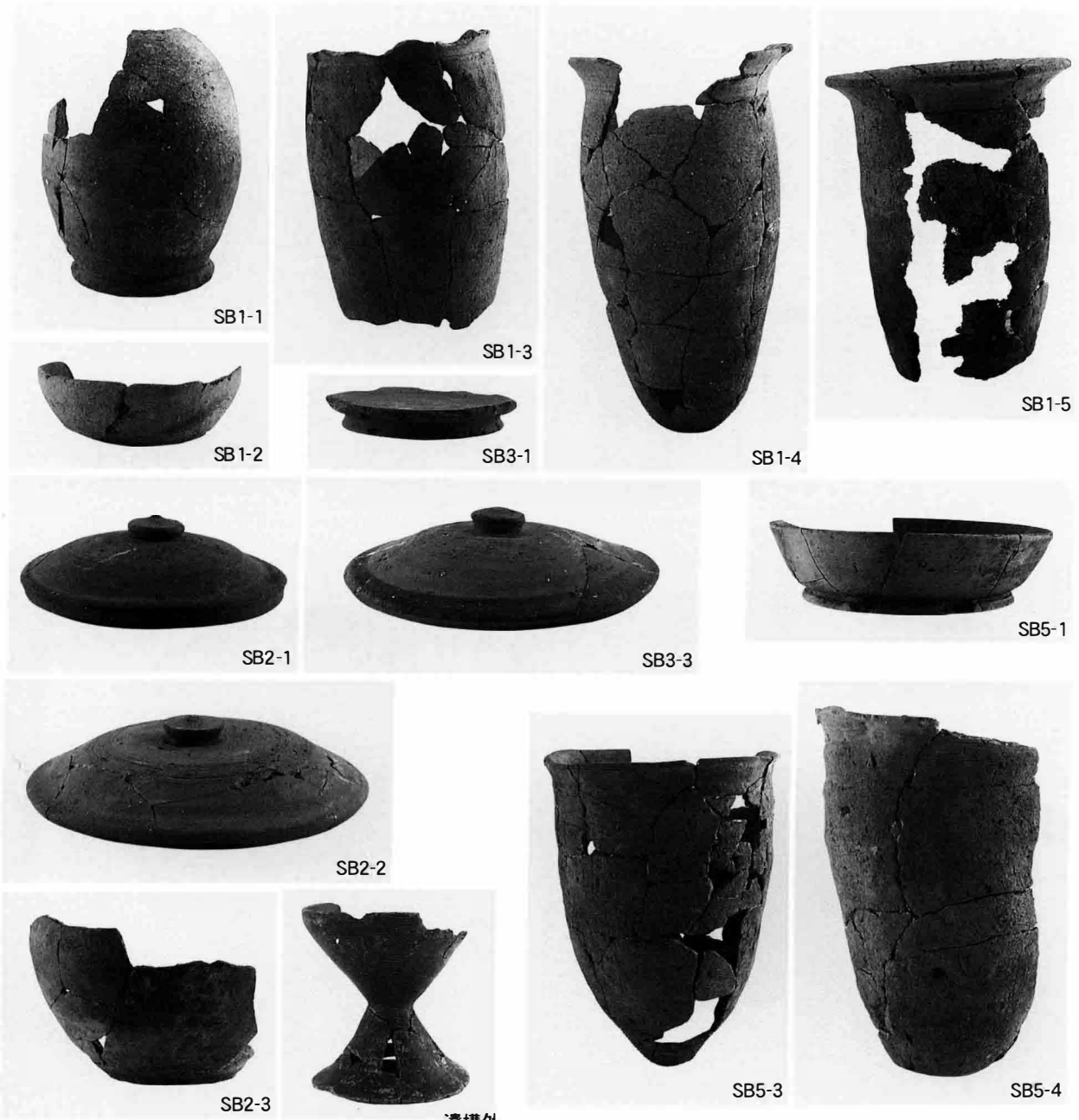


調査風景

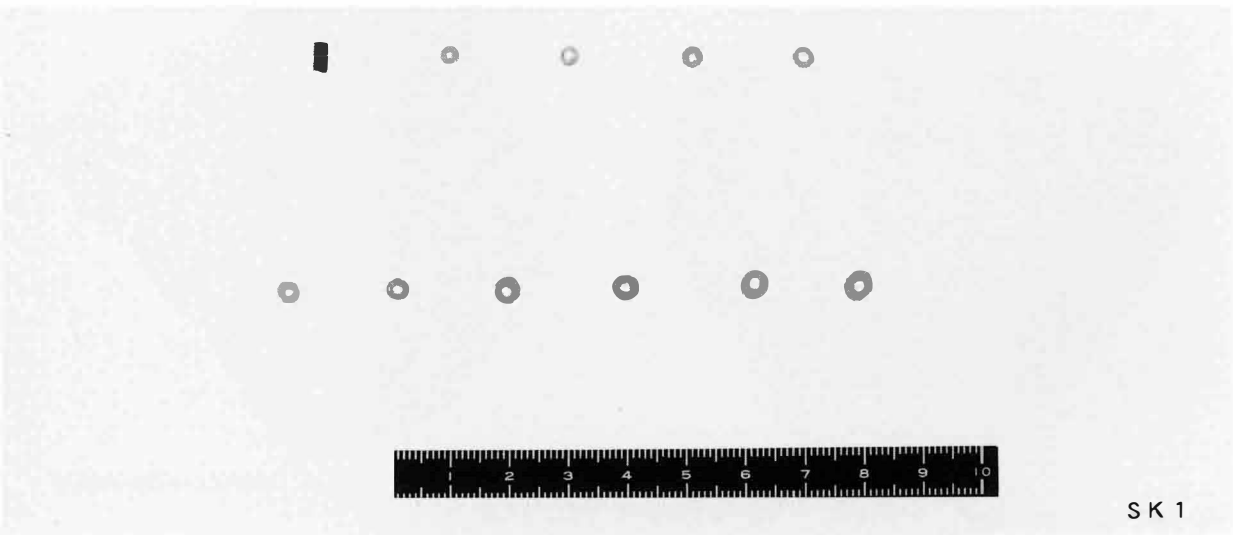




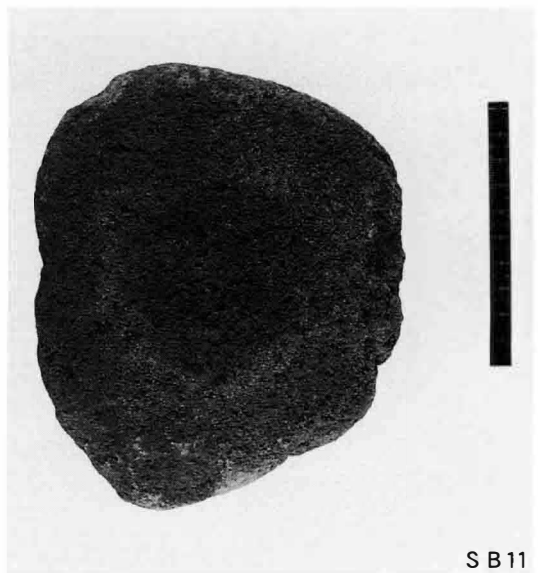
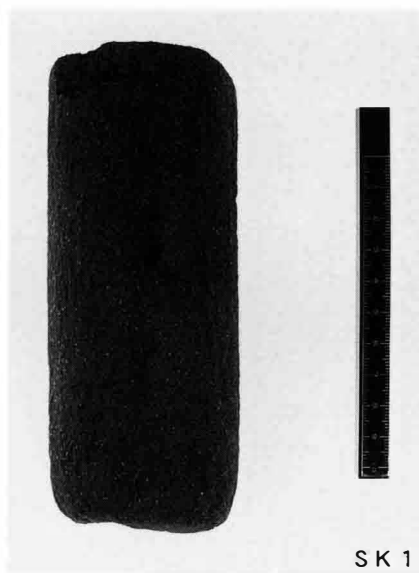
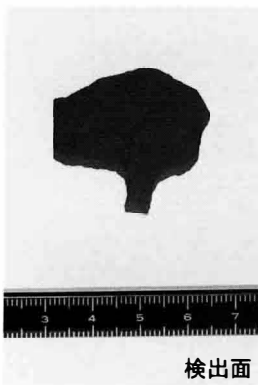
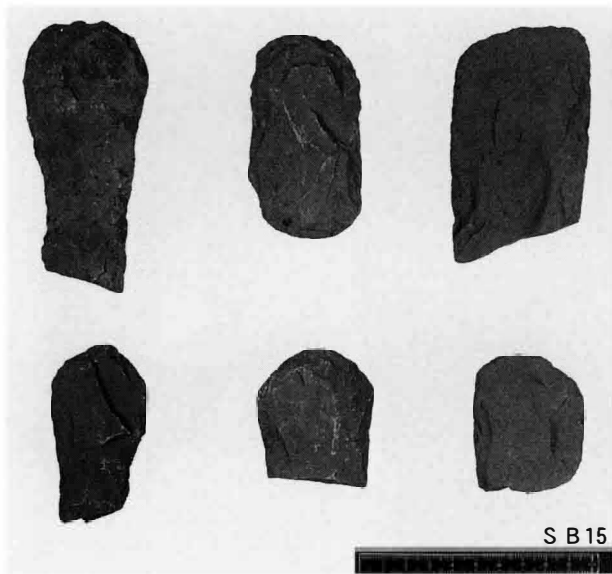




遺構外



SK 1



浅川扇状地遺跡群

MIWA SITE 6th

# 三輪遺跡(6)

長野市三輪保育園改築事業にともなう

埋蔵文化財発掘調査報告書

# 第1章 調査経過

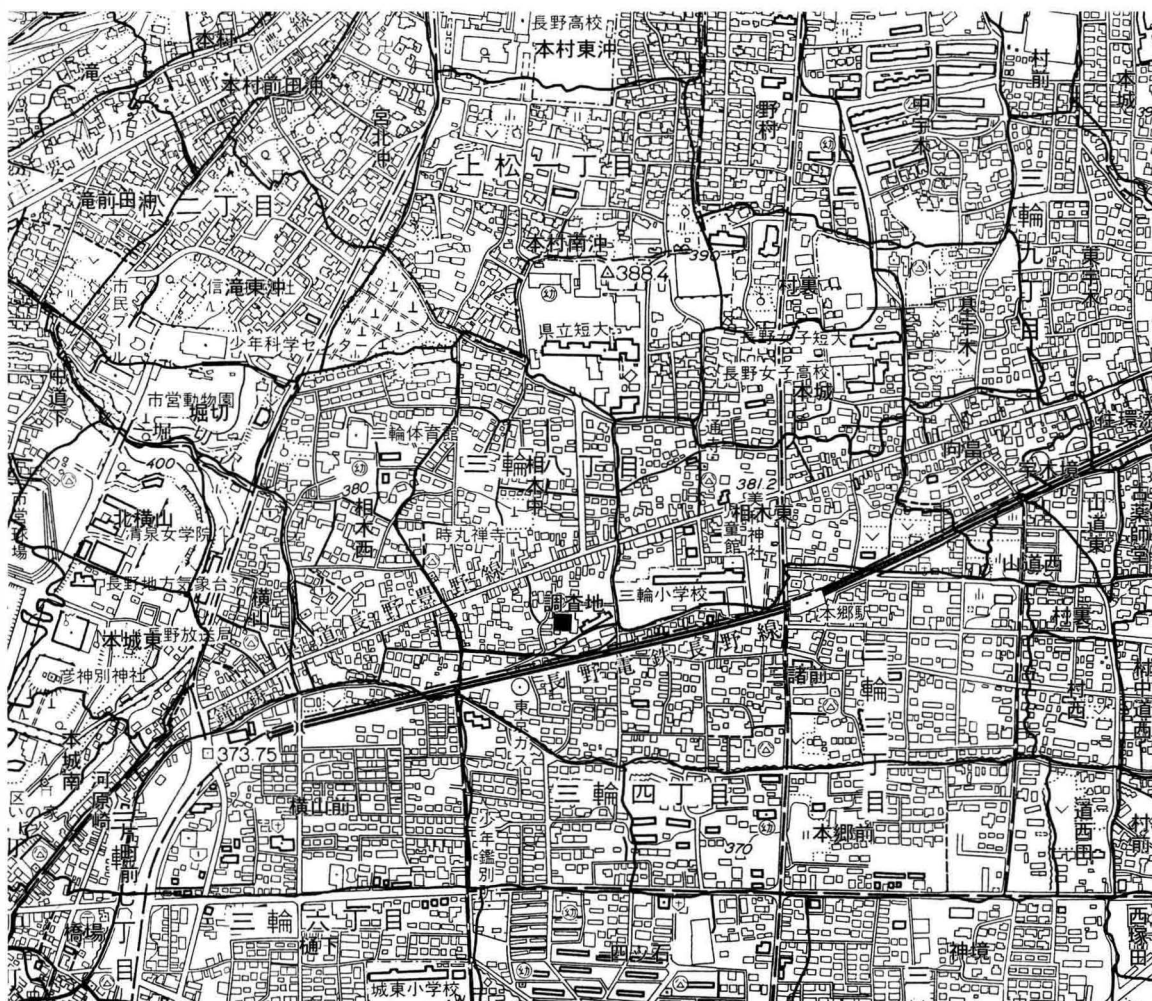
## 第1節 調査に至る経過

長野市街地に所在する三輪地籍は、古くから宅地化が進み世帯数も多い。昭和43年長野市は、三輪地区の人口増加に伴い園児数も上昇したことから、市立三輪小学校西の隣接する位置に三輪保育園を建設した。しかしながら近年老朽化が著しく進み、長野市（担当 福祉部 児童福祉課）は園舎の改築計画を打ち出した。

事業予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「浅川扇状地遺跡群」の範囲内にあり、これまで周辺では『三輪遺跡』として各所において発掘調査が実施されていることから、おそらく事業予定地においても遺跡の存在は確実と見られていた。そこで当教育委員会は児童福祉課と埋蔵文化財保護に関する協議を行い、平成7年7月に確認調査を行ったところ北側の部分で地表下20cm、南側の部分で地表下100cmに遺物包含層を確認した。

調査地の地形は表面上、宅地化による盛り土あるいは園舎取り壊しの際の造成により一見平坦に見えるものの実際は南へ大きく傾斜する扇状地特有の地形をなしており、北側の部分については旧園舎の基礎が深部にまで達し、そのほとんどが破壊を受けているものであった。これによって事業対象面積600㎡の内、破壊を免れた460㎡について発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成7年8月24日に開始し、9月14日までの実質13日間である。



第1図 周辺字図 (S=1/10,000)

## 第2節 調査日誌抄

[平成7年]

8月28日(月曜日)	晴	れ	バックホーによる表土剥ぎ開始。
8月29日(火曜日)	晴	れ	前日に引き続き表土剥ぎを継続。発掘器材搬入、午後より遺構の検出作業を開始する。
8月30日(水曜日)	晴	れ	表土剥ぎを終了する。北側に大きな攪乱が存在し、その部分の調査を断念する。遺構検出作業、SB1～4、SK1掘り下げ。
8月31日(木曜日)	雨		雨天のため作業中止。
9月1日(金曜日)	曇りのち雨		作業を開始したが、降雨が激しくなり作業を中止する。
9月4日(月曜日)	晴	れ	先週末の大雨により多量の土砂が調査区域内に流れ込み、その除去に苦慮する。南側の低い部分は水没しており、その排水作業を行う。SB2～4掘り下げ。
9月5日(火曜日)	晴	れ	SB2・4掘り下げ。SB3完掘、写真撮影。
9月6日(水曜日)	曇	り	SB2・4・5・SD1掘り下げ。SB1・2・4完掘、写真撮影。SB2カマド断ち割り。
9月7日(木曜日)	曇	り	SB5・SD1掘り下げ。
9月8日(金曜日)	曇のち晴れ		SB5・SD1・SK2・3掘り下げ。
9月11日(月曜日)	雨のち曇り		作業を開始するものの、降雨が激しくなり以後の作業中止。
9月12日(火曜日)	晴	れ	SB5・6・SD1掘り下げ。
9月13日(水曜日)	晴	れ	SB5・6・SD1掘り下げ。SB5・6写真撮影。コーディックシステムによる遺構測量。
9月14日(木曜日)	雨のち曇り		結線。発掘器材撤収。本日をもって現場における作業を終了する。



表土剥ぎ



作業風景



遺構測量風景

### 第3節 調査の体制

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	滝澤 忠男
調査機関	長野市埋蔵文化財センター	所長	丸田 修三
		所長補佐	小林 重夫
		所長補佐	矢口 忠良
		庶務係	
		(係長)	小林 重夫)
		職員	青木 厚子
		調査係	
		(係長)	矢口 忠良)
		主査	青木 和明
		主事	千野 浩
		主事	飯島 哲也
		主事	風間 栄一
		主事	小林 和子
		専門主事	清水 武
		専門員	中殿 章子
		専門員	山田 美弥子
		専門員	寺島 孝典 (調査主任)
		専門員	西澤 真弓
		専門員	小野 由美子
		専門員	永井 洋一 (平成7年度)
		専門員	堀内 健次 (平成7年度～)
		専門員	藤田 隆之 (平成7年度～)
調査員	青木善子・矢口栄子・勝田智紀		
調査参加者	金子ゆき・北原京子・北村宣之・神頭幸雄・小林三郎・佐藤君江・佐藤ひで子・祖山和子・中澤秀子・中村恭子・成田孜子・成田とよみ・西尾千枝・宮島静美・美谷島昇・向山純子・吉沢トシ子		
整理参加者	相沢婦志子・池田見紀・岡沢治子・小泉ひろ美・関崎文子・多城恵子・田中はま江・田中むつ子・徳成奈於子・富田景子・西尾千枝・向山純子・武藤信子・村松正子		
測量委託	有限会社写真測図研究所		

調査を遂行していくうえにおいて、多くの方々より多大なるご支援ご助力をいただいている。重機の手配やトイレの設置など、様々な面でご協力を賜った滝澤建設株式会社の関係諸氏、また調査に参加していただいた発掘作業員の皆様には感謝申し上げます。



## 第II章 三輪遺跡周辺の環境

三輪遺跡は浅川扇状地遺跡群の西端中央部付近に位置している。浅川扇状地遺跡群の環境については『吉田四ツ屋遺跡』の中で扱っているのでそれを参考にされたい。三輪遺跡の発掘調査はこれまでに5地点が実施され、その調査成果から必ずしも密度の高い埋蔵文化財の包蔵状況とはいえないものの、広範囲にわたって遺跡が分布している状況が看取できる。ここではこれまでの発掘調査などとともに三輪遺跡周辺の歴史環境を概観する。

### ① 三輪遺跡 —三輪小学校地点—

大正12年に建設された木造校舎は長い年月の間に老朽化が著しく進み、長期計画による校舎の改築計画が進められた。昭和46年の新校舎改築の際には記録保存を目的とした発掘調査などは実施されておらず詳細は不明であるが、その後昭和50・51・53年度の3次にわたって合計約2,200㎡の発掘調査が行われている。

1次調査では古墳時代後期の住居跡2軒と、時期の比定はできないものの溝跡が1本確認されている。古墳時代後期住居2軒の内1軒は一辺5m程の方形を呈するこの時期としては普遍的な住居であるが、もう1軒は1辺10m前後を測る大形の方形住居で、床面からは建築部材と思われる夥しい量の炭化材が検出され、出土遺物については内面が黒色処理された高杯や杯を中心に、甕・甔などが出土している。2次調査では古墳時代中期・平安時代の住居跡7軒、溝跡2本が検出され、古墳時代中期の住居跡からは古式須恵器が出土している。3次調査では弥生時代後期から古墳時代後期の住居跡7軒、土坑2基が検出されている。

参考文献 長野市教育委員会1980『三輪遺跡』長野市の埋蔵文化財第6集

### ② 三輪遺跡 —本郷住宅地地点—

昭和61年度に本郷住宅地造成事業に伴い調査された。発掘調査は道路部分の約450㎡について実施し、古墳時代後期から平安時代に至る住居跡6軒、溝跡4本、土坑1基を検出している。

参考文献 長野市教育委員会1987『三輪遺跡(2)』長野市の埋蔵文化財第20集

### ③ 三輪遺跡 —本郷団地地点—

平成2年度に約300㎡の発掘調査を実施している。調査では弥生時代後期の住居跡2軒、古墳時代中期の住居跡1軒、土坑1基、奈良・平安時代の住居跡3軒、中世の土坑5基がそれぞれ確認されている。

参考文献 長野市教育委員会1991『栗田城跡 下宇木遺跡 三輪遺跡(3)』長野市の埋蔵文化財第38集

### ④ 三輪遺跡 —長野県職員宿舎地点—

平成4年度長野県職員宿舎建設事業に伴い、本郷団地地点から道路をはさんだ西側の約900㎡について発掘調査を実施した。平安時代の住居跡2軒、溝跡7本、土坑4基、竪穴状遺構2基、柱穴列(掘立柱建物跡)1棟などが検出されている。また中世以降のものと思われる五輪塔を埋納した施設や溝跡3本も確認されている。

参考文献 長野市教育委員会1993『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(4)』長野市の埋蔵文化財第19集

### ⑤ 三輪遺跡 —(仮称)滝沢マンション地点—

平成5年度(仮称)滝沢マンション建設事業に伴い約280㎡の調査を行っている。調査では弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡1軒、溝跡1本、土坑2基、井戸跡1基が検出されている。

参考文献 長野市教育委員会1994『浅川扇状地遺跡群三輪遺跡(5) 小島柳原遺跡群上中島遺跡』長野市の埋蔵文化財第62集

## 1 旭幼稚園遺跡

旭幼稚園建設現場において発見された遺跡で昭和42年7月に調査が行われているが、調査を開始した時点では既に遺跡のほとんどが破壊を受けた状態で、西南の隅の一部を調査できたにすぎない。調査では住居跡と思われる落ち込み(掘り込み)が確認され、一部に床面らしき平坦な部分を検出している。今となつてはこの遺構が住

居跡であるか否かについて確かめる術はないものの、周辺に遺跡が存在する可能性のあることが明確となった。この落ち込みからは弥生時代中期後半の土器が多量に出土し、従来の認識からすると比較的新しい段階にあたる土器と把握され、松本市の百瀬遺跡から出土した土器と併行関係を持つ土器群と判断された。しかしながら、近年各地の調査成果あるいはその研究成果から再検討を要する時期であることがささやかれ、後期前半の「吉田式」との関係も踏まえ、今後明らかにしていかなければならない課題である。

参考文献 笹沢 浩 1971『善光寺平における弥生時代中期後半の土器』「信濃」第23巻第12号 信濃史学会

## 2 下宇木B地点遺跡

昭和43年、下水道工事中に発見され、長野吉田高等学校地歴班によって発掘調査された。幅2m程の狭い調査ではあったが、溝跡1本、土坑3基、土器集中区1か所などの遺構が検出されている。特に土器集中区からは大形の二重口縁壺や埴、小型丸底のほかに鉢や甕などが一括出土している。

参考文献 笹沢 浩1970『長野市下宇木遺跡B地点出土の土師器』「長野県考古学会誌8号」長野県考古学会

## 3 美和公園遺跡

昭和58年度に発掘調査された。調査では古墳時代中期の住居跡1軒と、直径約25cmを測る柱痕が残る柱穴が2基検出され大形の掘立柱建物跡を想定する。なお調査報告書は刊行されていない。

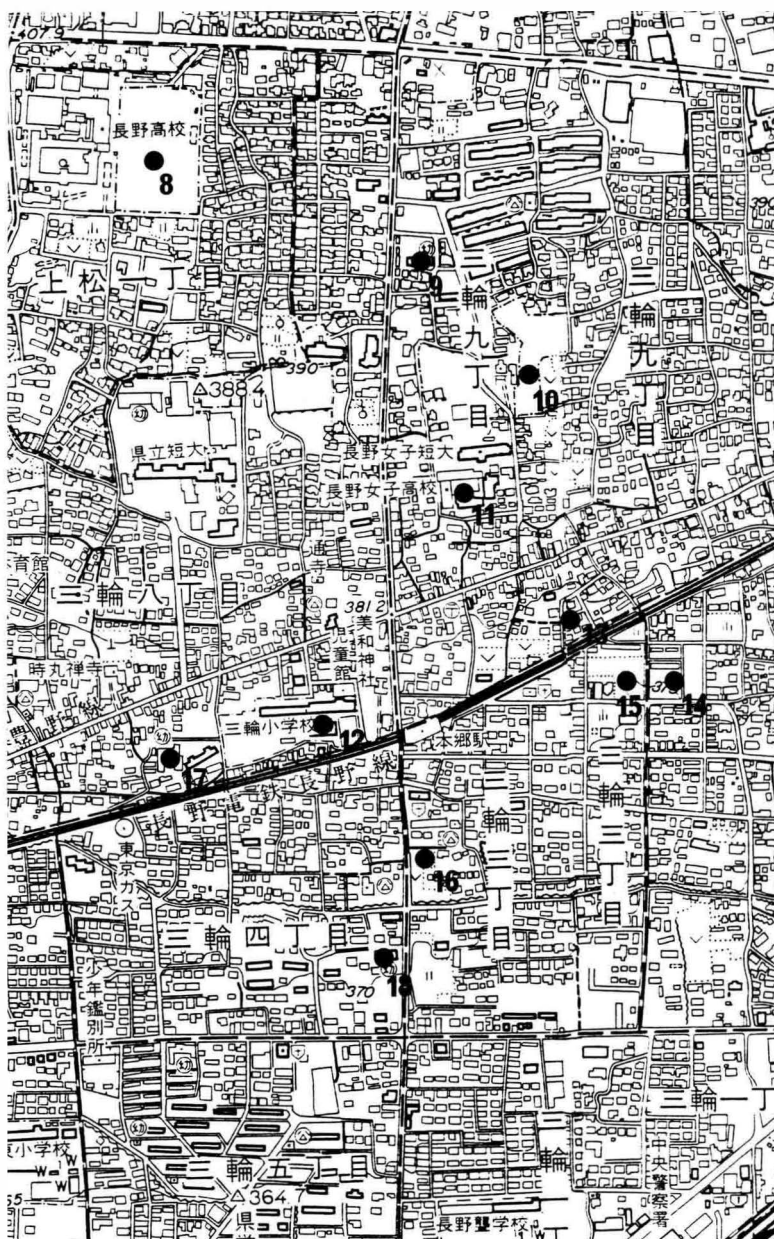
## 4 下宇木遺跡

うずら幼稚園プール造成事業及び、公営住宅建設事業・市道拡幅改良事業に伴い、平成2年度に調査された遺跡である。工事工程の都合から各調査区を5か所に分け発掘調査を実施している。調査では弥生時代後期の住居跡6軒、古墳時代中期から後期の住居跡10軒が確認されている。

参考文献 長野市教育委員会1991『栗田城跡 下宇木遺跡 三輪遺跡(3)』長野市の埋蔵文化財第38集

## 5 本村東沖遺跡

## 6 本村東沖遺跡Ⅱ



第2図 周辺遺跡分布図 (1:10,000)

# 第三章 調査成果

## 第1節 遺跡の概要

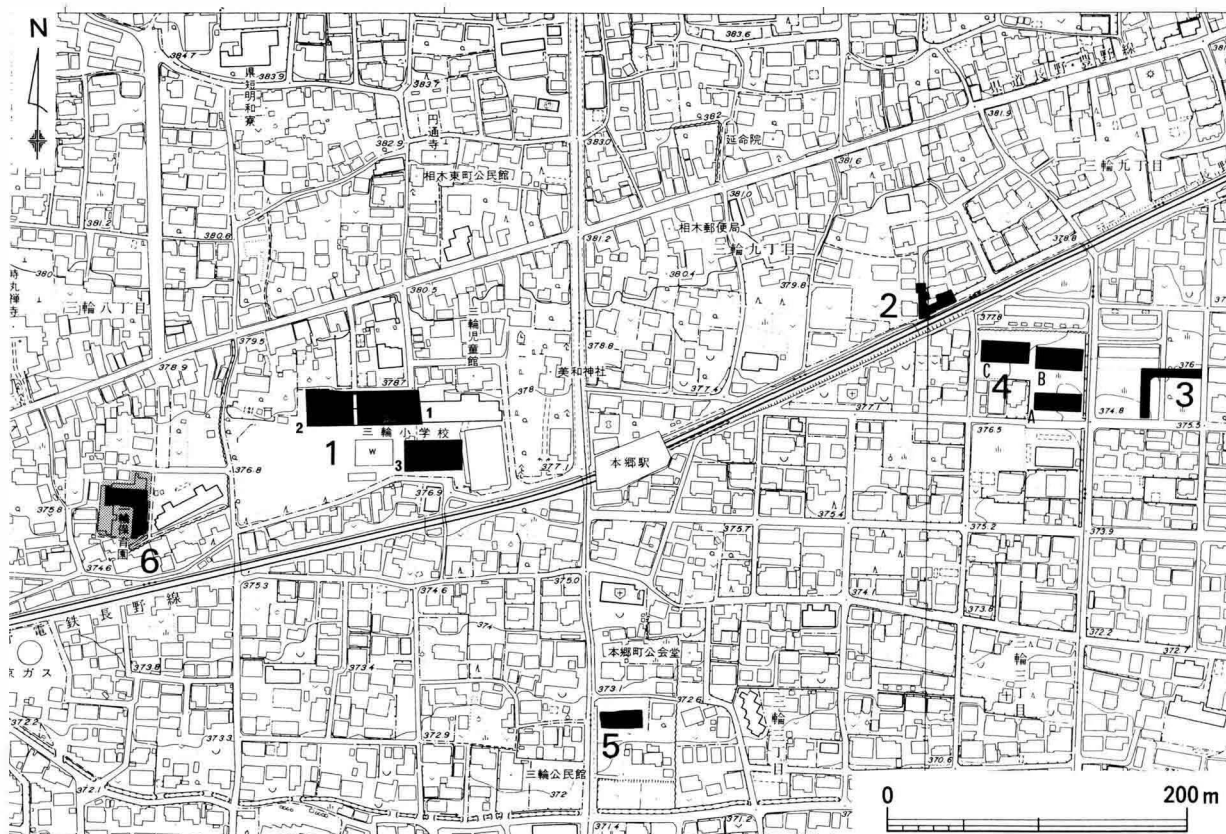
浅川扇状地遺跡群の扇端付近に位置する三輪遺跡の名称の発祥は地元の郷土史研究家、故霜田巖氏が相ノ木から本郷にかけて土器が分布するこの地域を『三輪遺跡』と提唱したことに始まる。

昭和42年12月、新都市建設のための埋蔵文化財緊急調査において実施された分布調査の際、長野電鉄の線路沿いに広範囲にわたって平安時代に比定される土器がわずかながら表面採取され、三輪遺跡の東西方向の遺跡分布状況は概ね把握されたが南北方向への広がりには現在に至っても未確認である。

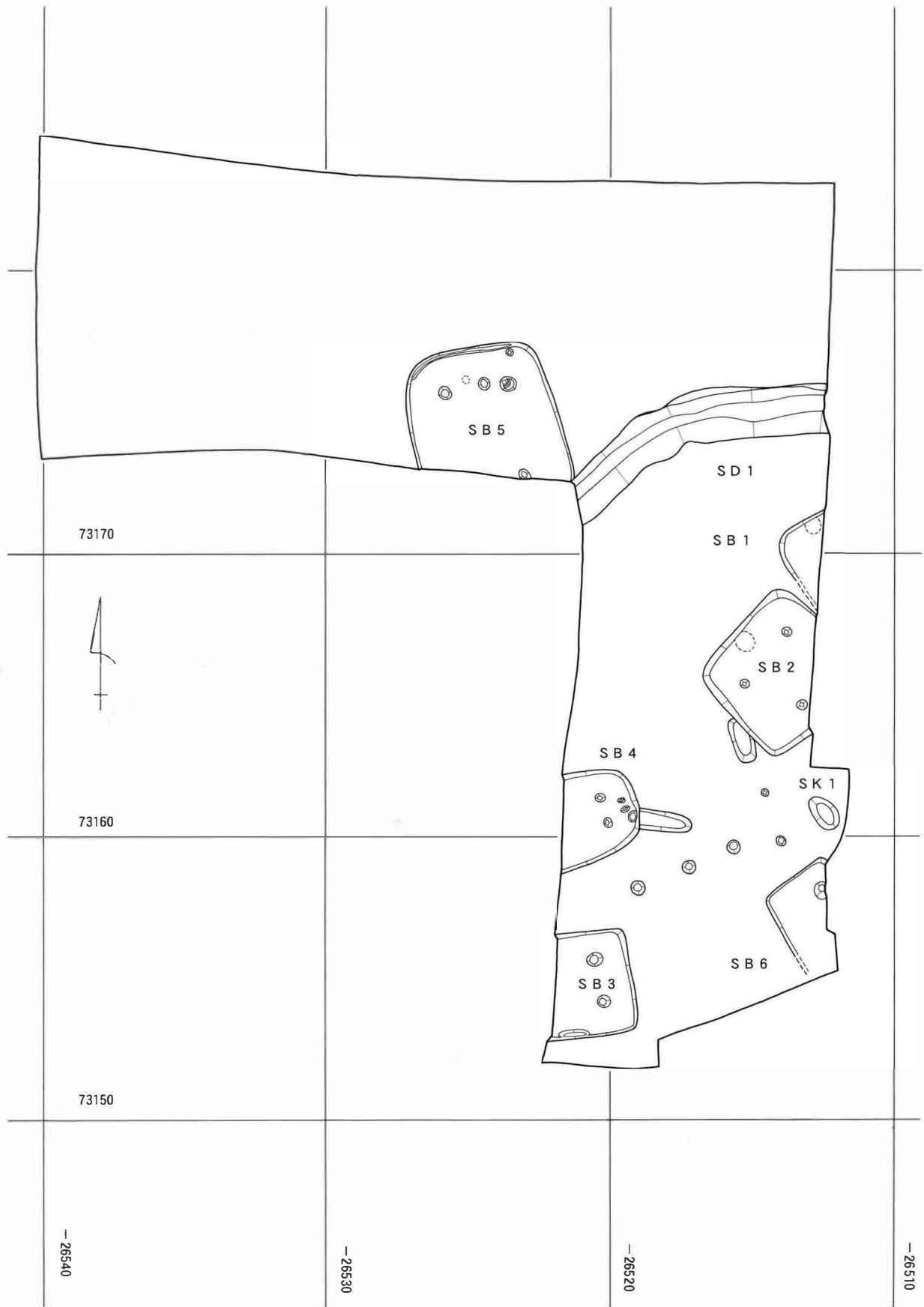
これまで『三輪遺跡』という遺跡名を用いて発掘調査された遺跡は5地点を数える。本書所収『吉田四ツ屋遺跡』の「第Ⅱ章 浅川扇状地遺跡群の環境」の中でも触れているが、現在のところ浅川扇状地遺跡群内においてある一定の分布状況を示すと考えられる各遺跡の範囲を把握できる明確な根拠を持ち合わせておらず、各々の遺跡範囲を確定することは将来的な課題ともいえる。特に三輪遺跡は、弥生時代から平安時代あるいは中世といった各時代の遺跡が集中する地域であるため、各地で順次発掘調査が実施されている。

今回の調査は範囲が限られているためほとんどの遺構において全体を確認することはできなかったが、弥生時代中期後半土坑1基、弥生時代後期住居跡2軒、古墳時代前期住居跡1軒、古墳時代後期住居跡1軒、奈良時代は住居跡2軒と溝跡1本が検出されている。このほか遺物の出土しなかった遺構もあることから実数はこれを上回るものと予想される。

参考文献 霜田 巖1968「新都市建設の為の埋蔵文化財緊急調査報告（長野市）」『長野』12号 長野郷土史研究会



第3図 調査位置図



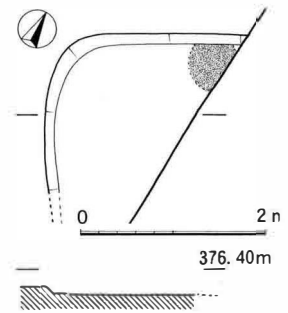
第4図 全体図 (1:200)

## 第2節 遺構と遺物

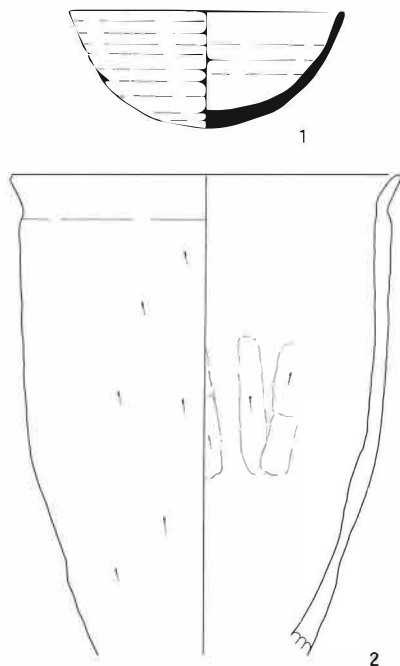
### S B 1

S B 2と重複関係にあり住居のほとんどは調査区域外にあり調査できず、また南側はS B 2により破壊されているため調査では住居の隅一部を確認できたにすぎない。調査区壁際の床にはカマドに伴うと思われる焼土が検出され、周辺より遺物が出土している。床面は明瞭に検出されたが比較的軟弱で、範囲内において柱穴などの施設は確認されていない。出土遺物の様相から奈良時代の住居跡と思われる。

出土土器〔第6図〕には須恵器杯(1)と土師器甕(2)がある。杯の底部は丸みを持つ。口縁部は面取りされ、器面はロクロナデによる凹凸が著しい。



第5図 S B 1



第6図 S B 1出土土器

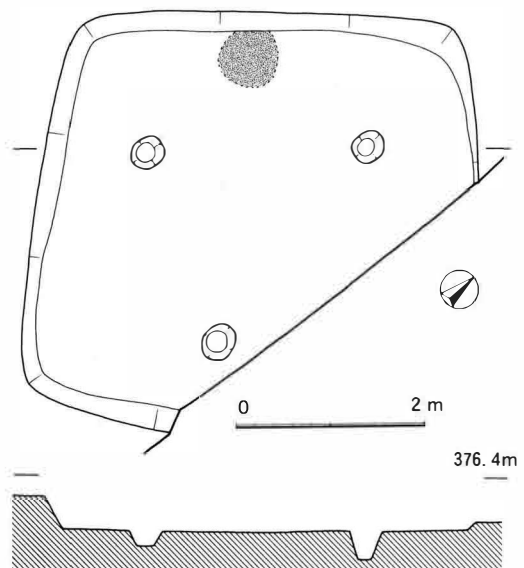


S B 1

### S B 2

東側が調査区域外にあり全体を調査することはできなかったが、一辺4.50mの方形を呈する住居跡である。北壁の中央床面には焼土が検出され、ここにカマドがあると判断される。しかしほとんどが住居廃絶後に破壊を受けており、カマドの構造などは不明である。柱穴は3本検出されたが、不規則な平面形を呈する。床面はカマド付近および住居中央で堅緻な床となるが、そのほかの部分については軟弱である。

出土土器〔第8図〕には土師器の杯(1~4)、器台(5)、甕(6~8)、甑(9)がある。杯はすべて内外面ともヘラミガキされ、4は内面が黒色処理される。7は外面にヘラケズリ、内面はナデを施す長胴形の甕、9は内外面ともヘラミガキを施し、底はない。この甑と甕はカマド付近で重なって出土した。



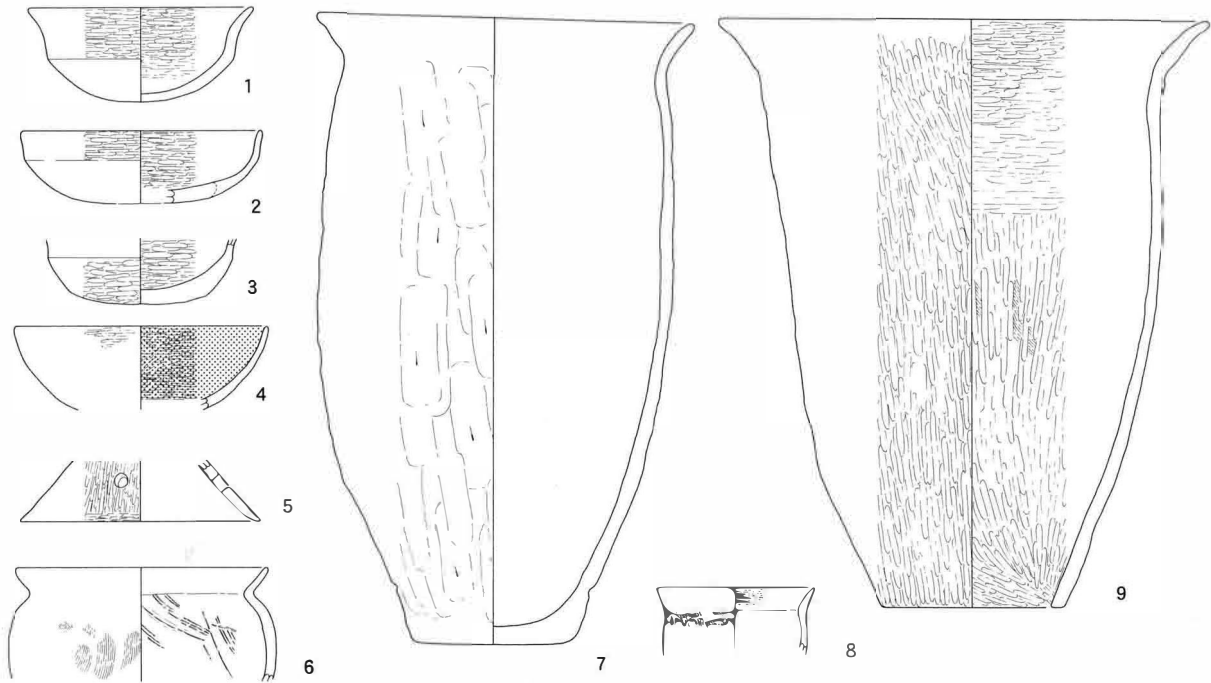
第7図 S B 2



土器出土状況



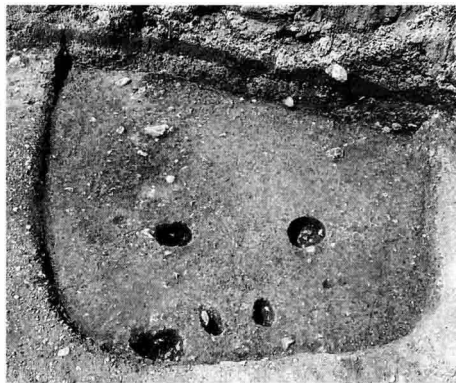
S B 2



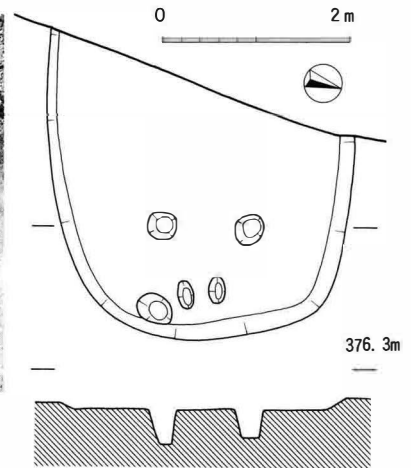
第8図 S B 2 出土土器

S B 3

西側半分程が調査区域外にあり全体を検出することはできなかったが、南北方向3.30mを測る隅丸長方形を呈し、その様相から弥生時代後期の住居跡であると想定される。柱穴は2本検出され、東壁際には出入口と思われる楕円形の掘り込みが2つあり、弥生時代後期に特徴的な様相を示す。床面は全体に軟弱ではあるものの、明瞭に確認できた。土器はみな小破片であるため図化することはできなかった。



S B 3

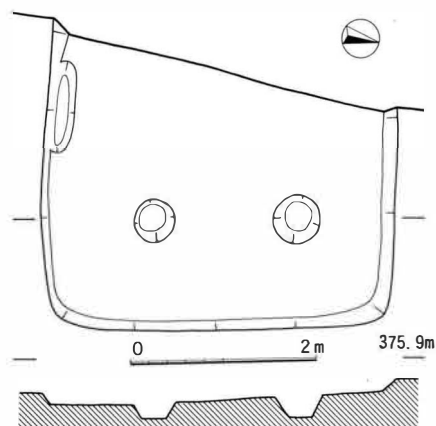


第9図 S B 3

S B 4

調査区のもっとも南側で検出された遺構で、他遺構との重複関係はない。西側1/3程が調査区域外にあり形態や規模等は判然としないが、南北方向3.80mの方形を呈する住居を想定する。床面は軟弱で堅緻な部分は観察されないものの比較的明瞭に確認でき、柱穴2本が検出された。南壁際には短い壁溝が1箇所のみ掘り込まれそのほかでは確認されていない。覆土内上層からは土器が並んで出土し、土器の様相から古墳時代前期の住居跡であると思われる。

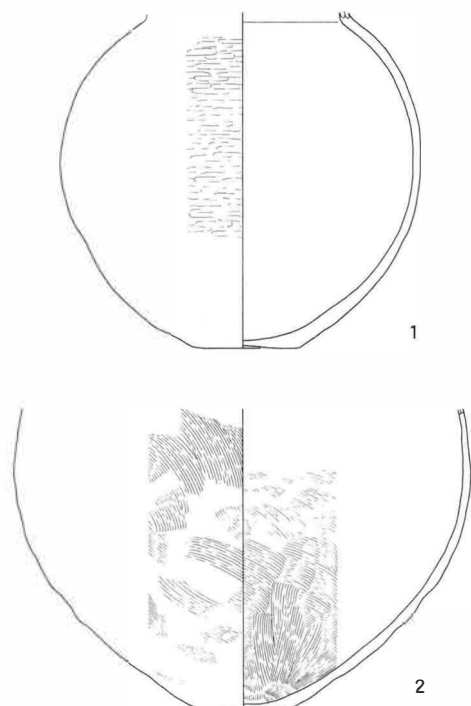
出土土器〔第11図〕には壺(1)と甕(2)がある。2つとも上部を欠損しているため、全体の様子はわからない。1は外面に横方向のヘラミガキ、内面はナデにより整形される。頸部に立ち上がりが認められるため、おそらく二重の口縁部がつけられる壺となるであろう。2は内外面ともハケにより調整される甕で、底部は小さく胴部は球状に大きく張り出す器形となり、その様相から北陸系統の甕を想定する。そのほかにも弥生時代中期や後期、平安時代の土器片が混入しているが、図化はしえなかった。



第10図 SB 4



S B 4



第11図 SB 4出土土器



土器出土状況

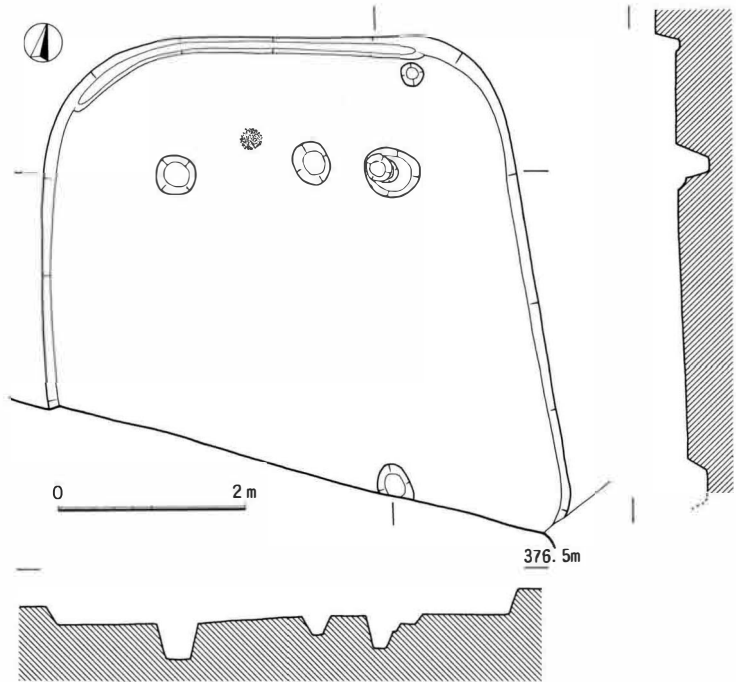
S B 5

くの字を呈する調査区の中央付近で検出され、SD 7と重複関係にある。南側は調査区域外により調査することはできなかったが、東西方向5.30mを測る隅丸長方形住居である。主柱穴は3本検出され平面形は長方形を呈し、そのほか2本の柱穴が確認されている。北壁際には壁溝が検出され、北側主柱穴間西寄りに小さな地床炉がある。床面は主柱穴範囲において非常に堅緻であるが、ところどころ被熱による変質が見られ、少量ではあるが炭化材も出土していることから、焼失住居の可能性も考えられよう。

土器はそのほとんどが床面から一括して出土しているが、従来の認識からすれば壺は弥生時代後期初頭の「吉田式」、甕は弥生時代中期終末の「栗林式」と差異が生じている。ここでは将来的な知見も含め弥生時代後期初頭の住居と考えたい。

出土土器〔第13図〕には壺（1～5）、甕（6・7）、甑（8）、高杯（9・10）、鉢（11）、蓋（12）がある。1は頸部に7～8本の櫛描直線文を施したのち、2本櫛2条による区画を4か所に配すT字文となる。外面と内面口縁部は赤彩が施され、内面胴部はハケ調整である。2は胴部みの破片である。器面全体が荒れ細部が不明であるが、頸部から胴部最大径まで赤彩が施されており、内面はおそらくハケ調整されるであろう。3は外面全体にハケ調整され、4・5は赤彩される。6は頸部に簾状文、胴上半部には4段の波状文、胴下半部には羽状文を施文し、口縁部には強く強い横ナデがされ端部に縄文は施されない。

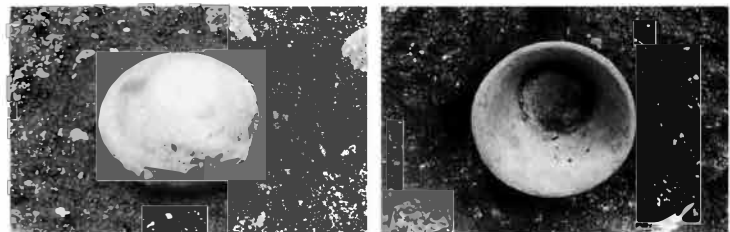
内面はハケ調整ののち軽いヘラミガキを施しているが、器面は非常に荒れている。7の頸部には波状文を施文し、胴部にはかなり粗雑な羽状文を施文している。内外面の調整は器面が荒れているため不明であるが、口縁部は横ナデを施す。11は胴部に注口の付けられた鉢で、口縁端部は面取りされその部分より外面は文様部分をのぞき赤彩がされる。胴部の文様は沈線文による鋸歯文となる。9・10は高杯の脚部と思われ、10は2ヶー対の穿孔が見られる。杯部の形態は不明である。



第12図 S B 5



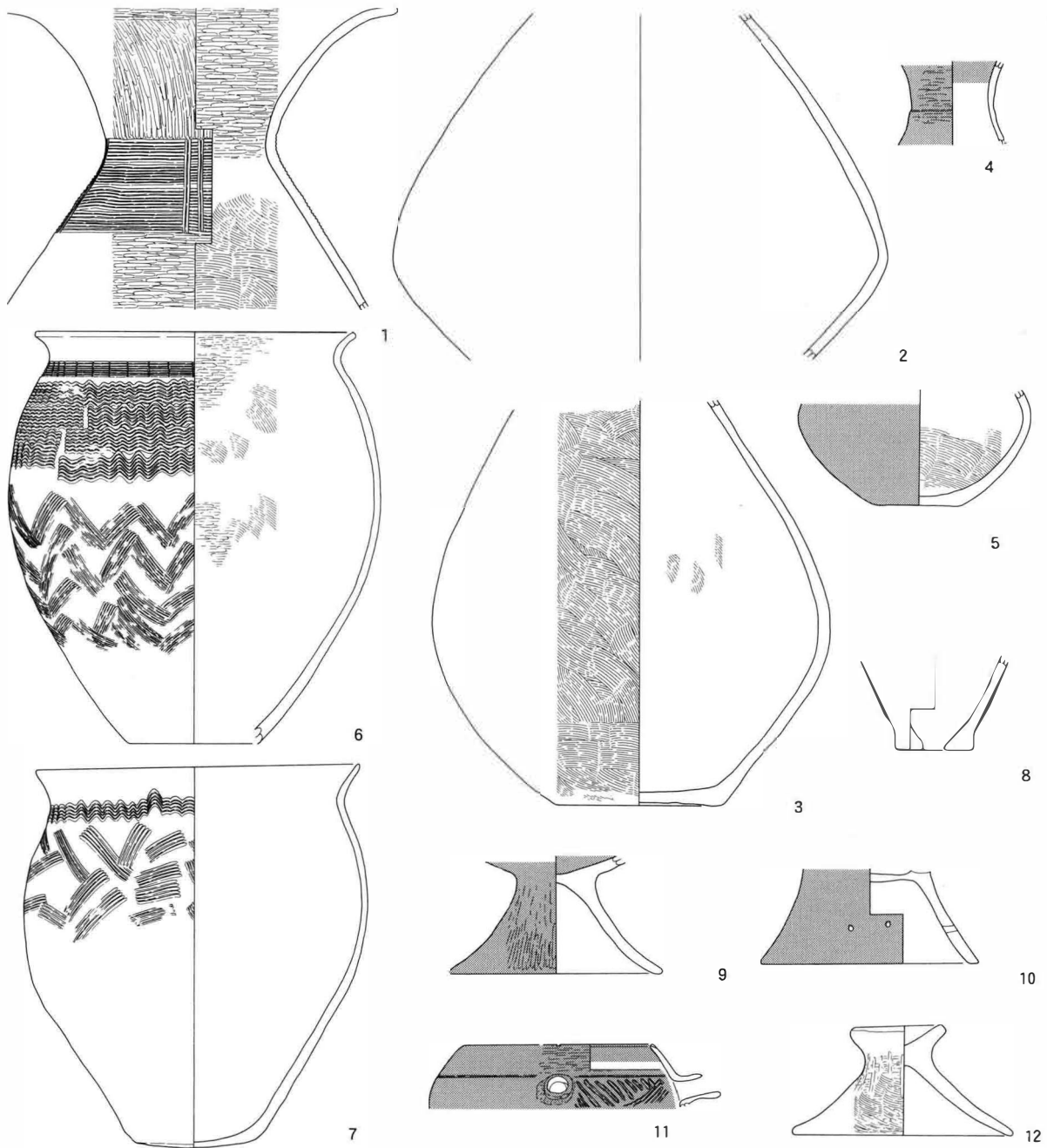
S B 5



土器出土状況

土器出土状況

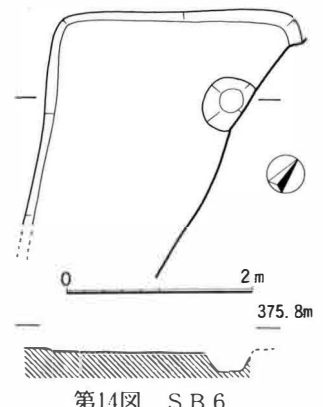




第13図 SB 5出土土器

SB 6

調査区の南側で検出され、他遺構との重複はないが遺構検出作業の際に床面らしき遺構を確認したため、住居跡があるものと想定して調査を進めた。東側は調査区域外のため全体を調査することはできなかったが、検出面より僅かな掘り込みが確認され、比較的小型の住居跡であると思われる。中央付近にやや堅緻な床が認められるほかは軟弱で、調査区壁際には柱穴と思われる掘り込みも見られるが、範囲内においてカマドは検出されなかった。検出面から床面までが非常に浅かったため出土土器は少なく、甕の胴部破片が出土しているのみである。小破片なため図化できなかったが、その様相から奈良時代の住居跡と考えられる。



第14図 SB 6

### SK 1

SB 2とSB 6の間に検出された楕円形を呈する土坑で、検出面からの深さは約30cmを測る。底面はかなりの凹凸をもち、掘り込みもやや不鮮明であった。土器は弥生時代中期後半の壺あるいは甕の破片が出土している。すべて小さな破片のため図化することはできなかった。

### SK 2

SB 2に付属するように検出された遺構で、長楕円形を呈する。検出面よりの深さは20cmを測りながら、遺物の出土は僅かで、時期の断定できるものはない。

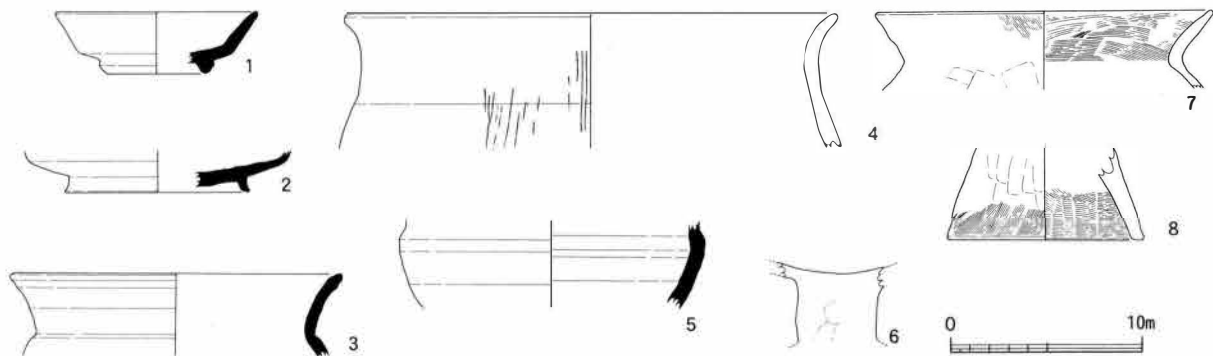
### SK 3

SB 3の東側に伸びる遺構でSK 2同様長楕円形を呈する土坑と思われるが、半分程をSB 3に破壊され全体的様子は判然とせず、溝状遺構となる可能性もあろう。遺構の深さは検出面より10cmに満たない非常に浅いもので、遺物の出土も少なく構築された時期は不明である。

### SD 1

調査区の中央付近にやや弧を描きながら検出された幅2m前後、深さは深いところで70cmを測る溝状遺構で、SB 5と重複関係にある奈良時代の溝と考えられる。

出土土器〔第15図〕には奈良時代に比定されるであろう須恵器の杯（1・2）と甕（3）、土師器甕（4）、須恵器壺？（5）、土師器盤（6）のほか、古墳時代前期の甕（7・8）も出土している。



第15図 SD 1出土土器



遺構分布状況（北より）



遺構分布状況（南より）



S B 1

1



S B 2

1



S B 4

1



S B 2

7



S B 2

9



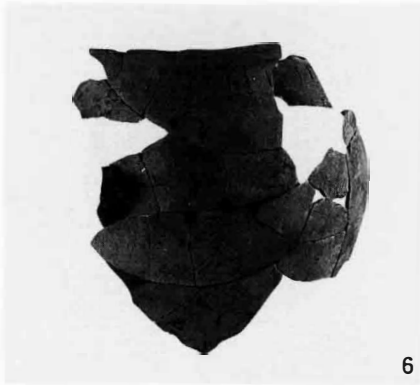
S B 4

2



S B 5

1



S B 5

6



S B 5

5



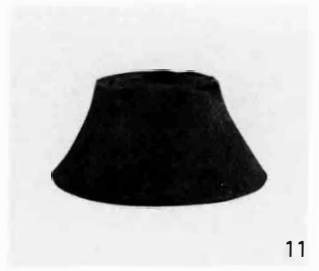
S B 5

3



S B 5

7



S B 5

11



S B 5

12

NATSUMEGAWARA SITE

# 棗河原遺跡

日本石油長野印インターSS建設事業にともなう

埋蔵文化財発掘調査報告書

# 第1章 調査経過

## 第1節 調査に至る経過

平成5年3月に開通した上信越自動車道の長野ICは長野市の南東部に位置している。ICの供用開始は周辺の開発に拍車をかけ、既設道路の拡幅や新規道路の建設が至るところで活発に行われている。

このような情勢の中、日本石油株式会社東京地方支店は現在拡幅が実施されている主要地方道長野真田線沿いにガソリンスタンドの建設事業計画を打ち出した。当該地周辺では以前、主要地方道長野真田線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（平成4・5年度）が実施されており、調査では奈良時代から平安時代にかけての比較的大規模な集落跡が確認されているため、今回の事業予定地においても遺跡の存在が濃厚であった。そこで長野市教育委員会は、事業主体者の日本石油株式会社東京地方支店及び、地元工事請負業者である北野建設株式会社と埋蔵文化財保護に関する協議を行った結果、地下3m程を掘削するタンクの埋設部分についてのみ発掘調査を実施し、これにより最大260㎡の記録保存を目的とした発掘調査が必要とされ、これに基づき長野市長塚田佐と日本石油株式会社東京地方支店取締役支店長中原博との間で発掘調査委託契約を締結した。しかしながら、設計変更により保護対象面積が140㎡に減少され、変更委託契約を改めて締結した。

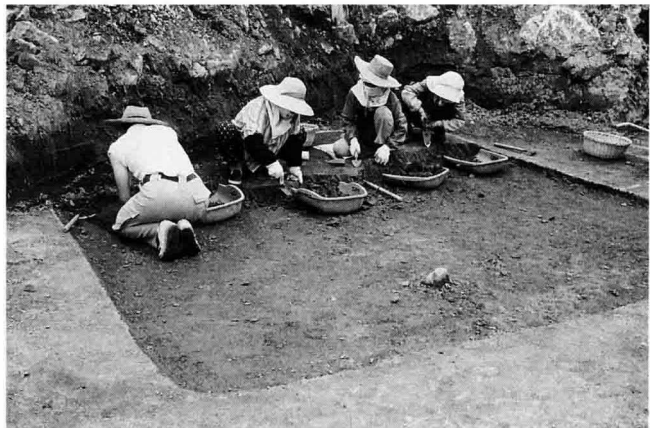
なお発掘調査を実施するにあたり当初遺跡名を「棗川原遺跡」として調査を進め、また当センター発行の「所報」にも同名により調査概要を記載しているが、報告書作成にあたり古字図や文献等を確認した結果「棗河原」と記載されており、本報告を契機に遺跡名を『棗河原遺跡』と変更して報告するものとする。

発掘調査は平成7年6月15日より7月4日までの実質13日間である。

## 第2節 調査日誌抄

[平成7年]

6月15日(木曜日)	曇りのち雨	バックホーによる表土剥ぎ。
6月16日(金曜日)	晴	れ 表土剥ぎを継続。
6月19日(月曜日)	晴	れ プレハブハウス搬入、表土剥ぎ終了。
6月20日(火曜日)	曇	り 発掘用機材搬入。検出開始。
6月21日(水曜日)	晴	れ SB1、SK1～3掘り下げ。
6月22日(木曜日)	晴れのち曇り	SB1・2掘り下げ。
6月23日(金曜日)	曇	り SB1掘り下げ、SB2写真撮影。
6月27日(火曜日)	曇	り SB1・3掘り下げ、1回目のコーディックシステムによる遺構測量。
6月28日(水曜日)	晴	れ 結線。SB1写真撮影 SB2カマド付近の掘り下げと写真撮影。
6月29日(木曜日)	晴	れ SB3掘り下げ。
6月30日(金曜日)	晴	れ SB3掘り下げ・写真撮影。機材撤収。
7月3日(月曜日)	雨	2回目のコーディックシステムによる遺構測量。
7月4日(火曜日)	晴	れ 結線。本日をもって、現場における作業をすべて終了する。



6月27日

### 第3節 調査の体制

調査主体者 長野市教育委員会

教育長 滝澤 忠 男

調査機関 長野市埋蔵文化財センター

所 長 丸 田 修 三

所長補佐 小 林 重 夫

所長補佐 矢 口 忠 良

#### 庶務係

(係 長 小 林 重 夫 )

職 員 青 木 厚 子

#### 調査係

(係 長 矢 口 忠 良 )

主 査 青 木 和 明

主 事 千 野 浩

主 事 飯 島 哲 也

主 事 風 間 栄 一

主 事 小 林 和 子

専門主事 清 水 武

専門員 中 殿 章 子

専門員 山 田 美 弥 子 (調査員)

専門員 寺 島 孝 典 (調査主任)

専門員 西 澤 真 弓

専門員 小 野 由 美 子

専門員 永 井 洋 一 (平成7年度)

専門員 堀 内 健 次 (平成7年度～)

専門員 藤 田 隆 之 (平成7年度～)

調 査 員 青木善子・矢口栄子・勝田智紀

調査参加者 勝田千亜紀・小林愛子・沢山ふじ子・徳成秋子

整理参加者 池田見紀・岡沢治子・小泉ひろ美・徳成奈於子・西尾千枝・向山純子・武藤信子

測 量 委 託 有限会社写真測図研究所

調査を遂行していくうえにおいて、多くの方々より多大なるご支援ご助力をいただいている。バックホーの手配やプレハブハウスの設置など様々な面でご協力を賜った、北野建設株式会社の関係諸氏、また地権者である坂田木材株式会社、調査に参加していただいた発掘作業員の皆様には感謝申し上げます。

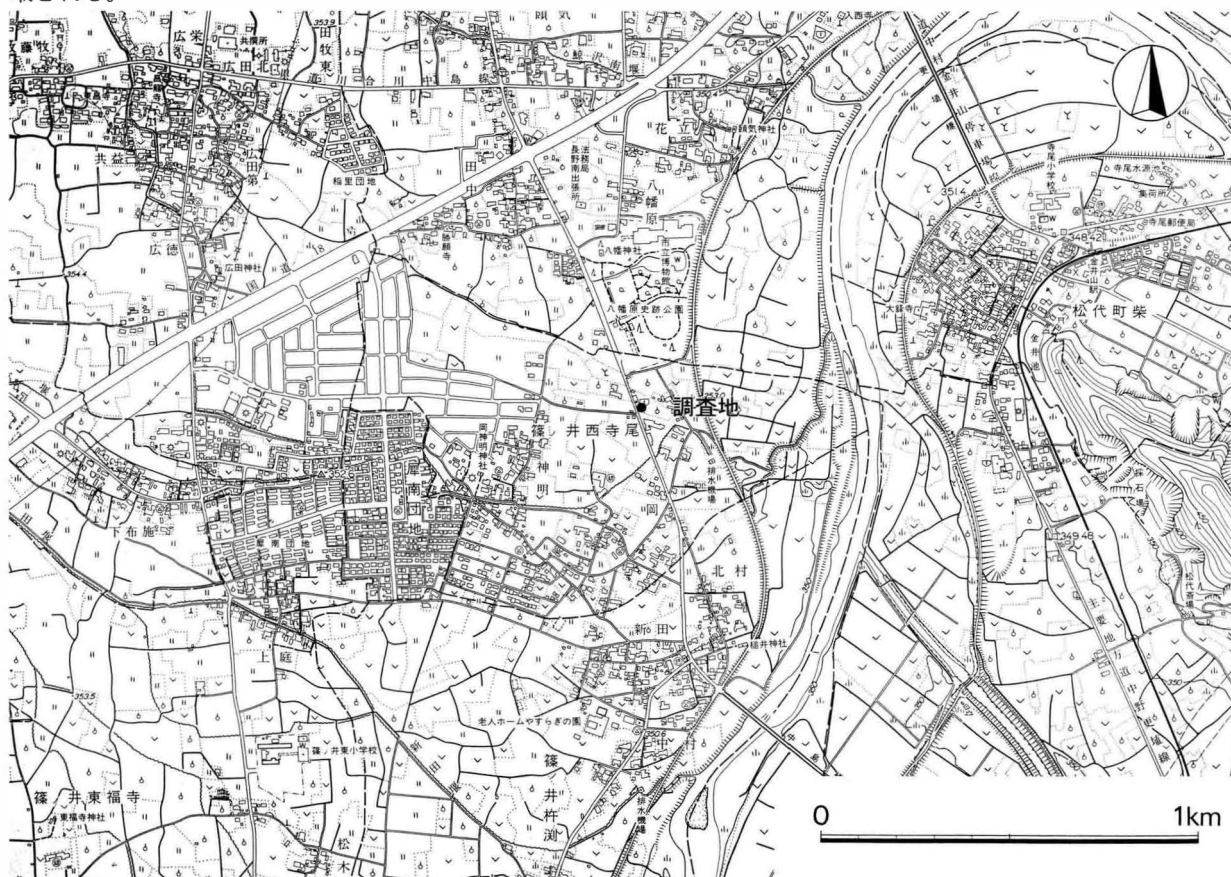
## 第II章 調査成果

### 第1節 調査区の位置と概要

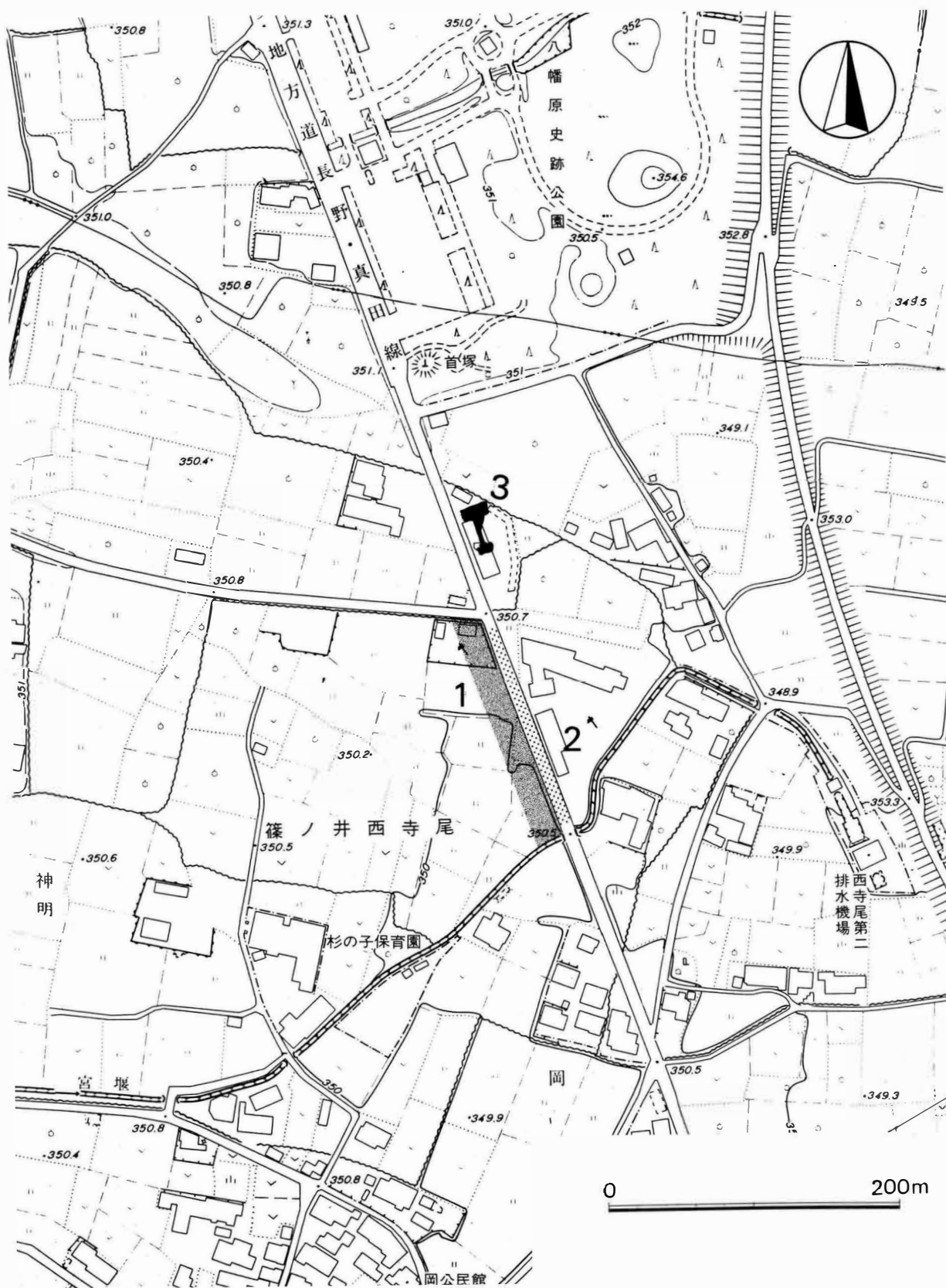
川中島扇状地扇端部に位置する橐河原遺跡は、主要地方道長野真田線道路改良事業における事前の確認調査の際に新たに発見された遺跡で、平成4～5年度に発掘調査を実施し、奈良時代から平安時代にかけての集落遺跡が確認された。平成4年度の発掘調査においては、30軒の住居跡のほか、土坑、井戸跡などの遺構が認められ、続く平成5年度発掘調査では、平安時代を中心とした住居跡25軒、掘立柱・礎石建物跡3棟、土坑、溝跡、井戸跡などが検出されている。

土層序は、地表面から約80cmが道路改良あるいは造成などによる盛り土（第1層）となっており、その下に旧水田の灰褐色粘土質土層（第2層）が10cm程堆積し、その下層には厚さ約20cmの遺物包含層（第3層）が確認できる。今回の調査での遺構検出面は第4層上面であるが、現地表から深さ110cmを測る黄褐色砂層をその基準とする。調査中において下層の堆積状況を確認するために設けた試掘坑の土層断面観察では、第4層の堆積は50cmあり、第5層は白色の粗い川砂がその下約1mにわたって堆積していることが判明した。第5層は下層に行くにしたがって拳大ほどの礫が多く混入しているが、同一層としてとらえることのできるものである。

本報告の調査地は以前調査した地点より北側となり、ガソリンスタンドの建設に伴うオイルタンク埋設箇所部分のみの小規模調査ではあったが、住居跡3軒と土坑が3基確認された。調査範囲が限られていたため全体を検出できた遺構は少ないが、遺跡の広がりを確認する上で重要な調査であった。遺跡の北西には田中沖遺跡が展開しており、これまでの周辺の調査から川中島扇状地内の微高地上を利用した、帯状に分布する各遺跡の状況が看取される。



第1図 調査地点位置図 (1:20000)



第2図 既往調査地及び調査位置図

1. 平成4年度      2. 平成5年度      3. 平成7年度（本報告）



## 第2節 調査区周辺の環境

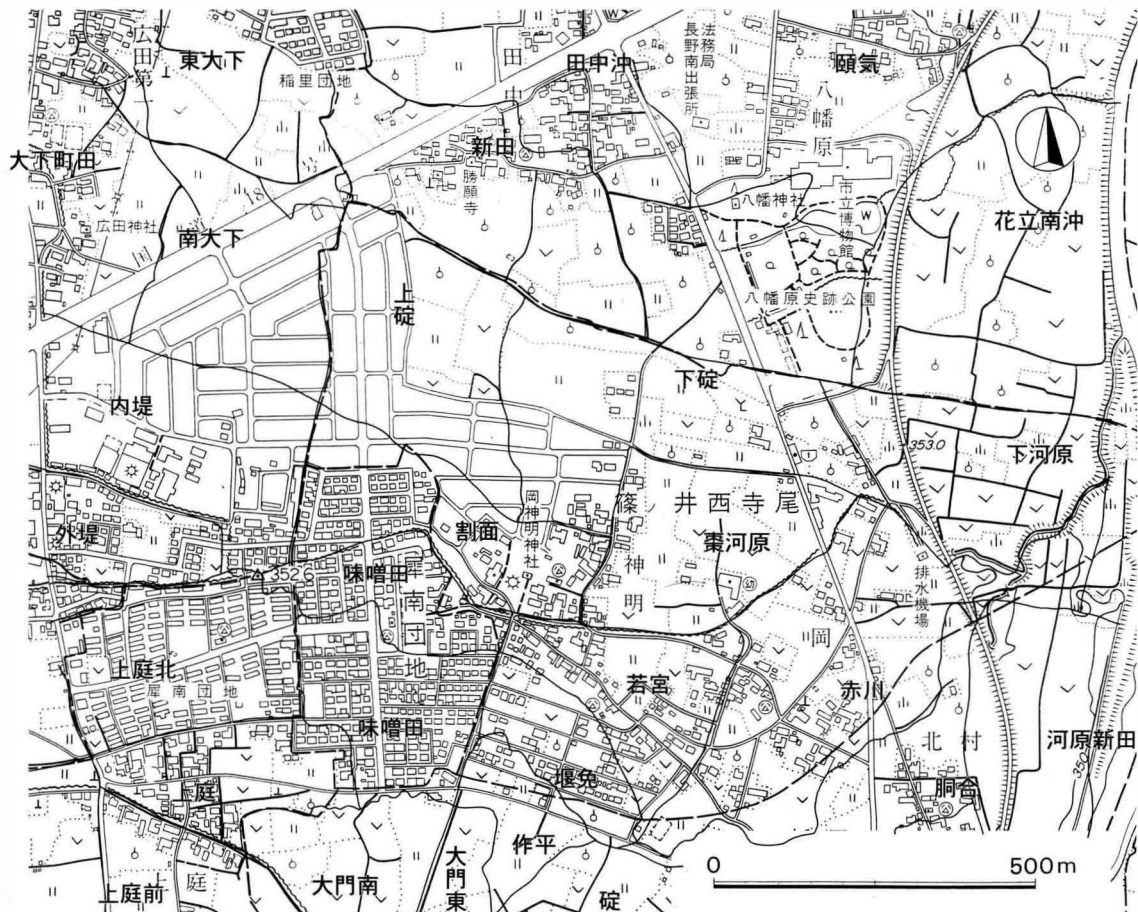
川中島扇状地に確認されている遺跡のそのほとんどが扇端部の微高地上に位置している。従来その扇状地の遺跡分布は、古代の更級郡に見られる麻績・村上・當信・小谷・更級・清水・斗女・池・水鉋の9つの郷名に照らし合わせて考えたとき、密であるとは言い難い。

従来それほど頻繁に発掘調査が実施されておらず、埋蔵文化財の存在が希薄であるとされてきた川中島扇状地には、未だ発見されていない遺跡が数多くあるものと思われる。近年になって当該地周辺にも開発事業が集中して実施されるようになり、これら開発事業に先立つ確認調査によって新しく発見された遺跡もあり、発掘調査も随時行われるようになった。棗河原遺跡も例外ではなく、これまでその存在は認識されていなかったが、平成4年度に着手された主要地方道長野真田線道路改良事業に伴う事前の確認調査において、新たに発見された遺跡である。当遺跡のすぐ北側に位置する田中沖遺跡でも同時期の遺構が確認されていることから、両遺跡の関連も今後考慮に入れるべきであると思われる。

ここでは川中島扇状地上に展開する遺跡で、これまで発掘調査の実施された棗河原遺跡以外の遺跡についての概観を述べ、周辺の環境とする。

### 2 田中沖遺跡

川中島扇状地の扇端部ほぼ中央に位置する。古墳時代後期から平安時代にかけての複合遺跡で、昭和53年度から国道18号線篠ノ井バイパス建設事業に伴い1,800㎡の発掘調査が実施され、住居跡30軒、土坑8基、溝跡3本、柱穴群などが検出された。その後昭和63年・平成元年度に、長野市神明広田土地区画整理事業に伴い4,100㎡の発掘調査が行われた。古墳時代後期から平安時代の住居跡106軒のほか、溝跡29本、柱穴群13か所を確認してい



第3図 周辺字図

る。さらに、平成6年度から主要地方道長野真田線道路改良事業に伴う発掘調査が実施されており、現在も継続して調査が行われている。古墳時代後期の集落としては、松代町の大室古墳群との関連も考えられる。また平安時代後期に比定される住居跡より獣脚付鼎型土製羽釜が出土しており、松代町村北遺跡からも同様のものが出土していることも注目され、ほかにも馬具の鍔金具や八稜鏡が出土している。

参考文献：長野市教育委員会1980『田中沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第7集

長野市教育委員会1991『田中沖遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第12集

### 3 田牧居帰遺跡

川中島扇状地の扇端部寄り、田中沖遺跡の北西約1kmのところのところに位置する。平成4年度に長野県住宅供給公社稲里住宅団地造成事業に伴い3,000㎡が発掘調査され、奈良時代から平安時代にかけての住居跡12軒、土坑27基、溝跡28本、掘立柱建物跡3棟、柱穴群が検出されたほか、水田跡様遺構も確認されている。当遺跡は小規模集中型の集落遺跡で平安時代前半の住居が主体を占める。特筆すべき遺物としては、長脚の付く須恵器の杯、刀子や鉄鎌などの鉄製品のほか、平安時代後期の遺構付近から出土した瓦塔片や裏面に線刻をもつ陶硯もあり、このことから仏教関係遺跡あるいは役所的施設の存在も予想される。

参考文献：長野市教育委員会1993『田牧居帰遺跡』長野市の埋蔵文化財第52集

### 4 上九反遺跡

川中島扇状地中央やや北寄りに位置し、平成6・7年度に稲里中央土地区画整理事業に伴う発掘調査が実施され、古墳時代後期から中世に至る遺構を確認した。平成6年度の調査では古墳時代後期の住居跡2軒と土坑1基が検出されたほか、平安時代の住居跡11軒、土坑5基、溝跡10本などが確認されている。遺跡の南東部は田牧居帰遺跡と同じ微高地上にあるものと考えられ、今後川中島扇状地の遺跡を概観する際この2遺跡の関わりを考慮する必要がある。報告書は平成8年度刊行予定である。

### 5 南宮遺跡

川中島扇状地の扇端部、田中沖遺跡の南西約1.3kmのところのところに位置する平安時代後半期の集落遺跡である。

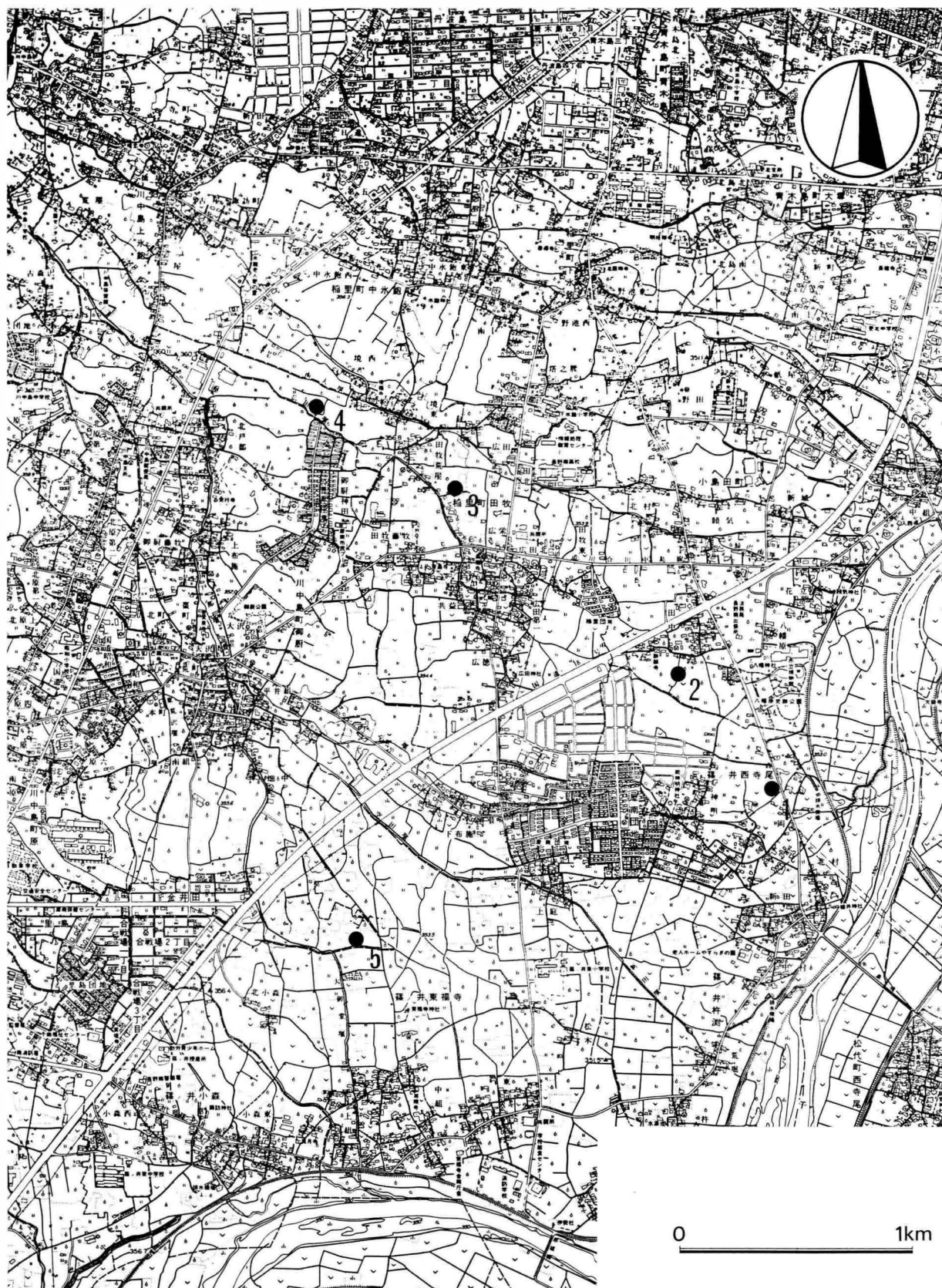
平成3年度に市道五明西寺尾線建設事業に伴う発掘調査が行われ、8世紀末から12世紀初頭の遺構を確認し、長期にわたり集落が営まれた遺跡であることが明らかになった。その後1998年（平成10年）の開催が決定となった冬季オリンピックの開閉会式場が市道五明西寺尾線沿いに建設されることとなり、これに伴って事前の確認調査を実施したところ、当初予測していた範囲を遥かに上回る大規模な遺跡の広がりを確認した。

長野冬季オリンピック開閉会式場建設工事（南長野運動公園建設事業）に伴う発掘調査は平成5年度に開始され、これまでに約50,000㎡の調査を実施している。10世紀末から11世紀初頭を中心とした1,000軒を越える住居跡を確認しているほか、掘立柱建物跡、土坑、溝跡、井戸跡、小鍛冶跡、柱穴群などさまざまな遺構を多数検出し調査は現在も継続中である。遺物では多量の土師器や須恵器もさることながら、一箇所の遺跡としては北信で最大の出土量となる灰釉陶器や緑釉陶器の出土も特筆され、5面の八稜鏡や土製の印、石製帯飾などの石製品に加え、紡錘車や刀剣類に代表される鉄製品や、青銅製の火熨斗など特殊遺物の出土も注目される。

南宮遺跡は川中島扇状地上でも比較的平坦部を広くもつ微高地上に展開し、小規模な集落を営んでいたほかの遺跡とはやや様相を異にしている。その集落面積は推定で90,000㎡、住居総数は1,500軒近くにまで及ぶものと予想され、北信ではおそらく最大の規模をもつ平安時代の遺跡であると思われる。

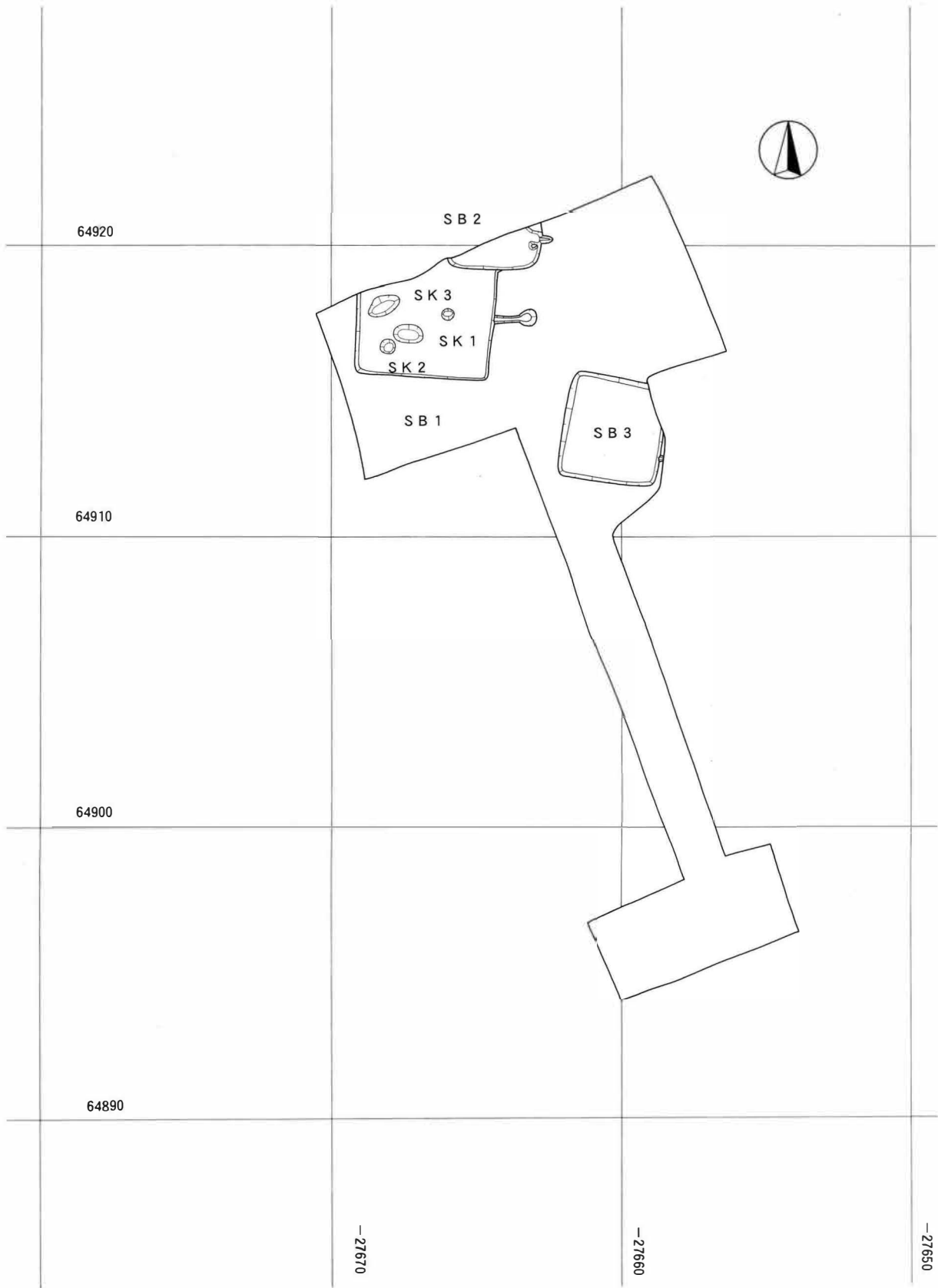
土師器や須恵器灰釉陶器に代表される夥しい量の食膳具や煮沸具・貯蔵具に加え従来の出土量を上回る緑釉陶器の出土、八稜鏡や土製印などの特殊遺物、1,000軒を越える住居の中に散見される大形の住居などの存在はこの遺跡が単なる集落にとどまらない性格を示す遺跡である可能性が高く、周辺遺跡との関係や遺跡の立地などを踏まえ、今後古代集落を検討する上で欠かせない重要な遺跡となることは言うまでもない。

参考文献：長野市教育委員会1992『南宮遺跡』長野市の埋蔵文化財第43集



1. 裏河原遺跡    2. 田中沖遺跡    3. 田牧居婦遺跡    4. 上九反遺跡    5. 南宮遺跡

第4図 遺跡分布図



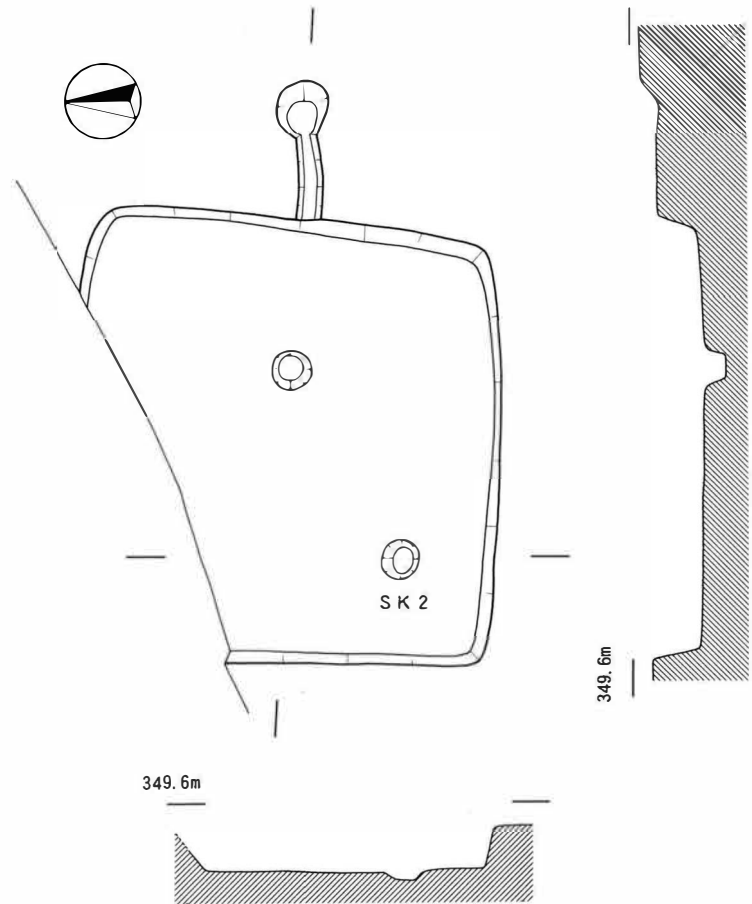
第5図 全体図 (1:400)

### 第3節 遺構と遺物

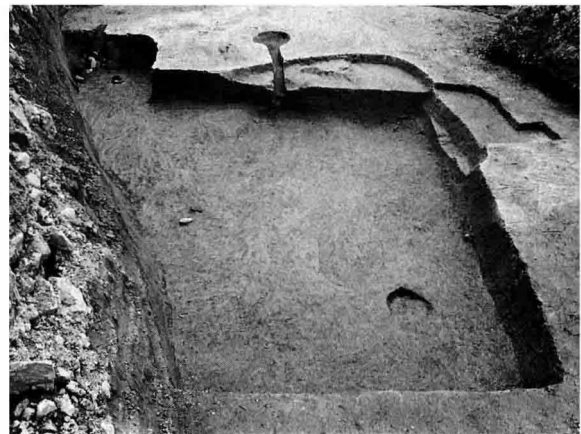
#### SB 1

北側部分約1/4が調査区外にあり、さらに北東部をSB 2に破壊され、住居覆土にはSK 1～3が掘り込まれ、床面にまで達するものもある。今回調査された遺構の中でもっとも古い遺構と考えられ、東西方向4.70m、南北方向4.40mを測る方形住居である。カマドは東側壁面の中央に位置するものと考えられる。カマド本体はおそらく住居廃絶時に破壊されたものと思われ、跡形もない。しかしながら煙道は良好に残存しており、煙道壁面には被熱の痕跡が認められる。また住居壁面にも被熱による焼土化が顕著に見られるが、床面にはその痕跡がない。床面は住居中央付近においてわずかながら堅緻となるものの、その他の部分は軟弱である。

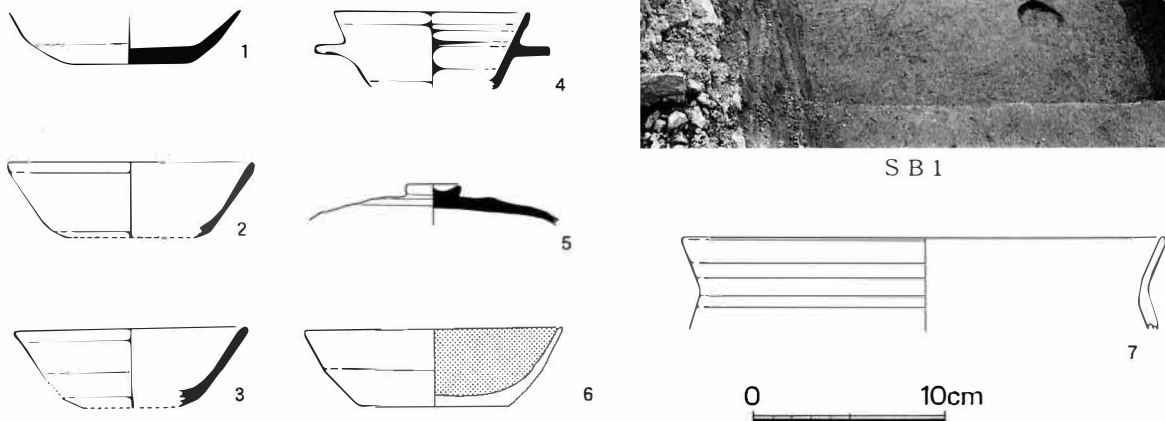
出土土器【第7図】には須恵器杯(1～3)、双耳杯(4)、蓋(5)、土師器杯(6)、甕(7)がある。その他、図化することはできなかったが、須恵器の甕も出土している。杯はロクロナデによる弱い凹凸が認められ、4は小破片ではあったが、つまみ状の突起を2ヶ対称にもつと思われる。6の内面は器面の荒れが激しく詳細は不明であるがところどころ黒色処理された痕跡が残る。底面は軽くヘラケズリされている。



第6図 SB 1



SB 1

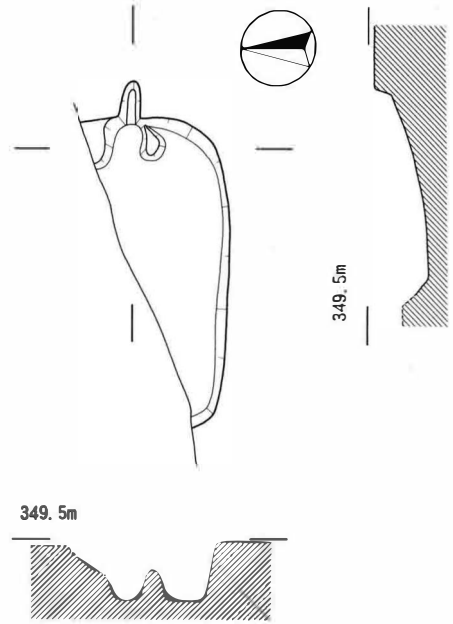


第7図 SB 1出土土器

S B 2

S B 1 と重複関係にある。住居のほとんどが調査区域外にあるため規模・形態などは不明であるが、東西方向3.30m前後を測る方形住居と思われる。カマドは東壁のかなり南に偏った位置に構築される。カマドの袖は粘土により作られ、内部には多量の土器とともに灰や炭化物、焼土が出土し、カマド内や床及び壁や袖は著しい被熱を受け、赤褐色に変色している。床面は調査区壁付近で堅緻な部分が見られるがそのほかは軟弱である。範囲内において柱穴は確認されていない。

出土土器〔第9図〕には土師器杯（1～8）、須恵器杯（9～11）壺あるいは甕（12）、灰釉陶器の長頸壺（13）がある。杯はロクロナゲによる弱い凹凸があり、1～5・8の内面は黒色処理される。このうち1・3～6の底部はヘラケズリにより調整される。10には判読は困難であるが墨書が見られる。そのほか土師器の甕なども出土しているが小さな破片が多く図化し得なかった。



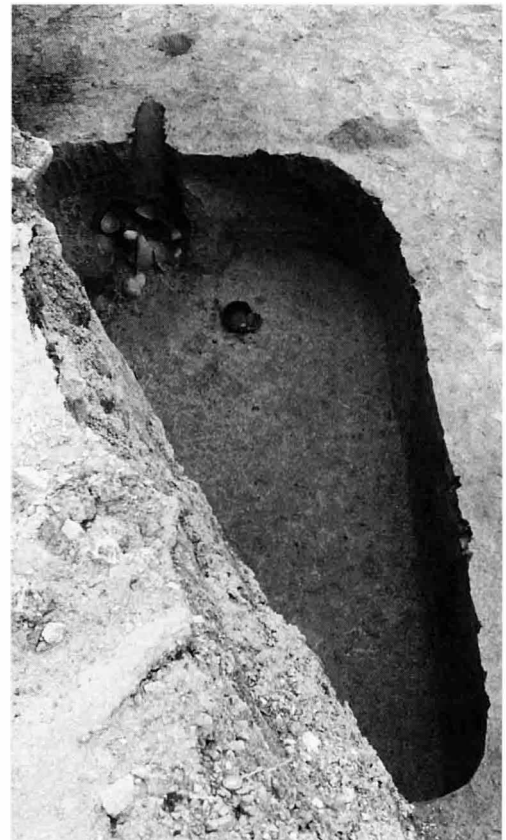
第8図 S B 2



カマド検出状況



カマド完掘



S B 2